

日本語指導推進ガイドライン

～ 多文化共生社会に向け、共に学び成長する児童・生徒の育成を目指して ～

実践編

はじめに

「日本語指導推進ガイドライン（実践編）」は、令和6年3月に作成した東京都の日本語指導の手引きである「日本語指導推進ガイドライン」の実践事例集です。

令和6、7年度「東京都日本語指導推進校」である6校及び日本語指導推進ガイドライン作成委員会の委員の取組、その他、学校や地区等の訪問先で実践されている事例を掲載しています。

これらを参考にいただき、各学校の実態に応じた取組の充実につなげていただきたいと思います。

令和6年度の東京都の調査では、日本語指導が必要な児童・生徒は、都内公立学校に6,935人在籍しており、今後も増加傾向は続いていくことが予想されます。

本書の実践が各学校に広がることで、日本語指導が必要な児童・生徒一人一人の実態に応じた指導・支援の充実が図られることを願うとともに、引き続き、本書と併せて、「日本語指導推進ガイドライン」を参考に、各学校における日本語指導の推進をお願いいたします。

令和7年3月

東京都教育委員会



日本語指導推進ガイドライン（令和6年3月）
<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/japanese/guideline.html>

目次

ページ

【特集】	
学校の組織的な取組 ～日本語指導推進校の取組から～	3
・羽村市立武蔵野小学校(4)	
・中野区立中野東中学校(6)	
・都立田柄高等学校(8)	
日本語指導担当教員の1年 ～日本語指導推進校の取組から～	10
・世田谷区立上北沢小学校(11)	
・江戸川区立葛西中学校(13)	
・都立青梅総合高等学校(15)	
「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」 モデル地区の実践報告	17
【実践例】	
以下の実践例は、「日本語指導推進ガイドライン」の項目に沿って示しています。	
日本語指導推進校や地区等の取組	21
第1章 外国人児童・生徒等を対象とした日本語指導の特徴等への理解	(22)
第2章 日本語指導実施に向けた環境整備	(27)
第3章 日本語指導が必要な児童・生徒の受入れ体制	(37)
第4章 継続的なアセスメントと個別の指導計画	(42)
第5章 日本語指導プログラムとコース設計	(48)
第6章 専門性の向上と理解促進	(52)
「タイプ別に見る日本語指導モデル」指導の実際	62

【特集】学校の組織的な取組 ～日本語指導推進校の取組から～

外国人児童・生徒等への指導・支援は、担当教員のみが行うのではなく、全ての教職員が当該児童・生徒への理解を深め、組織的に取り組む必要があります。日本語指導推進校では、管理職や日本語指導担当教員等が中心となって、学校の組織的な体制づくりに取り組んでおり、学校の特色を踏まえた1年間の取組を示しています。

【掲載した学校】

羽村市立武蔵野小学校 中野区立中野東中学校 都立田柄高等学校

【ガイドラインとの関連に見る主な取組】

- ☑校内体制の構築
- ☑特別の教育課程等の編成・実施
- ☑アセスメントによる児童・生徒の実態把握
- ☑日本語指導担当教員の育成

～日本語指導推進校～

【目的】

日本語指導が必要な児童・生徒が、必要な日本語の能力や学力等、社会で生きていくための基礎を養い、自立するために必要な力を身に付けられるよう、一人一人の実態に応じた日本語指導に取り組み、その実践を事例として広く周知を図っていく。

【令和6年度推進校】

世田谷区立上北沢小学校 羽村市立武蔵野小学校 中野区立中野東中学校 江戸川区立葛西中学校 都立田柄高等学校 都立青梅総合高等学校

【推進校での取組】

「日本語指導推進ガイドライン」の内容に基づき、以下の実践を実施する。

- (1) 校内体制の構築
- (2) アセスメントによる児童・生徒の実態把握
- (3) 特別の教育課程等の編成・実施
- (4) 個別の指導計画の作成・活用
- (5) 東京都の教材を活用した授業
- (6) 日本語指導担当教員の育成

取組の概要

学校の概要

- 本校は、米軍横田基地の住居が学区に隣接し、外国人のコミュニティなどがある。
- 一定数の外国籍の児童が在籍しており、在籍児童のうち13名が、日本語指導教室を利用している。
- 市の援助を受けて、放課後オンラインで日本語指導を受けている児童が2名いる。
- 指導・支援を行き届かせるためにも、常に取組を見直し、授業等の工夫改善に取り組んでいる。
- 日本語指導担当教員は加配教員1名である。市内には同様の日本語指導教室が他に3校あり、年間4回の日本語指導コーディネーター連絡会において、研修や情報交換等が実施されている。

取組のポイント

- 全教職員が国籍に関わらず、子供の困り感に寄り添い、必要とする支援を積極的に行っていく。
- 様々な国の文化や人々と触れ合い、知るだけではなく、それを受け入れる豊かな心情が育つ機会を設定している。
- 羽村市教育委員会による年間4回の日本語指導コーディネーター連絡会では、市内4校の日本語指導担当教員が集まり、授業研究や協議、各校の取組についての情報交換等を通して、各校における日本語指導の充実を図っている。
- 近隣の日本語指導を行っているNPO施設などを訪問し、外国人児童生徒等に対する理解の促進と日本語指導の方法について学び、校内で共有している。

日本語指導の充実に向けて（校長から）

- 「対話と協働」を大切に、児童の立場に立ち、日本語指導担当教員と学級担任が連携を密にするとともに、子供の使用言語が話せる外国語コーディネーターの意見も参考に、児童・保護者に寄り添いながら安心感を与えられるようにしている。
- 保護者とのやりとりが日本語だけでは難しい部分があるので、外国語コーディネーターとも連携を図り、日本語指導の趣旨について丁寧に説明し、理解を得ている。
- 教科指導の進度や在籍学級における困り感を毎回共有しながら、指導につなげている。日本語指導担当教員から学級担任への授業後のフィードバックも即日実施している。

1年間の流れ

月	項目	内容等
4月	職員会議	本校における日本語指導教室について
	日本語指導関係者会議①	日本語指導が必要な児童の把握、情報共有
	アセスメント	実態把握し、授業支援や日本語指導教室のクラス分けに活用
	日本語指導関係者会議②	今年度の指導体制について
	日本語支援員との打合せ	在籍学級での支援の在り方についての共有
5月	日本語指導関係者会議③	個別の指導計画の作成・確認
	運動会	必要に応じて、日本語指導の時間に日本語に係る課題を取り上げて指導
6月	人権講話①（児童対象）	「多文化共生社会に生きる」（ふれあい月間）
7月	DLA実施	日本語能力の共有と指導・支援の充実に向けて情報交換
	日本語指導関係者会議④	1学期の成果と課題の共有
	通知表の作成	1学期の成果の共有
	三者面談（保護者対象）	個別の指導計画を活用しての成果と課題の確認
8月	日本語指導関係者会議⑤	2学期の日本語指導についての共有
	研修会①（教員対象）	日本語指導の手だてと実際（外部機関訪問）
10月	日本語指導関係者会議⑥	個別の指導計画の見直し
11月	人権講話②（児童対象）	「これからの国際社会を生きる」（ふれあい月間）
	学習発表会	必要に応じて、日本語指導の時間に日本語に係る課題を取り上げて指導
12月	研修会②（教員対象）	個に応じた支援の充実について
	日本語指導関係者会議⑦	日本語指導の「特別の教育課程」の編成について
1月	特別の教育課程の編成	次年度の指導に向けた教育課程の作成
2月	新入生保護者会	本校の日本語指導教室についての紹介
	アセスメント	日本語の上達度の確認と次年度のクラス分け資料の作成
	職員会議	本年度の日本語指導教室と次年度の体制について
3月	幼稚園・保育園の聞き取り	幼稚園・保育園等の担当者からの情報共有
	日本語指導関係者会議⑧	成果と課題の共有と次年度の日本語指導について

取組の実際

1年間の取組から

4月 職員会議

内容：本校の日本語指導教室について全教職員で共通理解を図る。

- ・担当教諭
- ・児童数、在籍学級
- ・1年間の大まかな流れ
- ・学級担任として連携していくこと など

方法：職員会議の議題の一つとして設定

7月 個人面談

内容：三者面談において情報共有を図る。

- ・個別の指導計画の確認と学習の様子（1学期）の報告
- ・家庭での様子と要望などについての共有

方法：保護者、学級担任、日本語指導担当教員による三者面談

2月 新入生保護者説明会

内容：新入生保護者説明会において、特別支援教育などと一緒に日本語指導教室の紹介を行う。

- ・対象者について
- ・取組について

方法：新入生保護者説明会の中に項目立てしての紹介

- ・該当者数は少ないが、学年の保護者に広く知らせることで、多方面からアプローチをかけてもらえるようにする。

日本語指導関係者会議

委員：日本語指導担当教員、日本語指導コーディネーター、教務部教員、管理職、場合により、該当児童の学級担任、外国語コーディネーターも出席

内容：取り出し指導対象児童の確認（4月）

取り出し指導の成果と課題の確認（7月、10月）

次年度の取り出し指導の対象児童入れ替え等について検討（3月）

【実際の様子】

- ・職員会議
日本語指導教室について、全教職員で共通理解



- ・新入生保護者説明会
日本語指導教室の紹介



日本語指導教室の対象となる児童の保護者だけでなく、日本語教室の存在を広く知ってもらう機会としている。

キーワード
情報共有 豊かな心 保護者

ガイドライン
2-1

今後に向けて

○取り出し指導だけでなく、在籍学級においても授業での関わりを広げるなど、日本語指導担当教員が活躍できる体制づくりを検討する。

○初期指導に重点を置く指導体制の在り方や具体的方策について検討をしていく。

○校内において、日本語指導についての理解を深めさせるとともに、DLAが実施できる教員を少しずつ増やしていく。

○日本語指導担当者が変更になった場合でも、これまで積み上げてきたものを活用し、継続的に指導できるよう、より一層の組織化を図っていく。

○児童の実態が日本語理解からくる課題なのか特別支援からの課題なのかを判断するための方策を両学級の担当者の視点から協議・検討する。また、必要に応じて、特別支援学級への通級についても協議・検討する。

取組の概要

学校の概要

- 平成30年に中野区立第三中学校と中野区立第十中学校が統合されて開校した。中野区立第三中学校は、昭和49年から海外から帰国した「帰国生徒」の受け入れ校であった歴史から、現在も帰国生徒を受け入れている。
- 令和6年度は、生徒全体の約13%が外国人生徒・帰国生徒等であり、日本語の支援を必要とする生徒も多くいる。
- 年間を通じ、約20名の生徒が海外から転入している。

取組のポイント

- 各学年に帰国生徒コーディネーターの教員を配置するとともに、昨年度まで副校長、日本語指導担当等で構成していた「帰国適応委員会」を、今年度より「グローバル委員会」と変更し、よりきめ細かくかつ広く学校全体で取り組んでいる。
- 研修会を計画的に実施することで、教職員の理解促進を図るとともに、共通の認識で生徒の指導を行えるようにする。
- 中野区国際交流協会（ANIC）等の外部人材の協力を得ながら、きめ細かな指導・支援につなげている。
- 多様性教育の視点から、一般生徒と連携し、様々な教育活動を展開している。
- 「帰国生徒等保護者会」を開催し、保護者の不安を軽減し、連携している。

日本語指導の充実に向けて（校長から）

- 年度初めに教員に対し、帰国生徒等対応の実態と個別の生徒理解研修会を行い、学校全体で取り組む土壌をつくる。
- ANICでの日本語学習の時間を中学校教員が見学し意見交換することや、本校でのANIC指導者による日本語指導の際、本校教員が見学し指導方法を学ぶ。
- 加配教員およびコーディネーターによる校内研修で全教員がDLAについて学ぶ。
- 東京都による「日本語指導理解のための研修」を実施し、動画でいつでも学べる環境を整備する。
- 上記の取組を踏まえ、生徒への指導・支援について協議したり、共通理解を図ったりする機会を設け、学校としての方針を明確にした。

1年間の流れ

月	項目	内容等
4月	アセスメント	実態把握し、授業支援や日本語指導の計画に活用
	日本語指導ガイダンス	本校の日本語指導の沿革、児童の実態、受け入れまでの流れ、実際に行っている日本語指導の種類
	グローバル委員会	今年度の指導・支援の方向性の確認
	帰国生徒保護者会	本校の日本語指導について、卒業生保護者からの体験談 PTAからの活動説明
	日本語指導校内研修①	DLAとは、日本語指導を行う視点等について
8月	グローバル委員会	個別指導計画整理 9月以降の日本語指導について
	グローバル委員会	9月転入生の掌握
9月	日本語指導校内研修②	中野区国際交流協会（ANIC）での指導について 在籍学級における指導・支援の手立てについて
	帰国生徒保護者会	9月転入向け本校の日本語指導について、 卒業生保護者による卒業生の進路決定から近況についてのお話
10月	都立入試の仕組説明	資料配布・説明 東京都説明会案内
12月	日本語指導校内研修③	日本語指導推進校としての日本語指導理解のための研修
	都立入試資格審査	都立入試資格審査
3月	アセスメント	次年度のクラス分けに活用
	帰国生徒保護者会	3年生保護者より帰国生徒の受験の取組について
	グローバル委員会	次年度の指導・支援の方向性の確認
通年	通常授業への支援	通常の授業観察やサポートを通して早期順応
	ANICへの学校情報提供	行事予定表送付・授業観察・日本語指導見学
	面談の実施	コーディネーターによる個人面談・保護者連絡（学級担任）
	国際交流教室の実施	月1回放課後にALTを中心とした国際感覚保持活動
	「やさしい日本語」対応	定期考査のルビふりや大切な通知の対応
	英語対応相談員配置	英語が話せる心理士資格のある相談員を配置し、相談体制確保

取組の実際

1年間の取組から

- 4月 日本語指導ガイダンスの実施（教員向け）
内容：本校での日本語指導の沿革、日本語指導が必要な生徒の実態及び受入れまでの流れ、実際の日本語指導の種類等
- 5月～11月 研修の受講
内容：DLA講習と日本語指導理解促進セミナーを受講
対象：日本語指導担当教員
- 6月 日本語指導校内研修①
内容：DLA講習と日本語指導理解促進セミナーの還元研修の実施
- 8月 日本語指導担当教員が、生徒の個別の指導計画を作成および整理
内容：中野区国際交流協会（ANIC）からの報告を参考に、生徒の日本語学習の進捗状況の確認、個別の指導計画を整理・見直し
- 9月 日本語指導校内研修②
講師：中野区国際交流協会 多文化キッズコーディネーター
内容：①中野区国際交流協会（ANIC）での指導について
②在籍学級における指導・支援の手だてについて
- 12月 日本語指導校内研修③
講師：東京都教育委員会 指導主事
内容：DLAの実施と結果の活用について

日本語指導担当者会議（グローバル委員会）

- 委員：日本語指導コーディネーター（各学年1名）
内容：年間指導計画、仕事分担確認、取り出し指導の内容や方法（4月）
個別の指導計画の整理・見直し（8月）
研修会の実施（9月）
取り出し指導の対象生徒の入れ替え等について検討（3月）

【実際の様子】

- ・ 個別の指導計画・整理（8月）

- 日本語指導校内研修①（6月）

- ・ 日本語指導校内研修②（9月）



【グローバル委員会の様子】



キーワード
ガイダンス 関係機関

ガイドライン
2-1

今後に向けて

○本校は、区内の帰国生・外国人生徒等を積極的に受け入れている。そのため、日本語指導担当教員だけでなく、全教職員で受入れ体制や指導内容についての共通理解を図り、日本語指導を必要とする生徒に学校生活のあらゆる場面で適切な指導・支援を継続的に行える体制の強化を図る。

○中野区国際交流協会（ANIC）との連携をより一層強化し、生徒の日本語指導を行う。

取組の概要

学校の概要

- 本校は在京外国人生徒対象の入試のある普通科高校である。定員20名のところ、毎年多くの外国人生徒等が入学しており、つながりのある国・地域は19である。
- 令和6年度は、新入生の約4割が日本語の指導・支援を必要とする外国人生徒等であり、人数も昨年の倍に迫る。そのため、指導・支援を行き届かせるためにも今までの取組を見直しつつ、新たな実践に取り組む必要がある。

取組のポイント

- 研修会を計画的に実施することで、教職員の理解促進を図るとともに、共通の認識で生徒の指導を行えるようにする。
- 日本語指導担当者会議を定期的に設定し、生徒一人一人の成長や課題を確認し、クラス分け等を見直すなど、実態に応じた指導・支援を実施していくことで、生徒の自信ややる気につなげている。
- 外部人材の協力を得ながら、きめ細かな指導・支援につなげている。
- 部活動等も含め、教員が言葉の違いに関わらず積極的にコミュニケーションを図り、全ての生徒が学校生活で活躍できるように心がけている。

日本語指導の充実に向けて（校長から）

- 日本語指導の視点を学校の「共通言語」に！～授業改善と教員間の学び合い～
- 日本語を母語としない生徒に伝わる授業は、日本語を母語とする生徒を含めた多様な生徒一人一人に伝わりやすい授業であると確信している。
 - 私たちの取組は、生徒の学力や特性を把握し、指導を工夫するという、教員が日常的に行っているものと相違ない。学校全体で、日本語指導の視点（日本語支援の5つの視点等）を学び、個々の生徒によって異なる困り感を共有することで、教員の指導力の向上や教科を超えた教員間の学び合いが活性化することを期待している。

1年間の流れ

月	項目	内容等
4月	健康診断 アセスメント 日本語指導担当者会議①②	英語による受診案内を保健委員が作成 実態把握し、授業支援や日本語指導のクラス分けに活用 日本語指導が必要な生徒の把握、情報共有（2回実施）
5月	日本語指導担当者会議③ 人権講話（生徒対象）	取り出し指導対象生徒の検討 「多文化共生社会に生きる」（「やさしい日本語」英語字幕）
6月	体育祭・生徒会役員選挙 保健講話（生徒対象）	日本語でのスピーチに対する指導、ロールモデルの存在 「性暴力被害を防ぐためのデジタルリテラシー」（英語字幕、講師：NPO法人職員）
7月	研修会《1》（教員対象） 勉強会（生徒対象） 日本語指導担当者会議④	在留資格について（講師：入国管理局職員） 在留資格について（講師：入国管理局職員） 取り出し指導対象生徒の入れ替えの検討
8月	打合せ	外部支援者と日本語指導担当教員 2学期の指導について
9月	研修会《2》（教員対象）	日本語指導の視点を踏まえた授業改善（講師：大学教員）
10月	交流会（生徒対象） 保護者会 日本語指導担当者会議⑤ 日本語指導研究協議会	大学生（留学生）との交流によりロールモデルを学ぶ 中国語、ネパール語の通訳、外国語に翻訳した進路資料 取り出し指導対象生徒の入れ替えの検討 大学生、関係機関職員、都立高校教員が参加（放課後）
11月	日本語授業見学会 英語暗唱大会	小中高校の教員による見学と意見交換 マララ・ユスフザイの英語のスピーチ 全生徒がチャレンジ
12月	日本の伝統文化発表会 日本語指導担当者会議⑥ 研修会《3》（教員対象）	三味線、和太鼓、囲碁など学校設定科目の成果発表 取り出し指導対象生徒の入れ替えの検討 日本語指導が必要な高校生に対する母語話者のコミュニケーション（講師：大学教員）
1月	百人一首大会	ひらがなの文字と音を覚えて全生徒がチャレンジ
2月	大学生との討論会	日本語学習の成果の確認、大学での学びの理解（放課後）
3月	アセスメント 新入生説明会 日本語指導担当者会議⑦	次年度のクラス分けに活用 中国語、ネパール語の通訳の他、在校生による補助 次年度指導・支援の方向性の確認

取組の実例

1年間の取組から

- 6月 人権講話「多文化共生社会に生きる」
講師：在京外国人支援団体職員
内容：外国人生徒等の困り感を理解する。一緒に行動するためにどんなことができるかを考える。
- 7月 研修会①「在留資格を知る」
講師：東京出入国在留管理局職員
内容：在留資格の仕組み等の理解
- 9月 研修会②「明日からできる授業改善」
講師：日本語指導を専門とする大学教員
内容：大学教員及び学生による授業見学の実施。実施後授業改善について大学教員からの指導・助言
- 10月 研究協議「日本語指導研究協議会」
参加者：大学、日本語学校等外部専門機関の教員及び学生、都立学校教員
内容：参加者による授業見学後、現状と課題、改善に向けた取組等協議
- 11月 日本語授業見学会
参加者：小学校・中学校の日本語指導担当教員、都立高校教員
内容：国語（通常授業・取り出し授業）、地歴（取り出し授業）の公開、高校の授業で必要な日本語の能力や知識を共有等、日本語指導の視点から授業への助言
- 12月 研修会③「日本語指導が必要な生徒への母語話者のコミュニケーション」
講師：日本語指導を専門とする大学教員
内容：大学教員による学校での場面を想定した「やさしい日本語」ワークショップ（話し言葉、書き言葉、学校からの便り作成時のポイント）

日本語指導担当者会議（日本語指導委員会）

- 委員：日本語指導コーディネーター、国語科、地歴・公民科、数学科、理科、外国語科、1学年教員、教務部教員
- 内容：取り出し指導や放課後の日本語指導（補習）の内容や方法
取り出し指導の対象生徒の入れ替え等について検討、研修会の実施

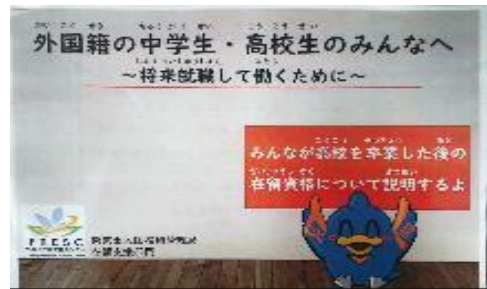
連携

【実際の様子】

- ・人権講話 支援団体（当事者）の声



- ・在留資格研修資料



放課後の日本語指導チーム

- 担当：外部コーディネーター、日本語指導講師（7名）出欠確認補佐（教員2名）
- 内容：習熟度別日本語指導について、コーディネーターは講師から報告を取りまとめ、課題を学校と共有。出欠状況により学年や校内コーディネーターが生徒面談実施。

キーワード
多様性 外部人材 連携

ガイドライン
2-1

今後に向けて

- 校内の中核となる人材を育成する。
 - ・校内研修講師
 - ・日本語指導コーディネーター
- 教科と放課後の日本語指導の連携を強化する。
 - ・年間指導計画の共有
 - ・教科書の共有
 - ・関連する内容を取り扱い知識の定着を促進
- 「取り出し」を卒業した生徒への支援を行う。
 - ・放課後の日本語指導の継続
- 課題を共有し新たな視点で方策を考えるネットワークを構築する。
 - ・異校種（小学校・中学校・特別支援学校）
 - ・小学校・中学校の日本語学級及び在京外国人生徒等募集枠のある都立高校
 - ・日本語教師を育成する大学（研修・実習受け入れ）
 - ・支援団体（当事者）
 - ・アセスメントの実施

日本語指導担当教員の1年 ～日本語指導推進校の取組から～

日本語指導担当教員は、外国人児童・生徒等が、日本語の能力の習得や学校生活の充実を図れるよう、在籍学級担任等や日本語指導コーディネーターなどの関係教職員と連携し、日本語指導を実施します。ここでは、日本語指導推進校の日本語指導担当教員によるきめ細やかな児童・生徒一人一人の実態に応じた指導の充実へ向けた取組を示すとともに、高校での日本語指導コーディネーターの組織的な取組を示しています。

【掲載した学校】

世田谷区立上北沢小学校 江戸川区立葛西中学校 都立青梅総合高等学校

【ガイドラインとの関連に見る主な取組】

- ☑アセスメントによる児童・生徒の実態把握 ☑個別の指導計画の作成・活用
- ☑特別の教育課程等の編成・実施 ☑東京都の教材を活用した授業

～日本語指導推進校～

【目的】

日本語指導が必要な児童・生徒が、必要な日本語の能力や学力等、社会で生きていくための基礎を養い、自立するために必要な力を身に付けられるよう、一人一人の実態に応じた日本語指導に取り組み、その実践を事例として広く周知を図っていく。

【令和6年度推進校】

世田谷区立上北沢小学校 羽村市立武蔵野小学校 中野区立中野東中学校 江戸川区立葛西中学校 都立田柄高等学校 都立青梅総合高等学校

【推進校での取組】

「日本語指導推進ガイドライン」の内容に基づき、以下の実践を実施する。

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| (1) 校内体制の構築 | (4) 個別の指導計画の作成・活用 |
| (2) アセスメントによる児童・生徒の実態把握 | (5) 東京都の教材を活用した授業 |
| (3) 特別の教育課程等の編成・実施 | (6) 日本語指導担当教員の育成 |

指導・支援の概要

日本語指導の概要

- 本校は日本語指導教員加配校であり、日本語指導が必要な児童が現在14名在籍している。
- 日本語指導担当教員は1名であり、週に1～3時間、個別及びグループ学習をしている。
- 令和6年度は対象13名で開始。本校の国際教室の存在をインターネットなどで知り、問合せや見学、年度途中からの編入も増えている。一人一人の児童に応じた指導をするためにも教員の指導力の更なる向上が必要である。

指導・支援のポイント

- 日本語指導担当教員が、日本語学習の始めに最近の出来事などを話す時間を設け、嬉しかったことや成長できたことを児童が自覚できるようにしたり、困っていることを相談できるようにしたりしている。丁寧な関わりをもつことで、児童の不安を和らげ、自信をもって学校生活が送れるように支援している。
- 個別の指導計画の見直しの機会を前期と後期に設定することで、児童の実態を把握し、一人一人の児童に応じた指導につなげられるようにしている。
- 日本語指導の後に時間を取り、授業の様子や伸び・課題を日本語指導担当教員が学級担任と共有することで、学級では見られない部分を学級担任に知ってもらい、児童の活躍できる場を増やし、自信につなげられるようにしている。
- 外部人材の協力を得ながらDLAを実施し、結果を個別指導に活用することで、きめ細かな指導・支援につなげている。

日本語指導の充実に向けて（日本語指導担当教員から）

- 今年度より、校内で「日本語教育推進委員会議」を開き、日本語指導担当教員が取り出し授業対象児童の状況や支援方法を説明している。また、児童理解研修（11月）や日本語指導実践事例紹介（1月）の機会に、日本語学習での取組や大切にしていることを学級担任に伝えている。本取組を通じ、児童一人一人を理解し、個々の児童の実態に応じた指導を実現することにつなげている。
- 外部講師による授業観察や日本語指導について講義していただくことで、日本語指導担当者だけでなく、学級担任等の指導力向上を目指している。

担当教員の1年

月	項目	内容等
3月	幼稚園・保育園等連絡会	幼稚園・保育園等担当者と情報交換
4月	校内連絡会	今年度の指導体制等
	世田谷区支援校連絡会	区の連絡会に出席。月一回の情報交換の機会 ※毎月実施
	日本語指導理解促進セミナー	都のセミナーに出席（日本語指導入門）
	指導の開始	
5月	DLA実施者養成講習	都の講習に出席（DLAの意義、DLAからの子どもの力の見取り方）
6月	学校公開 国際教室開放	教室の見学、相談
	DLA実施者養成講習	都の講習に出席（DLAの見取りから指導につなげる方法）
	日本語指導理解促進セミナー	都のセミナーに出席（外国人児童教育の考え方、指導法）
7月	校内連絡会	支援方法の共有
	国際理解集会	日本語指導在籍児童による外国の文化の紹介
	日本語教育研究会	都内研究会に出席（意欲的に学習に参加できる日本語指導、授業研究）
9月	2学期の指導の開始	
10月	児童理解研修	支援の必要な児童について共有
11月	日本語教育研究会	都内研究会に出席（教科につながる指導、授業研究）
	学校公開 国際教室開放	
	DLA実施者養成講習	都の講習に出席（DLA実施後の成果と課題の情報共有個別の指導計画への反映）
	国際理解集会	外国に滞在経験のある児童による文化の紹介
1月	日本語指導実践報告会	区の報告会に出席（日本語指導の実践紹介）
2月	次年度への引継ぎ準備	

指導・支援の実際

キーワード
DLA 校内委員会 他校連携ガイドライン
2-2

連携を視点とした日本語指導・支援

○学級担任との連携

- ・日本語指導担当教員が学級担任と学習内容について確認し、個別に指導した方がよい内容と、在籍学級での一斉指導の中で担当が支援した方がよい内容を相談をして決めている。
- ・日本語指導担当教員が学級担任と日本語指導教室での児童の生活や学習の様子について連絡を取り合い、指導後の学習の成果や課題など、教室では見られない部分を学級担任に知ってもらうようにしている。

○アセスメント（DLA）の実施

- ・日本語指導担当教員が、東京都教育庁が実施するアセスメントの実施を見学。評価検討会議に参加し、DLAの実施方法を学ぶ。
- ・DLAの結果については、学級担任、保護者、管理職と共有し、学級担任や保護者等の認識との違いを確認する。改めて児童の日本語の能力を把握し、指導・支援の方針を確認するとともに、日本語指導担当教員が指導計画の見直しをする際の資料の一つとしている。

○他の支援校との連携

- ・世田谷区帰国・外国人相談室や支援校（小学校3校・中学校1校）との情報交換を毎月行い、日本語指導担当教員の学校を超えたネットワークづくりに努めている。
- ・様々なケースにおける児童の指導方法や教材等の情報交換を行い、本校での指導に生かしている。
- ・中学校での帰国生徒等の苦勞や、高校進学への心構え等の支援方法を聞き、小学校での指導が中学校や高校への進学にどのようにつながっていくのかを考えるよい機会となっている。

【実際の様子】

- ・支援校との連携
帰国・外国人教育相談
だより（月1回発行）



- ・アセスメント
（DLA）の実施
フィードバック
の様子（10月）



日本語指導担当者会議（日本語指導推進委員会）

委員：日本語学級担当教員、在籍学級担任、養護教諭、管理職

内容：日本語指導担当教員を中心に、取り出し指導の内容や方法の共有
取り出し指導の対象児童の状況等について検討

今後に向けて

- 今年度同様、アセスメント（DLA）を実施し、児童の日本語の能力の把握等に基づく、指導・支援計画を作成する。
- 区内の支援校へDLAの実施方法を紹介したり、実施時に見学する機会をもったりするなど、各校でDLAを実施できる体制をつくっていく。
- 国際教室での児童の様子から明らかになった内容を基に、児童理解研修を実施していく。
- 国際教室での取組に対して、校内の教職員による理解を深めてもらえるよう、具体的な日本語指導の方法や、在籍学級でも活用できる取組を紹介する機会をもつ。

指導・支援の概要

日本語指導の概要

- 本校は日本語学級設置校であり、近隣の11校の中学校から通級している生徒が37名、校内の生徒が2名在籍している。本校は併設型小・中学校で、小学校も日本語学級設置校である。
- 日本語指導担当教員は3名で、各担当者の持ち味を生かせるよう、生徒の使用言語、日本語の能力等により、担当者を決定している。
- 令和6年度は27名で指導を開始したが、転入等の生徒により増加傾向である。指導・支援を行き届かせるためにも取組を見直し、授業等の工夫改善に取り組む必要がある。

指導・支援のポイント

- 入級時には、日本語指導担当教員が、生徒の来日の経緯や中学校卒業後の進路への考えを聞き取り、指導計画を立てる際の参考にしている。小学校から継続して通級する生徒については、中学校進学前から引継ぎを行うことで、入級に向けた生徒情報の把握や指導計画を立てる際の参考にしている。
- 外国につながる生徒は、日本の学校制度や入試制度などについて知らないことが多く、必要な情報にもアクセスすることが難しい。そのため、日本語学級では早い時期から進路に関する指導を始める。
- 日本語学級の指導では、生徒の進路希望に応じて、日本語指導、教科指導、入試対策を行う。英語での作文練習にも可能な限り対応する。

日本語指導の充実に向けて（日本語指導担当教員から）

- 日本語学級の進路指導では、在籍校との連携を大切にしている。日本の学校制度や上級学校の種類、入試制度等について正しく知った上で、生徒が自らの進路について考えることが進路実現の第一歩になると考えている。
- 在籍校では、進路説明会や進路希望調査、進路面談などの様々な取組が行われているが、外国につながる生徒や保護者には難しい内容が多い。日本語指導担当教員は、在籍校ではどのように指導しているのか、日本語学級でできる支援は何かなど、学級担任とコミュニケーションを取りながら指導している。

担当教員の1年

月	項目	内容等
3月	小中日本語担当者連絡会	小学校日本語指導担当者と情報交換
	日本語教育研究会	都内日本語学級設置校の情報共有（進路決定状況について）
	次年度入級面談開始	小学6年生を中心に入級予定児童・生徒と保護者との面談開始
4月	日本語担当者会	日本語指導の方針、スケジュール等について
	在籍校と連絡	新学級担任との挨拶、日本語学級の説明、時間割の確認
	職員会議	日本語指導が必要な生徒の指導・支援について
	学年集会	日本語学級の紹介、日本語を学ぶ生徒の理解について
	日本語教育連絡協議会	区内担当者連絡会、情報交換
5月	指導開始	通級開始前に入級面談を実施
	日本語教育研究会	都内日本語学級設置校との情報共有、研修予定について
	日本語指導研修	都の日本語指導者研修に出席（DLA実施者養成講習1）
6月	施設見学	都立高校見学
	日本語指導研修	都の日本語指導者研修に出席（DLA実施者養成講習2）
7月	日本語指導連絡会	管理職、学級担任、日本語指導担当による日本語指導部会
	夏季休業補習	日本語指導・夏休みの宿題支援
8月	日本語指導研修	都の日本語指導者研修に出席（初級日本語指導について）
	日本語教育連絡協議会	区内担当者・在籍校研修会（在籍校での支援について）
9月	区こどもアンケート	区担当者との打ち合わせ、日程調整、アンケート実施
10月	アセスメントの実施	DLAの実施、学級担任への結果報告、学習の記録の作成・送付
11月	校内研修会	日本語指導担当者研修会（個別の指導計画について1）
	日本語指導研修	都の日本語指導者研修に出席（DLA実施者養成講習3）
	日本語教育研究会	都内日本語学級設置校の情報共有（進路希望状況等について）
12月	校内研修会	日本語指導担当者研修（個別の指導計画について2）
	職員会議	情報共有（在籍校における支援について）
1月	日本語教育連絡協議会	区内担当者連絡会、情報交換
	次年度入級調査開始	区担当者、小学校学級担任、小学校日本語指導担当者との連絡
2月	授業見学会	区内中学校の日本語学級と相互授業見学

指導・支援の実践

連携を視点とした日本語指導・支援

○在籍校との連携

- ・入級時には管理職や学級担任と連絡を取りながら、入級面談日や通級曜日を決定する。時間割決定後は学校ごとの通級時間割を送付する。
- ・日本語指導担当教員は、学習内容や生徒の様子、宿題、通級予定等を記載した通級記録を毎回作成し、連絡ファイルに綴じる。生徒はファイルを学級担任に提出し、学級担任は学級での様子や日本語学級で支援してほしい内容等を記入する。
- ・校務支援システムを活用し、進路や外国人生活支援に関する資料や日本語学級通信を送付したり、在籍校の行事予定表を送ってもらったりしている。
- ・行事や進路関係の説明等など、学級担任と連絡を取りながら日本語学級でも支援する。

○校内の連携

- ・新入生の校内めぐりでは、日本語学級を紹介する。また、学年集会等では、日本語を学ぶ生徒への理解を促す講話を行うとともに、日本語指導担当教員が内容についてサポートする。
- ・定期考査等におけるルビ振り希望調査を配布し、集約したものを職員会議で共有する。
- ・在籍学級における支援・配慮についての校内研修を行う。

○区内日本語学級設置中学校との連携

- ・日本語連絡協議会（区）や中学校日本語教育研究会（都）等で情報交換を行う。
- ・Teamsや校務支援システムを活用し、資料や情報を共有する。
- ・相互に授業見学を行い、日頃の課題や指導の工夫について話し合う機会を設定している。

○小学校との連携

- ・小学校から引き続き中学校で日本語学級へ通級する生徒については、3学期末に日本語の能力、学習の様子などの情報を小学校の教員から引き継いでいる。
- ・生徒の指導や授業、学級の状況について、気軽に話せる関係ができています。

【実際の様子】

●通級記録

令和6年度 江戸川区立葛西中学校 日本語学級 通級記録

生徒氏名	通級日	月	日	（ ）	登校時刻	:	下校時刻	:
校時・担当	学習内容	生徒の様子			☆ 宿題・持ち帰			
校時								
担当								

●定期考査等のルビ振り希望調査（一部）

令和6年度 江戸川区立葛西中学校 日本語学級 定期考査等のルビ振り希望調査（一部）

日本語学級では、日本語を学ぶ生徒への理解を促す講話を行うとともに、日本語指導担当教員が内容についてサポートする。

定期考査等におけるルビ振り希望調査を配布し、集約したものを職員会議で共有する。

在籍学級における支援・配慮についての校内研修を行う。

日本語連絡協議会（区）や中学校日本語教育研究会（都）等で情報交換を行う。

Teamsや校務支援システムを活用し、資料や情報を共有する。

相互に授業見学を行い、日頃の課題や指導の工夫について話し合う機会を設定している。

小学校から引き続き中学校で日本語学級へ通級する生徒については、3学期末に日本語の能力、学習の様子などの情報を小学校の教員から引き継いでいる。

生徒の指導や授業、学級の状況について、気軽に話せる関係ができています。

日本語指導部会

委員：日本語指導担当教員、学級担任、管理職

実施時期：7月・11月

内容：・日本語指導担当教員：取り出し指導の内容や方法、学習状況の共有
・学級担任：学級での様子や課題の共有
・今後の指導方針について検討

キーワード
在籍校連携 情報提供

ガイドライン
2-2

今後に向けて

- 在籍校との連携の充実を図る。
 - ・在籍校訪問や学級担任による日本語学級訪問
 - ・個別の指導計画を作成及び学習目標や支援の共有
 - ・在籍学級における支援の充実
 - ・在籍学級において、生徒が日本語学級で取り組んだこと等を発表する機会の充実
- 区内日本語学級設置中学校と連携を図る。
 - ・区の教育委員会
 - ・連携型等を踏まえた個別の指導計画の書式を検討
- 小学校との連携を充実させる。
 - ・日本語学級の生徒・児童が発表や交流する活動の実施
 - ・個別の指導計画等を活用し、日本語学習の記録の引き継ぎ

指導・支援の概要

日本語指導の概要

- 本校は、青梅市にある夜間定時制の総合学科の高等学校である。1年次から4年次までで、生徒数は約150名、外国につながる生徒の割合は20%程度である。
- 令和6年度の「特別の教育課程」の履修者は18名である。教員3名、日本語指導支援員8名で日本語指導を実施している。
- 夜間定時制の高等学校としては規模が大きく、部活動等も活発で、外国人生徒等も多数参加している。

指導・支援のポイント

- 日本語指導コーディネーターが中心となり、授業に参加できることから卒業後日本で生活することまで、生徒一人一人の実態、目標に合わせて指導の内容を段階的に設定している。
- 校内担当者打合せ等の機会を通じ、生徒の成長や課題を教員と学習支援員で共有し、学期ごとに学習内容やグループ構成を見直すなど、個々の生徒に応じた指導につなげられるようにしている。
- 普通の授業や学校生活において、資料のルビ振り、視覚的な教材の活用、翻訳ツールの活用等の工夫を各教科・分掌で行い、日本語が分からないことによる困り感があるべく少なくなるよう、学校全体で取り組んでいる。

日本語指導の充実に向けて（日本語指導担当教員から）

- 教員全体に、日本語指導が必要な生徒にどのように対応していくかを自分事として捉える雰囲気がある。そのため、日ごろから教員間で、日本語指導が必要な生徒について話題にあがることも多い。日本語指導コーディネーターは、全体に対する周知だけでなく、そういった会話の場に積極的に関わり、必要な情報を提供したり、教員の抱えている問題を把握したりしている。また、その中で得られた情報は校内研修会や、全体周知の内容をより実用性の高いものにするためにも活用している。

担当教員の1年

月	項目	内容等
4月	新入生説明会	新入生対象に日本語指導支援に関する説明
	アセスメントの実施	オンラインアセスメントの実施
	校内担当者連絡会	今年度の指導体制について
	校内連絡会	日本語指導が必要な生徒についての情報共有
5月	指導開始	グループ分け・スケジュール、個別の指導計画確認
	日本語指導コーディネーター連絡会	都の都立高等学校の日本語指導コーディネーター連絡会出席、情報交換
6月	校内研修会	「やさしい日本語」に関する研修会
7月	校内担当者打合せ	2学期の指導体制について
	資格試験受験案内	JLPT受験に向けての説明会
9月	資格試験受験手続	受験手続の補助
	文化祭に向けての取組	生徒とパンフレット（インターナショナル版）を作成
	多言語高校進学ガイダンス	外国にルーツをもつ生徒対象の進学相談
10月	校内研修会	「やさしい日本語」に関する演習
	日本語指導コーディネーター連絡会	都立高等学校の日本語指導コーディネーター連絡会、情報交換
11月	学校説明会	外国にルーツをもつ生徒対象のブースを設置
	資格試験受験補助	受験者対象に、受験場所・時間・行き方等の確認
12月	校内担当者打合せ	3学期の指導体制について
1月	担当者連絡会	日本語指導コーディネーター連絡会出席、日本語指導推進フォーラム参加
	校内研修会	地域における外国にルーツをもつ生徒の情勢について
2月	校内担当者打合せ	次年度の支援生徒（在校生）の検討
	単位認定処理	「特別の教育課程」の評価・単位認定処理

指導・支援の実際

キーワード
やさしい日本語 教職員の意識

ガイドライン
2-2

連携を視点とした日本語指導・支援

○アセスメントの実施と個別の指導計画の作成

- ・年度当初に、オンラインアセスメント（J-CAT）、アンケート、面談を実施し、個々の生徒の情報、日本語の能力等を早期に把握することに努めている。
- ・集めた情報を速やかに個別の指導計画に反映し、共有フォルダで誰でも確認できるようにするなど、学校内で共有している。（4月下旬までに作成）

○校内研修会の実施

- ・外国人生徒等の実情や背景についての研修を実施し、共通理解を深めている。
- ・「やさしい日本語」についての講演、演習を通して、普段の授業や学校生活の中で「やさしい日本語」の考え方にに基づき、対応できる力を養っている。

○学校生活全般における支援

- ・月間行事予定や生活に関する注意等の資料の多言語版や「やさしい日本語」版を作成し、日本語指導が必要な生徒も学校生活を送るための情報を得やすいようにしている。
- ・日々の授業に関して、各教科でルビ振り、視覚的な教材や翻訳ツール等を活用して、日本語指導が必要な生徒も授業に取り組めるように工夫している。

【実際の様子】

●アセスメントの実施（4月）



●校内研修会（年3回）



●月間行事予定（多言語版）

行事名	実施日時	実施場所	実施者
入学式	9月1日	体育館	校長先生
開校式	9月2日	体育館	校長先生
入学式	9月3日	体育館	校長先生
開校式	9月4日	体育館	校長先生
入学式	9月5日	体育館	校長先生
開校式	9月6日	体育館	校長先生
入学式	9月7日	体育館	校長先生
開校式	9月8日	体育館	校長先生
入学式	9月9日	体育館	校長先生
開校式	9月10日	体育館	校長先生

「特別の教育課程」指導担当者会議

参加者：日本語指導コーディネーター、日本語指導担当教員、日本語指導支援員

内容：日本語指導コーディネーターを中心に、履修生徒の状況の共有、指導内容や方法の検討、指導体制の検討等を行う。

今後に向けて

○現在は学級担任とは個別に情報共有を進める形をとっているが、日本語指導コーディネーター・学級担任・各教科担当・日本語指導

支援員等が参加する連絡会を年数回実施していくことを検討している。

○これにより学級担任・教科・日本語

指導担当の間での情報共有をより深めることを目指していく。

「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」モデル地区の実践報告

日本語指導が必要な児童・生徒の日本語能力や学力等の実態を把握し、一人一人に応じた指導の充実を図れるよう、「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」（以下、DLAと言う）等のアセスメントの実施を推進しています。ここでは主にモデル地区におけるDLA実施後の活用を示しています。

【モデル地区】

墨田区 板橋区 羽村市

【「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」とは】

1 ねらい

- ・ 日常会話はできるが教科学習に困難を感じている児童生徒を対象
- ・ 日本語能力を把握し、教科学習支援の在り方を検討（指導計画、教材選択、学習意欲の喚起）

2 特徴

- ・ DLAの活用は対話型が基本。評価者の問いかけや語りかけが、潜在的な力を引き出す。

〈参考〉文部科学省初等中等教育局国際教育課「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」

URL : https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

【主な流れ】

- 1 DLA実施者養成講習（日本語指導担当教員、外部人材）の実施
- 2 DLAの実施
- 3 DLAの実施結果の共有・活用：①校内、在籍校・在籍学級 ②個別の指導計画 ③研修、研究授業等



墨田区における取組 ―日本語指導担当教員の捉える力・育む力の向上を目指して―

ガイドライン
4-1

【目的】

- ・ これまでもDLAに取り組んでいる「日本語学級」において、実施及び活用の充実を図る。
- ・ DLAの実施等に関する資質向上研修を実施し、日本語指導加配教員のDLAを実施する能力の向上及び計画的に実施する体制づくりを目指す。

【主な取組】

1 日本語指導担当教員のDLAを実施する能力の向上

- ・ DLA講習の受講（全校）
- ・ DLA実施時に日本語指導担当教員も同席し、自らもアセスメントを実施
- ・ 結果報告会における協議



「結果報告会」について

～教員対象の調査から～

- 評価参照シートがあることで、今後の目標やカリキュラムについて組み立てやすくなった。
- DLAにより退級の目安を知ることができた。
- 実施方法を実際に見ることで、評価や支援の仕方が分かった。
- DLAを通して、学級担任や日本語指導担当
教員で対象児童の共通理解を図ることができた。

2 外国人児童・生徒等支援連絡会等におけるDLA実施結果の活用

- ・ DLAを実施して、指導内容を変更した児童・生徒について協議

〈協議用シートの内容〉

①実施前の指導 ②DLAの結果 ③実施後の指導

◆今後に向けて◆

- ・ 日本語指導担当教員を対象とした研修会の実施（日本語指導教室での授業観察等）
- ・ DLA実施者の養成（都教育委員会の研修を活用）
- ・ 今年度実施校におけるDLAの継続的な実施
- ・ 日本語指導加配校以外へのDLAの実施
- ・ DLAの活用例の収集・周知・啓発

対象児童・生徒【学年：●学年 滞日年数：●年】

	DLA前【4.5】	DLA後【3.5】
実施前の指導	・ 文型を中心とした学習	・ 算数練習（言語学級の使用教材） ・ 内容の確認
DLAの結果	・ 初級日本語はよく定着している。 ・ 時系列で話すことや、仮定を話すことはできていた。 ・ 教科学習指導書を使用して、因果関係など、まとまった話をすることに課題がある。	・ 既習の漢字はよく読めていた。 ・ 大意を読み取り、内容を予測することができていたが、内容の詳細な読み取りに課題がある。
実施後の指導	・ 教科と日本語の統合学習に重点を置き、内容についてまとまった形で話す活動を行う。	・ 指導に分け、観察したところの内容を確認するなどの活動を行う。

協議用シート（一部抜粋）

連絡会の協議用シートについて

- 日本語指導の根拠となる、児童・生徒の日本語の能力を把握・分析することの必要性を実感してもらうことを目的に、連絡会の課題として設定した。
- 協議では、DLAの実施中に児童・生徒が見せた姿と普段の指導内容との不一致に気づき、重点を置くべき指導内容が明確になったとの声が聞かれた。

また、日本語指導の時間を充実させるだけでなく、それ以外の時間も活用しながら、日本語指導の充実を図っていくことが重要であることを改めて認識し、読書活動等の取組を始めたとの報告もあった。

板橋区における取組 —日本語指導担当教員の捉える力・つなぐ力の向上を目指して—

ガイドライン
4-1

【目的】

- ・「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント（DLA）」の結果を活用し、個別の指導計画の作成に生かしたり、日本語学級及び在籍学級での指導の充実を図ったりする。

【主な取組】

1 DLA実施結果の在籍校（在籍学級）との共有

- ・日本語学級又は在籍校（在籍学級）でDLAを実施
- ・結果報告会における情報共有（対面又はオンライン）

2 日本語学級担当者研修におけるDLA実施結果の活用

- ・各校における取組状況の報告
- ・DLA実施結果を基に、「個別の指導計画」の見直しグループ協議
- ① 1 事例を挙げ、DLAの結果をグループで共有
- ② 「生活適応するための日本語」、「学習に参加し思考するための言語」、「自己実現とアイデンティティ形成を支える日本語」の3観点に分けて目標を設定し、達成するためのプログラム及び指導内容を検討
- ③ グループごとの発表

◆今後に向けて◆

- ・入級のタイミングでDLAを実施し、結果を個別の指導計画に生かす。
- ・継続か退級かで迷っている児童・生徒に実施し、判断材料にする。
- ・在籍校と日本語学級の先生が、DLAの結果を基にした取組とその取組の結果、成長したことを積極的に情報共有し、児童・生徒理解を図る。

※日本語学級の教員への調査結果より

結果報告会の内容及び成果

- ・オンラインでも実施し、日本語学級担当教員、在籍校の管理職や学級担任が参加
- ・感想等
- ①日本語学級担当教員
「DLA実施後、日本語を話したり読んだりすることに自信を付け、日本語の学習に対してより意欲的に取り組む姿が見られるようになった。」
「生徒がDLAの結果から、これからの学習の計画を立てたいと言ったり、日本語能力検定試験を受けたいと言ったりしている。」
- ②管理職（在籍校）
「DLA実施後、日本語でその日の出来事を報告しにくることが増えた児童がいる。日本語を話すことに自信がついたようだ。」
- ③学級担任（在籍校）
全体指導での留意点や指導の工夫等への質問に対して実施者が回答してくれるなど、日本語指導のヒントにつながる視点を獲得することができた。
- ④全体
DLAを通して、日頃困っていないように見える児童・生徒が、実は獲得している語彙が少なく、質問に対して適切な説明ができないことや、反対に、日本語が十分に身に付いていないと思っていた児童・生徒に伝える力があつたことなどが分かり、教師が児童・生徒の日本語の習熟度等を正しく把握することの重要性を確認することができた。



一人の児童・生徒について
目標や指導内容を検討

日本語学級担当者研修（年2回）

- ・第1回
- ①中学校（社会科）の授業における、JSLを取り入れた研究授業を実践、協議
- ②講師（大学教授）よりDLAについて指導
- ・第2回
- DLAの結果を基に、個別の指導計画を見直し、具体的な実践として授業計画を立てる力を身に付けることを目的に実施〈代表校より〉
- 日本語学級で付けているJSL評価指標とDLAの結果とを照らし合わせて、どうして違いがあったのかを分析して発表

羽村市における取組 —日本語指導担当教員の変える／変わる力の向上を目指して—

ガイドライン
4-1

【目的】

- ・DLAを活用した日本語指導についての導入研修及び個別の指導計画作成についての研修を実施し、日本語指導・支援の充実を図る。
- ・DLAの結果を活用した授業を実施し、互いに見学する機会を設け、各校における日本語指導力の向上を図る。

【主な取組】

1 日本語指導担当教員のDLAを実施する能力の向上

- ・DLA講習の受講（全校）
- ・DLA実施時に教員も同席し、自らもアセスメントを実施
- ・結果報告会における協議（管理職も同席）



◎「DLA実施者養成講習」に全担当教員が参加

- ◇担当教員がDLAの実施と活用について学ぶことで、指導・支援の改善を図った。
- ◇担当教員がDLAを理解することで、必要に応じて随時、DLAを実施できるようになった。

◎DLA実施者と担当教員によるアセスメント

- ◇アセスメントに担当教員や管理職が参加することで、日頃の学習や生活の様子を含めて、より多角的に、児童のよさや困り感を捉えられた。

2 DLA実施結果を活用した研究授業の実施

- ・DLAの結果を活用し、学習指導案を作成し、検討
- ・研究授業の実施



◎年間3回の研究授業の実施

- ①5月「気持ちを伝える」（武蔵野小）
- ②9月「こん虫のひみつを教えます」（小作台小）
- ③12月「三年とうげ」（武蔵野小）
- ◇授業中の児童の姿を踏まえることで、具体的にDLAを活用した指導の工夫について協議できた。
- ◇在籍学級の学級担任と連携した指導・支援についての取組を共有。DLAの結果を活用することで、具体的な手立てを学級担任に提案しやすくなった。

◆今後に向けて◆

◎DLAの結果を活用した教育課程・年間指導計画の作成

多角的なアセスメントによる実態把握に基づき、児童のよさを伸ばし、困り感を軽減するための指導・支援を、日本語指導教室と在籍学級が連携しながら進めていく。

◎計画的かつ柔軟にDLAを実施できる体制の構築

年間指導計画にDLAを位置付け、計画的に実施する。また、研修等により担当教員のDLA実施スキルを高め、必要に応じて柔軟に実施できる体制を構築する。

◎多文化共生社会の実現に向けた指導・支援の充実

日本語指導は、日本語を教えるだけの場ではない。対象児童が自らのルーツである国や地域に誇りをもち、互いに尊重し合いながら共生できる学校生活の実現を目指す。



◎日本語指導推進校の校内研修との連携

- ◇第3回研究授業には、講師として東京学芸大学の米本和弘准教授をお迎えした。
- ◇講義「子どもの言語習得の特徴や言語学習の指導・支援」には、会場校の全教員が参加。日本語指導及び多文化共生への理解を深めることで、学校全体での組織的な指導・支援の充実を図った。

【実践例】日本語指導推進校や地区等の取組

第1章	外国人児童・生徒等を対象とした日本語指導の特徴等への理解	… 22
第2章	日本語指導実施に向けた環境整備	…………… 27
第3章	日本語指導が必要な児童・生徒の受入れ体制	…………… 37
第4章	継続的なアセスメントと個別の指導計画	…………… 42
第5章	日本語指導プログラムとコース設計	…………… 48
第6章	専門性の向上と理解促進	…………… 52

取組のポイント

生徒の「学びたい」「挑戦したい」を引き出すために、自己決定理論を踏まえて、自律性、他者との関係性、有能性といった人間の欲求を満たす活動で動機づけを高める。

主な取組

○自己決定理論を踏まえ、以下について取り組む。

4月 健康診断

(自) 保健委員の生徒作成の英語による受診案内

6月 体育祭

(自)(関)(有) 多様な生徒が団長や副団長として活躍
生徒会役員選挙

(自)(関)(有) 生徒会長演説「田柄高校を愛している。田柄高校をもっと良くしたい。」
多様な生徒が日本語でスピーチ

7月 校内書評合戦

(関)(有) それぞれのおすすめ本を発表

9月 文化祭

(自)(関)(有) 母国の舞踊や食文化紹介「伝えたい」を表現

10月 日本で学ぶ留学生との交流

(自)(関)(有) ロールモデルを知る

11月 英語暗唱大会

(自)(関)(有) 母語が異なる生徒たちの切磋琢磨の場

12月 日本の伝統文化発表会

(自)(関)(有) 太鼓、空手、囲碁などの学校設定科目の発表会

1月 百人一首大会

(自)(関)(有) ひらがなと音を覚えてチャレンジ

2月 大学生との討論会

(自)(関)(有) 日本語学習の成果の確認（大学での学びに触れる。）

- ・自律性(自) : 自分自身で行動を決めること
- ・関係性(関) : 新しい関係の構築
- ・有能性(有) : できるという感覚

【実際の様子】



・体育祭

・百人一首大会



「自分の国」
紹介新聞

・大学生との討論会



成果

○これらの取組を通じて様々な母語をもつ生徒たちが共に学ぶことが日常となってきた。田柄高校という守られた共同体の中には、それぞれが活躍できる場面があり、伸び伸びと生活できている。日々の生活において、相手と異なるところや似ているところを知り、分かり合う難しさや分かり合えたときの嬉しさを学ぶことができています。

児童・生徒や教員の感想

〈JET (アメリカ出身) 〉
○私たちの学校は、生徒が世界中から集まっているという意味で、信じられないほどユニークである。毎日、複数の言語が飛び交い、時には同じ文章の中でさえ、複数の言語が飛び交う。自分の文化や民族に囲まれてしか育ててこなかった生徒にとっては、田柄の環境は信じられないほど豊かなものである。異文化を学び、理解することがいかに大切か、様々な背景の友人をもつことがいかに特別なことかを、私は身をもって体験している。外国に繋がりのある生徒にとっては、日本の文化や言語に触れる絶好の機会である。伝統的な日本文化のクラスや、日本語のクラスがある。生徒の多くは非常にフレンドリーで、そうでない場合でも、他のクラスメートが内気な生徒の殻を破ってくれる。田柄はとても特別な学校だ。

今後に向けて

○多文化共生社会の中核人材の育成のため、地域との連携、地域への発信を行う。
○グローバル社会の一員としての自覚を養い自信をもって社会に羽ばたくことができるよう、校外の活動への参加や他校種や地域との交流の機会を設ける。

取組のポイント

「特別の教育課程」を履修する生徒を中心に、入学希望者に対する説明会で、在校生が学校生活などに関する質問に回答したり、本校での学びを紹介したりする機会をもつことで、自己肯定感の醸成を目指す。

取組

- 第1回学校説明会で、通常の説明会場とは別に外国人生徒等向けの会場を設け、やさしい日本語を用いた説明会を実施する。参加申し込みの際に別会場での参加希望が出せるようにし、参加者を募る。
- 会場での説明では、本校に在籍する外国人生徒等が、普段の学校生活を話す機会をつくるなど、実際に学校でどのように学んでいるかが伝わるよう工夫する。
- 質問コーナーを設け、参加者が不安に思っていることや気になっていることに対して、生徒の視点から答える。
- 説明会後は校内見学ののち、他の参加者とともに、本校農場での収穫体験や個別相談を実施し、本校に対する理解を深められるようにする。

・英語版説明資料



【実際の様子】

・学校説明会①



・学校説明会②



成果

- 令和6年度は10組以上の参加者に対して説明を行うことができた。支援団体を通さない参加者も複数おり、ニーズに対応した取組になっていたと考えられる。
- 説明する生徒は、温かな雰囲気の中で分かりやすく伝えることができおり、本人にとっても、自分の経験を人に伝える、よい機会となった。

児童・生徒や教員の感想

- 〈説明会参加者に対するアンケートの結果〉
全員が「満足」と回答
- 〈教員〉
話を聞いてもらえてよかった。
生徒がフレンドリーに対応してくれた。
- 〈生徒〉
人の前でしゃべるのは、とても緊張した。

今後に向けて

- 英語での対応は、一定のニーズはあるものの、対象者が英語話者に限られてくる。今後、様々な母語の方を対象にするために、やさしい日本語での対応を中心に実施していくことを検討している。

取組のポイント

共通の言語（日本語・英語）やボディランゲージを用いてコミュニケーションを図ることで、部員が一体となって部活動を楽しめるようにする。

取組

〈サッカー部での取組〉

- 日本人生徒5名、外国ルーツの生徒6名で活動をしている。国籍に関係なく、生徒同士がコミュニケーションを取り、互いに意見を出し合いながらサッカー（フットサル）を楽しくプレーすることを目指している。
- 部内のルールで、基本的なコミュニケーション言語は日本語を使用することとし、簡単な日本語でのコミュニケーションを行えるよう指導を行っている。また、試合練習のチームは言語に関係なく組み、コミュニケーションの機会を増やすよう工夫している。
- プレーの荒さなどから部員間の対立があった際には、試合の様子を動画に撮り、それを見ながらプレーの検証を行う取組を行った。客観的に自分のプレーを見ることで、指導内容が理解でき、日本人外国人ともにプレーの改善につながっている。視覚的な情報をもとに話することで、言語では理解が不十分な部分を補いながら、部員が安全なプレーに対する共通認識を養うことを目指している。

【実際の様子】

・部活動の様子①



・部活動の様子②



成果

- 簡単な日本語やボディランゲージによるコミュニケーションが増えてきた。現在、生徒は全員が非常に楽しそうに活動に取り組んでいる。
- 日本人生徒も外国につながる生徒と意見を交わしながら、共にプレーすることができるようになった。

児童・生徒や教員の感想

- アンケートでは外国につながる生徒は「楽しい」と回答した。一部「楽しいが、日本語が大変」という回答もあった。

今後に向けて

- 言語によるコミュニケーションを活発にし、日本語を使う場面を多くできるようにしていくことで、日本語によるコミュニケーションの機会を増やせるようにしていく。
- 地域の大会への参加等、一つの目標に向かって皆で頑張っていることを確認できるような取組を充実させる。

オンラインでつながる「夏のお楽しみ交流会」

(渋谷区立神宮前小学校)

ガイドライン
1-7

1 関連項目 「よりよい学校生活に向けて」

2 取組のポイント

普段は別々に学習している児童同士がオンラインでつながる交流会を実施し、互いを知る機会をもつことで、仲間とともに日本語学習に取り組む意欲を喚起する。また、保護者や学級担任も視聴・参観できるようにし、児童の日本語学習への取組を理解する好機とする。

3 主な取組内容

実施形態：校内通級児童は日本語学級で、校外通級児童は自宅から参加（45分）

主な内容：①自己紹介（名前、学校・学年、つながりのある国、好きなこと）

紹介する内容については、授業で予め画用紙に書いておき、提示

②クイズ（児童が作成）

図書館で見つけた、なぞなぞの本を基に、スリーヒント問題を出題

誰もが答えられるよう、スリーヒントにすることを児童が提案

③世界のじゃんけん（児童のつながりのある国）

自分の国のじゃんけんを紹介後、皆で楽しむ。

④ゲーム（教員が作成した「虫取りゲーム」）

参加する児童全員が活躍できるよう、内容や構成を工夫



4 成果

- ・児童からは、「色々なゲームをしたり、皆で遊んだりして楽しかった。」などの感想が、参観した保護者からは、「あんなに日本語を話せるんですね。」など喜びの声が聞かれた。
 - ・司会の児童の姿は、他の児童にとってロールモデルを知る機会となった。交流会で知り合った仲間の掲示物を見付け、楽しそうに話す姿も見られた。
 - ・在籍学級の学級担任とも動画を共有することで、堂々と日本語を話す児童の様子を理解し、
- らうことができた。（日本語学級より <https://shibuya.schoolweb.ne.jp/weblog/files/1310247/doc/100824/723084.pdf>）

翻訳機やICT等を活用した円滑な伝え合い

(江東区立大島幼稚園)

ガイドライン
1-7

1 関連項目 「よりよい学校生活に向けて」

2 取組のポイント

翻訳機やICTを使って、互いの言語が異なってもコミュニケーションが取れるような体制を整備することで、保育者と園児、保育者と保護者等が円滑にコミュニケーションを取ることができる。また、園児の発する言葉（日本語以外も含む）を生かし、日本語で確認する機会をもち、言葉や表現に触れる機会にすることができる。

3 主な取組内容

①使用言語によるコミュニケーション

- ・ポケトークや通訳アプリの活用
- ・園児の使用言語が話せる保育者による通訳

②イラスト等を活用したコミュニケーション

- ・イラストの活用
- 〈帰りの会〉歌詞の理解補助
- 一日の振り返りや
- 明日の流れの確認

「今日は、何が楽しかった？」への「outside」との園児の答えに、「そう、外で遊んだのが楽しかったんだね。」と日本語でも確認



ホワイトボード

明日の流れについて、毎日伝える内容（「あさのしたくをする」、「おべんとう」、「かたづけ」等）は絵カードで、日によって変わる内容は、保育者が絵を描いたり、やりとりをしながら伝えている。

4 成果

- ・保育者が園児や保護者とコミュニケーションをするための道具だったポケトークについて、「これがあれば、言いたいことが伝えられる」と園児たちも認識し始め、夏以降は、自分たちでも活用を始めた。また、園児同士で「作り方を教えて？」や「いいよ。一緒に作ろう！」など、互いを理解した言葉がけが見られるようになった。



全ての子供たちが図書にアクセスできる環境の提供

(スウェーデン ウプサラ市立図書館・チューリップ幼稚園等)

Guideline
1-7

1 関連項目 「よりよい学校生活に向けて」

2 取組のポイント

地域の図書館や幼稚園等、子供と保護者が図書に容易にアクセスできる環境を担保することで、社会全体で子供たちの言葉の能力を伸長する機会を提供する。

3 主な取組内容

〈図書館（ウプサラ市）〉



様々な言語の絵本

・ウプサラ市の児童図書館では、80言語の蔵書がある。



絵本セット

・スウェーデン語の絵本に加え、多言語の同じ絵本と絵本の内容に関連した人形などがセットになっている。子供たちが読むことを楽しめるよう工夫している。



〈幼稚園（ウプサラ市）〉



園内の小さな図書館

・園児とつながりのある、様々な言語の本が並ぶ。

図書館法には、全ての市民が図書館にアクセスできないといけないことや、子供、若者、違う母語をもつ子供への配慮についても明記されている。

4 成果

- ・子供が学校に行っていない期間でも読む気持ちになるようサポートしている。
- ・幼稚園に図書館があることで、保護者が図書館に行かなくても本にアクセスできる環境を整え、保護者に対し、読むことの大切さを伝えることができる。

本を読むことを通じて、言葉の能力を育む

(スウェーデン チューリップ幼稚園)

Guideline
1-7

1 関連項目 「よりよい学校生活に向けて」

2 取組のポイント

幼児が母語やスウェーデン語を楽しく身に付けられるよう、絵本に登場するもの（人形やトラック等のおもちゃを箱に入れてセットしている）等も活用しながら本を読む機会を提供する。

3 主な取組内容 〈幼稚園（ウプサラ市）〉



つながりのある国についての掲示



ダイアログブックリーディング

・新しい言葉や語彙を増やすための質問を予め付箋に書いて貼っておき、読む際に活用する。



言葉に触れる工夫



4 成果

- ・幼児のつながりのある国等に関する掲示やスウェーデン語に触れる機会を増やしスウェーデン語を身に付ける機会を積極的に設けている。
- ・子供たちが実物に触れながら、本を読み、言葉を楽しみながら覚えることができる。また、本を借りたり、アプリを活用したりして、家で読む保護者もいる。

取組のポイント

年間を通じて在籍学級での学習内容や児童の課題、日本語指導による成果等を学級担任と日本語指導担当教員が共有することで、日本語指導の指導内容の改善・充実を図る。

取組

○日本語指導での取り出し授業の後に、学習内容や児童の様子をノートに記し、学級担任と共有する。

〈内容〉・学習内容（教科の内容や活動）

- ・児童の様子（できるようになったことや支援方法など）
- ・特記事項（次回の連絡・児童に関する特別な連絡）

〈記入例〉・句読点に気を付けて文を書くことができました。

- ・自分から端末を使って調べたり、母語と比較したりしていました。
- ・長い文章の読み取りは難しいようですが、文章を区切って考えると、内容を読み取ることができました。

○在籍学級での困り感や日本語指導でできたこと等と、在籍学級で活用する方法を学級担任と打ち合わせる。

○在籍学級での児童の様子を共有し、次の指導につなげる。

【具体的な取組】

第3学年 国語「こまを楽しむ」（説明文）

日本語指導教室で、先行授業を行うことで、在籍学級の授業で、こまの種類や特徴を発表することができた。

【実際の様子】

- ・学級担任との連携（ノート）



- ・学級担任との連携（話す様子）



- ・授業で活躍する児童



成果

○日本語指導での学習が学級での指導に直接的に生き、児童の学習内容への理解が促進された。

○学級担任との連携をより密にすることで、児童の学級での様子や日本語指導での様子の違いが分かり、指導の質の向上につながった。

児童・生徒や教員の感想

〈学級担任〉

○日本語指導により、漢字の読み方が分かるようになった。学級や家庭での音読がスムーズに行えるようになった。

○日本語指導で先行して学習に取り組んだことで、学級での国語の授業が分かり、発言することができるようになった。

〈児童〉

○日本語指導で学習したことが、テストにも出て、問題を解けて嬉しかった。

今後に向けて

○日本語指導の時間に比べて、学級での授業の進度が速い。先行授業や並行授業を行うときに、日本語指導での授業展開では、より重要な項目に絞ったものにしていく必要がある。

○学級担任は授業のため、日本語指導の様子を見ることができない。指導の様子が見られる時間をつくったり、動画で見られるよう工夫したりするなど、日本語指導の指導状況を学級担任が把握する機会をつくる。

取組のポイント

「日本語指導部会」の開催や連絡ファイルにより日本語指導に関する情報を共有することで、一人一人に応じた指導・支援の方針を明確にする。

取組

○日本語指導部会（年2回）

〈メンバー〉管理職、生徒の学級担任（自校）、日本語指導担当教員（主担当）

〈実施〉7月 情報を共有

- ・担当生徒ごとに分かれて情報共有
日本語学習（使用教材、成果物、評価表等）や学級、家庭、教科学習等の様子

11月 「DLA実施報告」

- ・日本語指導担当教員から学級担任へ結果や実施者によるアドバイスを共有
- ・DLAの結果を基に「学習の記録」を作成し学級担任を通して生徒、保護者へ配布

○連絡ファイルによる日本語指導の報告（通年）

〈メンバー〉管理職、生徒の学級担任（自校）、日本語指導担当教員（主担当）

〈実施〉・通級時には、日本語指導担当教員が毎回「指導の記録」を作成

- ・生徒は、連絡ファイルを学級担任に提出
- ・学級担任は、連絡ファイルを確認し、学級での様子等を記入して返却

【実際の様子】

・連絡ファイル



・DLA実施結果報告の様子



・学習の記録



成果

- 日本語学級での指導の成果や様子を共有することで、学級担任が生徒の日本語の能力を把握することができた。
- 学級での様子を共有することで、学校生活での課題を見付け、今後の日本語指導・支援の方針が明確になった。

児童・生徒や教員の感想

〈学級担任〉

- 日々の校務、指導の中では、通級生徒の日本語学習の様子や必要な支援についてじっくり考える時間が取れずにいたが、部会に参加することで様子や日本語の能力についても理解することができた。

〈日本語指導担当教員〉

- 普段は授業の記録のファイルでのやり取りが主になっていて、時間を設けて話すことができていなかった。部会をもつことで、日本語学級では見られない学級での様子や、学級担任からみた課題を知ることができ、今後の日本語指導の参考になった。

今後に向けて

- 今年度は、管理職、学級担任、日本語指導担当教員による部会だった。教科担任も含めた全校体制で支援・指導できるような取組（研修等）が必要である。
- 個別の指導計画等、目標と指導内容を具体的に共有できる資料の作成が望ましい。

職員会議（年度当初）で共通理解を図る （北区立西が丘小学校）

ガイドライン
2-1

1 関連項目 「日本語指導の指導体制」

2 取組のポイント

日本語指導に関する資料を配布し、日本語学級や日本語指導の基本的な考え方について共通理解を図ることで、全教職員で連携して指導・支援の充実を図る。

3 主な取組内容

実施時期等：年度当初の職員会議（20分程度）

校内研究の一環として、日本語指導が必要な児童が在籍する学級での授業作りにおいて知っておきたいことをテーマに説明したことが、取組を始めたきっかけである。

実施方法：日本語指導担当教員が作成した資料（A3両面1枚）を基に説明

資料の内容：日本語学級の概要、北区における日本語指導が必要な児童生徒等への指導・支援体制、日本語学級（西が丘小）通級指導の状況、通級指導の概要、日本語指導担当教員の役割、日本語指導の基本的な考え方

◆特に理解に重点を置いている内容◆

日本語指導担当教員の役割

他校通級の児童に対する指導時間の確保という点から、校内の行事等に係る業務等において、年間を通じて理解・協力してほしいこと

指導時間・指導内容

- ・日本語で日本語を教えていること、全員が「あいうえお」の学習からスタートするわけではないこと
- ・児童にとって必要な指導をしていくためには、児童のつまずきや成長を常に把握できる学級担任の「気付き」が重要であり、児童の日本語の能力の向上に向けて、日本語学級と在籍学級の学級担任が連携・協力していくことが重要であること

4 成果

- ・年度当初に共通理解を図ることで、転入してきた教員も日本語学級の指導について理解することができ、互いに「やりたいこと」や「やってほしいこと」について積極的に発信し、連携・協力しやすい体制づくりができた。

連携・協力しながら日本語の能力を育む一連絡帳等の活用一 （北区立西が丘小学校）

ガイドライン
2-2

1 関連項目 「主な関係教職員の責務・役割等」

2 取組のポイント

日本語学級での取組や在籍学級で取組（作文や日記等の作品も含む）を連絡帳ファイルを通じて情報交換することで、児童の日本語の能力の習得や学校生活の充実を図る。

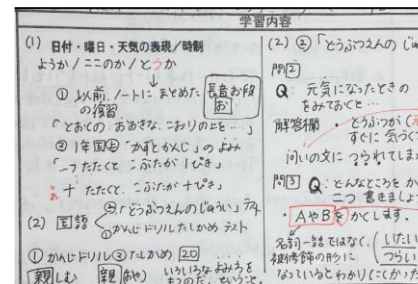
3 主な取組内容

実施方法：①通級指導後、日本語指導担当教員は指導内容等を記入した記録を作成し、連絡帳にファイルして、学級担任に報告

②在籍学級の学級担任は内容を確認するとともに、在籍学級での児童の様子等を記入

※ 児童の取組の様子が分かる作品等があれば、コピー等もファイル

主な内容：日付、学習内容、学習中の様子、学級担任サイン、学級担任の先生から



児童の学習の様子から見られたつまずきから、在籍学級での指導で生かせるよう指導の工夫についても情報共有

「学習中の様子」には、児童の頑張っている様子や授業中のつぶやきから分かったこと等も伝えている。「学級担任の先生から」には、在籍学級で課題になっていることや日本語学級での学習の成果などを報告している。

4 成果

- ・互いの取組を共有することで、在籍学級で活躍できるように、どのようにアプローチすればよいかを一緒に考えていくことができた。また、日本語指導担当教員にとって、日本語学級以外の場面での児童の様子を把握することで、児童のできることとできないことを正確に理解し、日本語指導における指導目標や指導内容の充実・改善につながった。

「日本語指導コーディネーター」1年の流れ

(都立高校 特別の教育課程 編成・実施校)

ガイドライン
2-2

1 関連項目 「主な関係教職員の責務・役割等」

2 取組のポイント

日本語指導が必要な生徒への指導・支援に係る業務について、見通しをもって取り組むことと、関係教職員と連携し、指導・支援の充実を図ることができる。

3 主な取組内容

【日本語指導コーディネーター年間予定】

	主な業務	校内関係者・関係機関等
4月	・日本語指導が必要な児童・生徒に対する外部人材活用に係る所要額調査(第2回)作成提出 ・指導開始にあたってのアセスメント実施(前職校や中学校、関係機関との情報共有、J-CATの実施、対象生徒との面談) ・特別の教育課程履修生徒の確定 ・個別の指導計画の作成 ・特別の教育課程実施内容に関する打合せ ・「ルビ振り」とやさしい日本語使用のお願い」及び「通訳サービスの情報提供」等の依頼(職員会議、研修会等)	・経営企画室、都教育委員会 ・前職校や中学校等 ・管理職、学級担任、日本語指導担当教員、日本語指導支援員等 ・全教職員
5月	◆日本語指導コーディネーター連絡会(第1回)	
6月	※1年間を通して ・日本語指導対象生徒との情報共有 ・日本語指導支援員との連絡・調整 ・一学期別学習目標設定に執行	
7月	・個別の指導計画等の見直し	・学級担任、日本語指導担当教員、日本語指導支援員等
8月		
9月	・日本語指導が必要な生徒に対する指導・支援に関する情報共有等(職員会議、研修会等) ・日本語指導が必要な児童・生徒に対する外部人材活用計画確認書(Ⅱ期)作成・提出	・全教職員 ・経営企画室、都教育委員会

日本語指導コーディネーターは、日本語指導に係る様々な業務を担当している。生徒に関係のある、校内外の関係者との連携・協力を大切にしている。

	主な業務	校内関係者・関係機関等
10月	◆日本語指導コーディネーター連絡会(第2回)	・経営企画室、都教育委員会
11月	・日本語指導が必要な生徒への対応(学校説明会)	・進路部
12月	・個別の指導計画等の見直し	
1月	・日本語指導が必要な生徒に対する指導・支援に関する情報共有等(職員会議、研修会等) ◆日本語指導コーディネーター連絡会(第3回)	・全教職員 ・都教育委員会
2月	・次年度の特別の教育課程対象生徒の検討 ・日本語指導が必要な生徒の把握(入学者選抜)	・入選担当等
3月	・Ⅰ期及びⅡ期の実績報告書の提出 ・日本語指導が必要な児童・生徒に対する外部人材活用に係る所要額調査(第1回)作成提出 ・特別の教育課程における取組についての指導要録への記入 ・特別の教育課程編成・実施計画作成提出 ・新入生受講相談において日本語指導の希望等について相談対応	・経営企画室、都教育委員会 ・学級担任、教務部等 ・学校経営支援センター等

「日本語指導コーディネーター連絡会」
都教育委員会が、「特別の教育課程」を編成・実施している都立高校の日本語指導コーディネーターを対象に実施している。「特別の教育課程」による成果や課題等について情報交換や協議を行うことで、各校における日本語指導・支援の充実が図られている。

4 成果

- ・学校の年間行事予定等を基に、日本語指導コーディネーターの業務内容について整理することで、業務内容の明確化と、校内連携の充実を図ることができた。
- ・生徒に関する情報交換や、指導・支援の具体的な方法について共通理解を図る機会をもつことで、指導・支援の充実を図ることができた。



取組のポイント

個別の指導計画（生徒の記録・指導の記録）及び「特別の教育課程」編成・実施計画を一括管理することで、作業の効率化を図る。

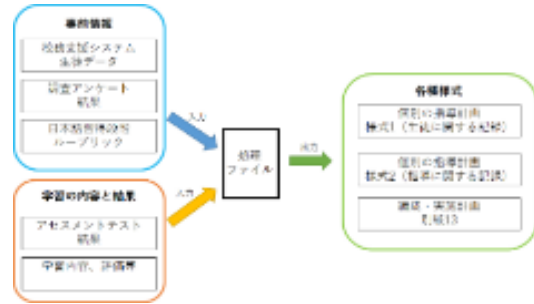
取組

○個別の指導計画（生徒の記録・指導の記録）及び「特別の教育課程」の編成・実施計画の作成に必要な項目を一括管理するためのファイル（Microsoft Excel）を作成する。

アンケートはMicrosoft Formsを使用する。

〈作業の流れ〉

- ①日本語の能力の分野別ルーブリック、学習内容、学習段階とそれに対応する目標等を設定
 - ②校務支援システムの生徒情報、生徒アンケート（オンライン）の結果を入力
 - ③オンラインアセスメントの結果や聞き取った情報等を入力
 - ④個々の生徒に対し、学習内容等を設定
- ※①～④の作業により、必要な情報を入力すると、各種様式が出力できるようになる。



【実際の様子】

・ルーブリックの例

・作成された様式

個別の指導計画
（様式1・様式2）

- …データ・アンケート結果と対応
- …ルーブリック等と対応

成果

○作成が必要な各種様式の作成効率が向上し、令和6年度は18名の対象生徒の個別の指導計画（生徒の記録）の暫定版を4月中旬までに作成し、校内で共有することができた。また、指導の記録についても数時間の作業で作成することができるようになった。

児童・生徒や教員の感想

〈日本語指導コーディネーター〉
○作業効率は飛躍的に向上した。また、生徒の基本情報については校務支援システム及び生徒自身が入力したデータをそのまま活用するため、ヒューマンエラーによる記載ミスの懸念が少なくなり、負担感が軽減した。

今後に向けて

○様式の変更等があった場合の更新作業を簡単に行えるような形式を模索し、次年度以降も継続して運用できるような形を整える。

取組のポイント

国際教室前の廊下に、「世界の挨拶」や、児童の紹介による「世界のじゃんけん」などを掲示することで、多文化理解の促進を図る。

取組

○年間を通して、以下を掲示する。

- ・世界の挨拶「こんにちは」（前期）、「ありがとう」（後期）
- ・世界の国旗（前期）
※キッズ外務省ホームページより
「世界の国旗」URL：https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kokki/files/national_flags_pamphlet.pdf
- ・世界の国旗に世界地図を追加（後期）
※〈参考〉社会常識シリーズ『世界の国旗かるた』（株）Gakken
- ・世界のじゃんけん（前期）
※国際教室の児童が教えてくれたことを基に紹介
※〈参考〉国際理解教育にやくだついろんな国・いろんなことば（6）
『ワンワン・ジャンケンポン 世界のいろんなことば』
監修／竹下昌之、言語指導／A I T 外国語センター
ポプラ社
- ・世界のくしゃみ（後期）
※〈参考〉国際理解教育にやくだついろんな国・いろんなことば（6）
『ワンワン・ジャンケンポン 世界のいろんなことば』
監修／竹下昌之、言語指導／A I T 外国語センター
ポプラ社
- ・母語や滞在国の紹介（次年度予定）

【実際の様子】

- ・「世界の挨拶」



- ・「世界の国旗」



成果

- 児童同士で外国語での挨拶をしたり、国旗クイズを出し合ったりと、多文化に興味をもつ児童が増えた。
- 廊下掲示を活用して、国際理解集会として帰国した児童や外国から転入してきた児童の国について紹介した。他の国の文化を知り、更に他の国に興味をもつなど、世界を身近に感じさせることができた。

児童・生徒や教員の感想

- 〈日本語指導担当教員〉
○国際理解集会とつながるような内容にすることで、児童の興味が更に高まり、声に出して挨拶をし合うなど、多文化共生を実感した。
- 〈児童〉
○中国から転入してきた友達に中国語で挨拶をしてみた。恥ずかしかったけど、挨拶を返してくれて嬉しかった。

今後に向けて

- 国際教室に通う児童が母国や滞在していた国の紹介をするなど、児童発信の掲示をしたり、児童にとって興味のある内容を紹介したりすることで、多文化理解につながる取組を充実させる。
- 国際教室の児童が協力して取り組める活動を設定し、一緒に学ぶ仲間としての関係性づくりを考えた取組も充実させていきたい。



取組のポイント

「英語限定空間」（昼休み）を設けることで、海外で身に付けてきた英語の能力を維持できるようにする。

取組

- 一年を通して、ALTが来校する昼休みに実施している。
- ・校舎内の一角に、International Spaceship Station “ISS”（英語限定空間）を設け、Scrabble（英語を学べるボードゲーム）、すごろく、Quiz、フリートーク等のブースを設置している。
- ・昼休みに、興味のある生徒がISSを訪れ、興味のあるブースに参加している。
- ・異学年とも交流可能、教員も参加して英会話を気軽に使い、学んでいる。
- ・英語を母語とする生徒や得意な生徒にとっては、英語力を維持する役割もある。
- ・日本の学校に慣れない生徒にとっては息抜きの時間ともなる。
- ・英語を話せる「心の教室相談員」も参加することで、悩みをもっている生徒が相談しやすい雰囲気をつくる。

【実際の様子】

・ 昼休みのISS



・ ALTとの会話



・ ゲームを楽しむ様子



成果

- 常に英語を恥ずかしくなく使える空間ができた。
- 英語に興味をもつ生徒が増えた。
- 日本人同士でも英語で会話する環境ができた。

児童・生徒や教員の感想

〈教員・管理職〉

- 帰国生徒で教室に入りづらい生徒が、この環境を好んでいた。
- 教員が必ずしも取組に立ち会うことが難しいという課題はあるが、今後は保護者等の協力を得て実施することも検討する。

〈生徒〉

- 日常的に英会話で発散できるので嬉しかった。できれば毎日開催してほしい。
- 強制ではないので、英語を楽しんで使うことができた。
- 授業では周囲に合わせて英語を使うが、ISSでは、以前のように英語を存分に話せる。
- 公立の中学校にいて、ネイティブの英語に触れる機会があるのは、校内留学のようで楽しい。

今後に向けて

- より多くの生徒に利用してもらえるよう工夫する。
- コミュニティ・スクールとして地域の方と協力して実施していくことが望まれる。
- 現在は英語に限定しているが、今後は様々な言語を話せる環境も整備していく。



取組のポイント

玄関に設置したテレビモニター（E-Monitor）に外国紹介のスライドを常時流すことで、地域及び生徒に学校の特色を知ってもらう機会とする。

取組

○一年を通じて（主に登下校時）、スライドショーを流している。

- ・帰国生徒自身が、自分のいた国や地域を紹介するためのスライドショー（3分程度）を作成する。
- ・オリンピック・パラリンピックの開催時期に合わせて、世界の多くの国々を紹介する。

〈紹介した国〉

- フィリピン、アメリカ、中国、フランス、オーストラリアなど
- ・地理、概要に加え、歴史や文化・スポーツなどを紹介する。
- ・ある一定期間、同じスライドを流し、その後は違う国を紹介する。
- ・生徒が作成できない場合は、ALTが補助して作成する。
- ・名称をE-Monitorとしている。EはEnglish, Entrance, East（東中）の意味が込められている。
- ・来校者があるときは、案内表示も一緒に放映し、来客にも楽しんでもらう。

【実際の様子】

・ 設置場所



・ 学校・PTA・地域が協力



・ 生徒が見ている様子



成果

- 朝登校すると見ることができるため、国際理解の機運を高めることができた。
- 何度も放映されるため、自然と国際理解の視点が身に付けられることが分かった。
- 地域の方々に、地域にこんなにグローバルな学校があることを誇りに感じていただけた。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

- 様々な国の紹介があって、楽しいと思った。
- 帰国生がどのような場所にいたのかが知ることができ、楽しかった。
- もっと多くの違う国のことを知りたい。
- 自分がいた国を紹介して、みんなに理解されるのが嬉しかった。

今後に向けて

- 観光的な要素が強いため、実際の生活の様子なども伝えられたらいい。
- モニターの前に人が溜まってしまうことがあるので、簡潔にまとめる。
- 国の概要だけでなく、現地の学校や日常生活など、実際の生活の様子が見られるような工夫をする。
- 見た感想や質問などを集約し、生徒同士の交流を深め、さらに興味や関心を高める工夫をする。

取組のポイント

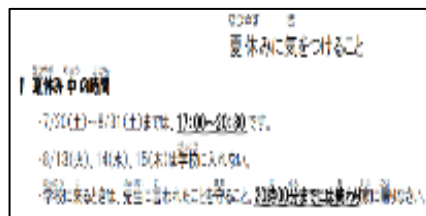
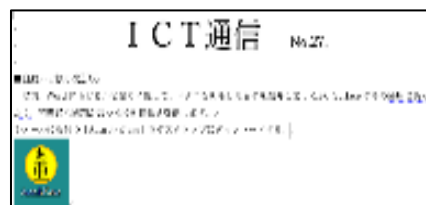
学校全体で情報発信の方法を配慮・工夫することで、外国人生徒等やその保護者が必要な情報を得られるようにする。

取組

- 月間行事予定の多言語化（教務部）
 - ・外国につながるのある児童・生徒の学習を支援する情報検索サイト「かすたねっと」に掲載されている「予定表作成ツール」を利用し、フィリピン語、英語、タイ語の3か国語対応のものを作成している。
- 各教科の資料、ワークシートへのルビ振り等（各教科）
 - ・ルビ振りや多言語併記、定期考査での英語での解答を可能にするなど、各教科が可能な範囲で対応している。
- 長期休業中の生活上の注意（やさしい日本語版）の作成（生活支援部）
 - ・長期休業前に配布する生活に関する注意を、やさしい日本語で簡潔に示したものを通常のものと同表裏印刷で配布している。
- 学校徴収金等の通知のルビ振り等（経営企画室）
 - ・引き落としの通知等で、難しい単語にはルビを振っている。また、日本語と英語で「重要 日本語を読むのが苦手な場合は、誰かに訳してもらってください。」等の文面を記載している。
- ルビ振りツールの周知（ICT委員会）
 - ・Wordのファイルに自動でルビを振れる機能を紹介し、教職員に使いやすいツールの共有を図る。

【実際の様子】

・多言語版月間行事予定

・「夏季休業中の諸注意」
（やさしい日本語版）・ICT通信による自動ルビ
振り機能について情報提供

成果

○各教職員が、自分の担当の中で対応を考えられるような雰囲気醸成することができた。これまでの授業中心の対応から、事務連絡や各分掌からの配布物まで対象が拡大してきており、学校生活全体を通して、多言語ややさしい日本語による情報発信を行う環境が整ってきている。

児童・生徒や教員の感想

- 〈教員〉
 - ツール等を共有してもらえるのは、助かる。
- 〈生徒〉
 - 多言語版月間行事予定等について、アンケートで60%以上の生徒が「役に立つ」と回答

今後に向けて

○新規異動者に向けて、留意事項や対応方法、対応事例等をまとめた資料を作成し、慣れない対応に対する不安や負担感を軽減できるようにする。

連絡事項の精査と連絡方法の工夫

(江東区立大島幼稚園)

ガイドライン
2-4

1 関連項目 「日本語指導に関する施設・設備の確保・整備」

2 取組のポイント

行事等のお知らせ等の文書について、伝えたい内容を精査するとともに、読みたいと思えるように連絡方法を工夫することで、保護者の理解を促し、幼稚園教育への理解及び幼稚園生活の充実を図る。

3 主な取組内容

①連絡事項の精査

以前は、行事のお知らせ等を日本語で作成し、翻訳アプリ等を活用することで対応してきたが、十分に伝わっているか、翻訳された内容が正確か等の課題があった。そこで、何を伝えたいのか、何を伝えれば十分なのかを教職員で検討し、内容を精査した。

②連絡方法の工夫

出身国により、行事等に対するイメージの相違もあり、内容を精査するだけでは、実施目的や子供たちの様子を十分に理解してもらうことは難しい。そこで、楽しい様子が伝わるよう紙面も工夫し、英語版と中国語版を作成している。また、保護者が必ず参加する必要がある場合は、やや強い言葉（Must participate等）で伝えるよう工夫している。

4 成果

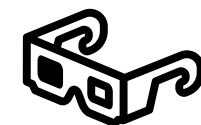
- ・ 伝える情報が明確かつ簡潔になったことで、保護者も容易に重要な内容を把握することができるようになり、子供たちと一緒に楽しく参加してくださる保護者も増えた。信頼関係を構築する上で、しっかり伝えることが重要であることを改めて確認することができた。



分かりやすい「ポスター形式」

◆伝える工夫◆ —「運動会のお知らせ」—

- ①紙面全体から「楽しいイベント」であることが分かる！（イラストや色の使い方）
- ②子供たちの様子（Smile）を行事のタイトルにすることで、どのような行事が分かりやすく伝える！
- ③掲載する情報を絞ることで、見て分かる内容にする！（日時、集合時刻、持ち物）



取組のポイント

年間を通じて、放課後等を活用し、日本語指導担当と学級担任で児童の頑張りや困り感を共有することで、児童一人一人に応じた指導・支援の充実を図る。

取組

○連携方法

- ・放課後や専科の空き時間（給食補教）に、口頭で実施する。

○日常的な連携

- ・国際教室での指導前に、学級と日本語指導での様子を共有し、指導・支援の方法を具体化する。
- ・国際教室での指導後に頑張りや困り感を共有し、指導・支援の方法をお互いに見直すとともに、児童が理解しやすい手だてを共有することで、「安心できる授業」を実施し、児童の「心の支え」となるようにする。
- ・在籍学級の週案を共有し、教科指導の進捗状況を把握することで、国際教室での指導に活用する。具体的には、児童が教室で十分に情報を把握できていないこと（「今週、社会で発表があるね。」）等、各教科等の学習の見通しをもたせる資料として活用する。

○日本語指導担当教員による教科指導の補助

- ・目標や支援方法の設定、確認
- ・ワークシート（段階別）の共有
- ・他児童の提出物（ロイロノート・スクール、ワークシート）を参考に、完成イメージの可視化、学びの共有
- ・実態に応じて、学習内容の先行、並行、後行学習
- ・実態に応じて母語を使った学習、支援（翻訳アプリ、「たのしいがっこう」等）

【実際の様子】

- ・週案簿の共有



※管理職への提出時に、日本語指導担当教員にもコピーを提出

- ・教科指導（国語科）
ワークシートの共有



- ・「たのしいがっこう」を活用した学習



成果

- 学級や個別指導以外での児童の頑張りや困り感を共有し合うことで、めあてや支援方法を具体化し、一人一人の実態に応じた指導につなげることができた。
- 学級で取り組むことが難しい場合でも、学級担任と相談し、児童の日本語の能力に応じた課題設定をすることで、在籍学級においても、各児童が達成感を味わいながら、学習に前向きに取り組むことができた。

児童・生徒や教員の感想

〈学級担任〉

- ロイロノート・スクールを使用した教材やクラス課題を共有することで、児童のできることが増えた。

〈日本語指導担当教員〉

- 放課後だけでなく、専科や給食補教等の空き時間を把握し、学級担任と共有する時間の設定に努めたが時間の確保が難しかった。

今後に向けて

- 共有時間の確保や、研修会で学んだことなどの情報共有に、Microsoft TeamsなどのICTも積極的に活用していきたい。
- 学級担任と共有する時間の設定ができるよう、時間や方法について、引き続き検討していく。



取組のポイント

登校から下校まで、シームレスな支援を実現することで、「多文化共生社会の中核人材」の育成を図る。

取組

〈1日の流れ〉（第1学年において1年を通じて実施）

午前8時35分 登校ショートホームルーム（SHR）

- ・複数副担任制（担任1、副担2）SHRでは3人の教員が入り、1日の流れを確実に生徒に伝達

午前8時45分～午後3時10分 授業

- ・在京外国人生徒等対象の入学者選抜及び入学者選抜でルビ付き問題を使用した生徒を対象に取り出し授業（現代の国語、言語文化、歴史総合）
- ・「保健」及び「情報Ⅰ」以外の科目は習熟度別又は少人数での授業
※ルビ付きや英語によるワークシートや一人1台端末での翻訳など活用
- ・ジョブキャンプ（インターンシップ）やデジタルスキル講座での多言語資料や通訳による支援

午後3時30分～午後5時 放課後

- ・放課後の日本語指導（週2回、外部連携機関講師）
4月にアセスメントを実施し、日本語の能力別5クラスに展開
- ・部活動や生徒会活動
場面により様々な言語が飛び交っている。場合によって日本語が共通言語積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿が見られる。
- ・母語話者による支援（週2回、中国語及びネパール語）
生徒指導、教育相談、三者面談、保護者会への同席、お知らせの翻訳
- ・三者通話を利用した保護者への連絡

【実際の様子】

・SHRの様子



・授業の様子



・教室内掲示物



分野別掲示
ルビや多言語案内
QRコード



・母語話者による支援



成果

多くの教員が連携して、生徒の一日に関わることに
よる成果

- 副担任もその日の生徒の様子が分かるため、授業
等に対応しやすくなった。
- 自分が担任をする際のイメージをもてるため、
自分ならどうするか考えながらSHRに出られるよ
うになった。
- 言葉の問題の他、日本の学校が初めての生徒がい
るため、一斉の連絡が困難であったが、副担任の
個別の支援により、担任は全体への指示や伝達を
行うことができるようになった。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒会長（コロンビア出身）から中学生へのメッセージ〉
〇私は本当にこの学校に入って良かったと思っている。
田柄高校では他の学校にはない他の文化や国を知ること
で、どんな人とでも仲良くなるスキルを得ることが
できる。これはこれから日本に来る外国人がどんどん
増えている社会で欠かせないスキルだと思う。

今後に向けて

- 〇アセスメントの結果や日本語指導担当者会議の内容を
共有し個々の生徒の特性に応じた教科指導、進路指導、
生活指導を行う。
- 〇担任と副担任、学年付教員間で生徒情報を共有し連携
した指導や対応を行う。
- 〇教育相談、進路相談、三者面談の他、母語話者と生徒
との日常的な関わりを増やす。

取組のポイント

高校入試に向けた面接や作文の練習を通じて、自らのルーツやこれまでの努力・成果を振り返ることで、自己を理解し、表現する力を身に付ける。

取組

○6月末（1学期期末考査終了後）頃～

- ・目標設定 卒業生が高校入試終了後にまとめた「入試レポート」を読み、面接や作文の出題例を確認し、目標と現在地を認識する。自分のこと（過去・現在・未来）と志望校の両方を知る必要があることを理解する。
- ・考える 「自分のことノート」*で作文練習を始める。
語彙・モデル文→文型の確認→書く→添削→清書→暗唱
- ・考える 過去の出題例（作文）から、一つのテーマを選んで書く。

○夏休み以降

- ・形にする 作文の書き方を理解する。
原稿用紙の使い方、段落構成の作り方、字数配分、時間配分等
- ・仕上げる 作文練習→添削→清書の順で、繰り返し練習する。

○2学期～

- ・考える 作文の練習と並行して、面接の質問例の答えを考える。
日本語で考えることが難しい場合は、まずは第一言語で考える。
- ・形にする 添削→清書
教員との対話を通じて、分かる（意味が分かる・覚えられる）日本語で考えていく。
- ・仕上げる 面接練習
出入りのマナー、服装、姿勢、話し方等を理解する。

*「自分のことノート 中学生用」（子どものほんごライブラリ）

https://www.kodomo-kotoba.info/booklet/basicsearch_booklet_05.html

【実際の様子】

・授業の様子



・面接準備資料（一部）

5. あなたの国に関すること Your Country

1	あなたの出身地について紹介して下さい。 あなたの国、町のことを書いてください。 Please tell us about your country and hometown.
2	あなたの出身地の文化で、日本人に紹介したいことについて書いてください。 あなたの国の文化で、日本人に 教えてほしいことは ありますか。 What culture of your country would you introduce to Japanese people?

・作文練習資料（一部）

1. 高校生活に関すること School Life

トピック1と2について、それぞれ500～540字程度で書きなさい。 トピック1: あなたの長所は何ですか。2つ挙げ、理由を含めて書きなさい。 トピック2: あなたが南葛西高校で頑張りたいことを2つ挙げなさい。その理由と、どのように実現するかも書きなさい。 Write an essay on the given TOPIC1&2. Suggested length: 240～280 words each	南葛西 2023
Question1: What are your strong points? Write about two of your strong points and its reasons. Question2: Write two things you want to work hard on after you enter Minamikatashika High School. You should include reasons and ways to realize them.	

成果

- 出題例や質問例を知ることによって目標が明確になり、主体的に学習する姿勢が育った。
- 使える語彙や表現が増え、書くこと・話すことのが伸びた。
- 自分自身のことやルーツを振り返る中で、自らの経験が意味のあるものとして認められたりすることで、自己肯定感の向上につながった。
- 将来について考えることで、中学校卒業後の目標をもつことにつながった。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

- 早めに準備をすることが大切だと分かった。
 - 練習は大変だったが、高校に合格して嬉しかった。
- 〈日本語指導担当教員〉
- 取組を通して生徒が自分自身について考え、表現する力が伸びることを実感した。学年や入試の内容に関わらず、できるだけ全員に取り組みせたい内容だと感じた。
- 〈学級担任〉
- 高校入試に向けて、日本語学級での丁寧な指導により、生徒も自信をもつことができたようだ。

今後に向けて

- 引き続き、電話連絡や生徒を介した資料のやりとり等を通じ、学級担任と連携を取りながら学習を進めていく。
- 在籍校の先生とも資料を共有し、在籍校での進路指導に活用してもらう。

取組のポイント

自身のルーツ等を生かす活動を実施することで、自己有用感の醸成やアイデンティティの形成を図り、自らの存在を価値付けできるようにする。

取組

○文化祭に向けた活動（9月）

- ・文化祭のパンフレットの企画名を英語・ネパール語・タイ語・フィリピン語等6ヶ国語で表した「多言語版マップ」を制作した。
- ・企画ごとに翻訳してほしい内容と記入枠を示したワークシートを用いて、それぞれの生徒が一つずつ企画の内容を母語等に翻訳する活動に取り組んだ。その際、日本語指導担当教員や日本語指導支援員も各グループの様子を見ながら、必要に応じて日本語を簡単な表現に直して伝えるなどの支援を行った。
- ・記入したワークシートの内容をパンフレットの案内文に置き換えたものを作成し、文化祭当日に受付で配布した。また、生徒には配布場所に掲示するポップも作成してもらった。



School's popular music band
स्कूलको लोकप्रिय संगीत
बैंड.
Live, लाइभ
Saturday 14th only
शनिवार मात्र १४ गते.

軽音部

・作成したパンフレット

【実際の様子】

・授業の様子



・作成したポップ



成果

- 母語への翻訳を中心に、多言語への翻訳やイラスト描画等、生徒が自身のルーツや技能を生かした活動を行うことができた。
- 成果物を展示・配布することによって、外国につながる生徒の存在を知らせるとともに、生徒自身が自らのルーツを積極的に発信する機会をつくることができた。

児童・生徒や教員の感想

〈日本語指導担当教員・日本語指導支援員〉

- 生徒が非常に楽しそうに作業していたのが印象的だった。
- 自身の技能を生かして、母語以外に習得している言語で翻訳する生徒もいたことが興味深かった。
- 母国の国旗や山のイラスト等、母国とのつながりを前面に出して制作していた生徒が多かったのが印象的だった。

〈生徒〉

- 楽しかった。
- やってよかった。

今後に向けて

- 自身のルーツを肯定的に捉えることは、生徒のアイデンティティ形成や自己実現に向けて重要である。学校行事を中心に、同様の活動をする機会を1年間の中で複数回実施していく。

児童と本、児童と児童をつなぐ読書活動の充実

(八王子市立南大沢小学校)

ガイドライン
3-3

1 関連項目 「日本語指導の指導・支援の実際」

2 取組のポイント

児童が日本語や母語の本を紹介し合う活動や、教員がテーマに基づいて本を紹介する活動を設定することで、読書に親しむ姿勢や態度を育むことができる。

3 主な取組内容

実施時期：読書週間

実施形態：同じ日に指導を受ける児童による小集団

実施方法：【事前】読んだ本から紹介したい本を選び、紹介カードに記入する。

※紹介したい本がない児童は、教員と一緒に図書室で探し、借りる。

【当日】①教員による導入（読書の秋、読んでほしい本の紹介等）

②紹介カードを基に、皆の前で本を紹介する。

③教室内に本を多数設置し（※）、

皆で本を読む時間をもつ。

本を読んだ後は、感想カードを書く。

※設置した本

- ・児童の興味がある本（事前に把握）
- ・教員が児童に読んでほしい本
- ・児童の母語や、つながりのある国の本等

◆取組の工夫「紹介カード」と「感想カード」◆

- ・児童の日本語の能力に合わせて使用できるよう、4種類準備
- ①「（ ）は、（ ）をよみました。」+感想を選択（よかった等）
- ②「（ ）は、（ ）をよみました。」+感想（3行）
- ③ 感想（5行）
- ④ 感想（7行）

記入後、廊下に掲示→

4 成果

・モンゴル語の本を紹介した児童に対し、「読んでほしくて、自分の家のモンゴル語の本を持ってきた」という児童がおり、本を通じた交流が生まれた。また、読むことが苦手な児童の中にも「本がたくさんあって、皆で静かに読む雰囲気が好き」という児童もいた。授業とは異なる環境で、リラックスして、読書に親しみ、楽しんでいる様子が分かった。



取組のポイント

オンラインアセスメント等の結果の活用や、データを全教員で共有することで、入学当初から生徒の日本語の習熟度に応じた適切な支援を実施する。

取組

- オンラインアセスメント（J-CAT）の活用
 - ・結果を活かした取り出し授業や放課後の日本語指導のクラス分け
 - 日本語指導担当者会議（日本語指導委員会）
 - ・日本語指導コーディネーターを中心に、国語科、地歴・公民科、数学科、理科、外国語科、1学年、教務部の教員が、取り出し授業や放課後の日本語指導を中心に協議
 - ・4月に2回、以降は定期考査ごとに開催し、取り出し授業の対象生徒の入れ替えについて検討
 - 外部支援団体との連携
 - ・TEPRO、外部コーディネーター及び特定非営利活動法人与連携し、放課後の日本語指導を実施
- 〈1学期の例〉
- 日本語指導担当者会議 第4回
 - 放課後の日本語指導や取り出し授業による日本語の習得状況を確認
 - 課題「通常クラスに移動した生徒が取り出しクラスに戻ることに」
 - 意見・通常クラスに移動後も放課後の日本語指導を継続することが大切
 - ・取り出しクラス担当が通常クラスに相応しい日本語の能力があると認めることは重要
 - 放課後の日本語指導外部コーディネーターとの打合せ
 - 課題「出欠状況と学習への動機づけ」
 - 方策・出欠状況を担任と共有、面談を実施し学習のねらいを生徒と共有

【実際の様子】

・放課後の日本語指導



・オンラインアセスメント



成果

- オンラインアセスメントにより習熟度が数値化されたことで、例年よりも早くクラス分けをすることができ、習熟度に応じた指導を開始することができた。
- 習熟度が数字で示されるため、生徒と学習について共通理解を図りやすかった。
- 個別の指導計画を活用した面談をとおして、日本語学習の目標を立てさせることができた。
- 外部コーディネーターが放課後の日本語指導の取りまとめ役となっており、個々の講師への連絡等を担っている。各クラスの状況についても毎月報告書及び打ち合わせにより、学校と共有している。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

- 前よりも言葉が分かるようになった。嬉しい。
- 自分の気持ちを相手に伝えられるようになった。
- 漢字をいっぱい習った。日本語が上手になりたい。
- 授業が分かるようになった。日本人と話したい。

今後に向けて

- 日本語指導委員会を中心として、外部コーディネーター、学年、分掌、教科の連携を強化し、組織的な取組を確立する。
- 項目ごとの結果（聞くこと、語彙、文法、読むこと）を教科と共有し、個々の生徒の課題を踏まえた授業改善を行う。また、放課後の日本語指導においても個々の生徒の課題に応じたクラス分けを目指す。



取組のポイント

アセスメントを実施し、日本語の能力の習得状況と変遷を効果的かつ統一した基準で評価することで、日本語の能力に応じたグループ指導を実施する。

取組

○年度当初（4月）の実施

新規入学の日本語指導が必要な可能性のある生徒を対象にオンラインアセスメントを実施する。

○結果の活用

オンラインアセスメントの合計得点と各項目の得点、別に実施したアンケートと面接の情報を基に、「特別の教育課程」の対象者を4グループに分ける。

〈グループの基準〉

- ・グループA：ひらがな・カタカナの読み書きが十分にできない。
- ・グループB：ひらがな・カタカナの読み書きはでき、J-CATの合計得点が100点前後（初級相当）か、それ以下
- ・グループC：ひらがな・カタカナの読み書きができ、J-CATの合計得点が150点程度（初級後半）か、それ以上
- ・グループD：日本滞在歴が長く、文字・語彙および文法の得点が高い（得点率45%以上）が主に読解に課題がある。

【実際の様子】

・実施の様子（4月）



オンラインアセスメントを 集団で実施する際の工夫

実施に際してデジタル活用端末を活用した。一人につき1台の端末とイヤホンを割り当て、テスト開始までの手順を全体で確認しながら進めることで、生徒全員が問題なくテストを開始することができた。

事前の準備として端末にはWi-Fi接続とログインページのブックマークを設定した。またIDと生徒氏名の紐付けを行い、受験票は氏名を印字した状態で配付した。

端末の操作や指示は教室の前面に端末の画面を投影し、実際の操作を視覚的に示しながら行った。授業担当及び支援員は生徒の状況を見ながら必要に応じて操作を補助した。

成果

- 15名以上の生徒に対して、一斉にオンラインアセスメントを実施することができ、短時間で多数の生徒の日本語の能力を把握することができた。
- アセスメントに要する時間が短縮でき、早い時期（第3回目の授業）から生徒の学習段階に応じた指導が可能となった。また、生徒の状況把握の精度についても十分に満足できるレベルであった。

児童・生徒や教員の感想

〈日本語指導支援員〉

- 生徒のレベルが揃って指導しやすくなった。

〈日本語指導コーディネーター〉

- 根拠をもった数値を基に、特別の教育課程を編成・実施できるようになった。

今後に向けて

- 生徒に、オンラインアセスメントの結果の変遷をグラフ等で視覚的に示し、自身の課題を考えさせる活動を4月に実施する。

取組のポイント

「振り返りカード」を活用し、児童自身が目標をもって取り組めるようにするとともに、学級担任や保護者と共有することで、指導・支援の充実を図る。

取組

○年間を通じて取り組んでいる。

4月上旬 在籍学級の授業観察

4月中旬 児童が立てた「今年度の目標」の確認、担任と共有、個別の指導計画（前半）を作成して授業開始

毎回の日本語指導後に「指導記録」を共有するなど学級担任と連携

6月下旬 「振り返りカード（成果と課題）」を学級担任と共有

9月上旬 児童が目標〈2学期1回目〉を設定

9月中旬 個人面談（保護者の願い）を学級担任と共有、指導計画の評価・見直し

9月下旬 個別の指導計画（後半）の作成

毎回の日本語指導後に「指導記録」を共有するなど学級担任と連携

10月中旬 「振り返りカード（成果と課題）」を学級担任と共有

10月下旬 児童が目標〈2学期2回目〉を設定

11月下旬 「振り返りカード（成果と課題）」を学級担任と共有

※2学期は長期となるので、振り返る時間を2回設定

1月中旬 目標の設定（児童の願い）を学級担任と共有、毎回の日本語指導後に「指導記録」を共有するなど学級担任と連携

DLA実施（1年間の成果と次年度の目標設定のため）

2月中旬 個人面談（今年度の成長の確認、次年度の保護者の願い）を学級担任と共有

3月中旬 「振り返りカード（成果と課題）」を学級担任と共有、指導計画の評価、見直し、改善

【実際の様子】 ・振り返りカード

目標には、できるようになりたいことや頑張りたいこと、振り返りでは、できるようになったことや頑張ったことを記入している。また、以下のカード「先生にそっとおしえて!」を活用し、児童の変化も確認している。

成果

- 振り返りカードは、児童が記入（達成度選択・作文）する形だが、実態に応じて児童に聞き取りを行うことで、教員がより具体的な頑張りや課題・困り感を把握でき、指導計画に生かすことができた。
- 児童は、学期始めに目標を立て、1カ月半ごとに頑張りや課題を振り返るので、次の取組や改善の方向性が明確になり、児童自身の目標の明確化につながっている。また、自分が目標を立てたことで、うまくいかなくても、意欲を失わず、苦手を克服しようと取り組む姿勢が見られている。

児童・生徒や教員の感想

〈学級担任〉

- 学習での困り感だけでなく、クラスの様子も把握でき、多面的な児童理解や共有につながった。
- 文化の違いによる戸惑いや学級で聞きそびれたことなどを個別に対応、補足説明してもらい、児童の不安の和らげにつながっている。

今後に向けて

- 現在は、簡単な確認テストや面談・授業観察等で児童の日本語の能力を把握し、指導計画を作成している。次年度は、年度初めからDLAを実施することで、一人一人の実態に応じた指導・支援の充実につなげていきたい。
- 今年度の後期に、DLAを実施。思っていた以上に語彙が豊富だったり、読み取りができていなかったりなど児童の新たな一面を知り、指導を見直すことにつながっている。

取組のポイント

校内委員会（グローバル委員会）が中心となり、個別の指導計画の作成・見直しを行うことで、日本語指導が必要な生徒への指導・支援の充実を図る。

取組

○体育的行事委員会や文化的行事委員会と同じ位置付けで、グローバル委員会を設置し、組織的に、日本語指導に対する取組の充実を図る。

7～8月 個別の指導計画の作成・年間指導計画の見直し

- 〈内容〉・日本語指導コーディネーターが受講した日本語指導理解促進セミナーの内容を受けて、個別の指導計画の作成及び見直し
・これまでの日本語指導アンケート（本校独自書式）、中野区国際交流協会（ANIC）からの報告及び学校での日本語指導や学校生活の取組状況を基に、個別の指導計画の作成及び年間指導計画（日本語指導の内容を詳細に記載）の見直しをグローバル委員会で実施

12月 個別の指導計画の見直し

- 〈内容〉学校での指導状況や中野区国際交流協会（ANIC）からの報告等を基に、成果と課題を確認、年間指導計画の見直し

3月 個別の指導計画の整理及び次年度の目標設定

- 〈内容〉学校での指導状況や中野区国際交流協会（ANIC）からの報告等を基に、生徒の1年間の日本語学習の進捗状況を確認し、個別の指導計画に記入。次年度へ向けて、各生徒の目標を設定

【実際の様子】

- ・日本語についてのアンケート及び記録カード（一部）

成果

○個別の指導計画の年間指導計画に追記できるよう記入欄を設けることで、年間を見通した日本語指導計画を作成することができるとともに、生徒の日本語学習の進捗状況と目標との進捗を照らし合わせて確認することができるようになった。

児童・生徒や教員の感想

〈管理職〉

○それぞれの生徒の指導において、見通しをもった指導と中野区国際交流協会（ANIC）との連携を意識した指導の実施を考えるなど、教員の意識に変化が見られた。

今後に向けて

○日本語指導が必要な生徒に対する共通理解を図るためのツールとして、個別の指導計画を活用していく。また、目標等については、生徒や保護者と共有する機会を設け、生徒が主体的に日本語学習に取り組めるようにする。

取組のポイント

日本語指導における学習評価やDLAの結果等について、児童や保護者に伝えることで、日本語指導の方針の明確化を図る。

取組

○年間を通じた取組

- ・日々の授業での様子を評価する。

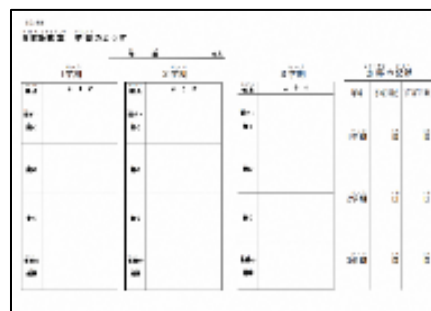
学級担任との連携のため、日本語指導での様子をノートに記入

○時期を決めて実施している取組

- ・6～7月 「話す・聞く」「読む」「書く」「言語の理解」の4観点で、学習評価をし、所見を記入（通知表）
- ・7月 DLAの実施
 - ・結果を学級担任に渡し、これまでの日本語使用の実態とDLAの結果との差異について状況を共有
 - ・在籍学級の様子（日本語の理解度）を学級担任から聞き、学級でのテストや授業の様子を踏まえ、卒級について学級担任と協議
- ・7月末 DLAの結果を面談にて保護者に報告
 - ・卒級について保護者に相談
 - ・学級担任との連携のため、日本語指導での様子をノートに記入
- ・11～12月 「話す・聞く」「読む」「書く」「言語の理解」の4観点で、学習評価をし、所見を記入（通知表）
- ・2～3月 「話す・聞く」「読む」「書く」「言語の理解」の4観点で、学習評価をし、所見を記入（通知表）、来年度の個別指導計画を作成

【実際の様子】

・通知表



・DLAの実施の様子



成果

○毎学期、授業での様子を具体的に分かりやすい日本語で、通知表を出すことで、児童にも保護者にも日本語の理解状況を知ってもらうことができた。さらに、保護者にも長期休みに日本語学習を進めてもらった。

○日本語の能力を評価することで、次の学期の指導内容を具体的にすることができた。

児童・生徒や教員の感想

〈日本語指導担当教員〉

○通知表を見ることで、自分ができるようになったことが明確に分かった。

○DLAの結果で、児童の日本語の能力を客観的に把握することができ、卒級を進める材料となった。

○「DLAは緊張したけど、楽しかった」と話している児童が多かった。

今後に向けて

○人数が多いと、通知表を書くことに時間がかかる。また、学級担任にも内容を確認してもらうため、日本語教室に通う児童が多い学級担任の負担が大きい。クラス編成の段階で、日本語教室へ通う児童のバランスを考慮する。

○日本語指導担当教員が、DLAを年1～2回実施することで、日本語指導担当が児童の実態を確実に把握し、授業に生かすことができ、児童の日本語能力を更に引き出すことができるようになる。



学級担任等との連携型個別の指導計画の作成による 指導方針の明確化 (豊島区立西池袋中学校)

ガイドライン
4-2

1 関連項目 「個別の指導計画の作成」

2 取組のポイント

連携型個別の指導計画を作成し、指導目標や指導内容を明確にすることで、生徒一人一人に合った日本語指導や教科の補習を実施する。

3 主な取組内容

主な流れ：①生徒及び保護者から、来日時期、日本語学習歴等について聞き取り

②学級担任や教科担当者への聞き取り

③アセスメントを実施し、指導目標を設定

④個別の指導計画の作成、共有

⑤個別の指導計画の見直し、追加・修正

日本語指導担当教員と、学級担任や学年の教員が、日常的に日本語指導での様子や学級での様子について情報交換をし、生徒への指導に生かしている。

取組のポイント：

- ・年度当初の日本語指導での様子等から、個別の指導計画を作成するが、1学期の取組や学校での様子等を基に修正を加え、1学期末の特別支援校内委員会及び職員会議で全職員で共有する。
- ・アセスメントについては、生徒の実態に応じ、量や時期等を工夫し、柔軟に実施するとともに日常の様子からの把握も重視している。

連携型個別の指導計画

【記載内容】

- 学年
- 氏名
- 日本語教室での指導内容
- 指導時数（週）
- 取り出し教科
- 定期考査について
- 実施教科、ルビ希望の有無

4 成果

- ・個別の指導計画を共有することで、日本語の能力や指導内容について共通理解を図ることができており、在籍学級等での指導方法の具体化・明確化につながっている、

複数の教員による第二言語の習得状況の把握 (スウェーデン テルスボルグ中学校)

ガイドライン
4-3

1 関連項目 「学習評価と指導の終了」

2 取組のポイント

複数の教員で、生徒のスウェーデン語の習得状況や予備クラスでの様子を確認し、教科の授業等への参加の可否を判断し、指導・支援の方法を明確にする。

3 主な取組内容

予備クラス：新規入国生徒を対象に、スウェーデン語の授業を実施

入国当初は全時間、予備クラスに参加し、徐々に普通クラスに移行
生徒の年齢、出身国、学習経験、スウェーデン語レベルは多様
第二言語としてのスウェーデン語の国家試験（9年生の春に受験）の合格を目指す。

スウェーデン語指導担当教員と各教科担当教員が、新規入国生徒のスウェーデン語の習得状況や予備クラスでの様子を確認し、授業への参加について科目ごとに判断する。
予備クラスでの指導の終了や、各教科等での具体的な指導・支援の方法を確認する。



授業の様子

皆が話しやすいよう日常的な会話からスタート



生徒ごとの時間割表

生徒が作成・管理

4 成果

- ・スウェーデン語の教員の判断だけでなく、教科担当教員等と共に、対象生徒の実際の姿を共有することで、できることと支援があればできることを把握し、生徒に応じた指導の充実を図っている。

取組のポイント

確認テストを基に課題を明確にし、授業の中で繰り返し語彙や表現等の学習に取り組ませることで、日常的に活用できる力を付け、言葉の定着を図る。

取組

- 確認テスト（4月中旬）
 - ・第1回を行い、言葉の能力を把握
 - 【主な内容】
 - 数、日付、反対言葉、過去・現在・未来など
- 確認テスト後（4月中旬以降）
 - ・毎時間、授業の中で、数クイズや日付クイズ等（2～5分程度）を実施
 - ※主な内容のうち、習得が50%以下の内容を優先的に実施
- 確認テスト（9月下旬）
 - ・第2回を行い、児童が自分の成長を把握
 - 習得率80%以上の内容は、回数等を調整するなど、指導計画の評価、見直し
- 確認テスト（3月中旬）
 - 第3回を行い、児童が自分の成長を把握
 - 指導計画の評価、見直し、改善

「ものの数え方
確認テスト」

1	一つ	2	二つ
3	三つ	4	四つ
5	五つ	6	六つ
7	七つ	8	八つ
9	九つ	10	十

「反対言葉
確認テスト」

1	大	2	小
3	多	4	少
5	高	6	低
7	速	8	遅
9	近	10	遠

【実際の様子】

- ・「数や日付」の言い方



- ・「過去・現在・未来」の言い方



- ・「反対言葉」の言い方



成果

- 繰り返し取り組むことで習得が早く、日常生活で活用する場面が増えた。
- 休み時間等に国際教室を訪れ、友達同士でクイズを出し合ったり、確認し合ったりする様子が見られ、学ぶ意欲を高めることができた。

児童・生徒や教員の感想

〈日本語指導担当教員〉

- 毎時間、同じ教材を繰り返し活用して取り組んでおり、できるようになったところを児童が実感しやすかった。また、確認カードでできたところにスタンプを押すようにし、児童は目標を明確にして取り組んでいた。
- 短時間（2～5分）の取組なので、指導計画に影響しにくかった。

〈児童〉

- 繰り返し練習して、数を数えられるようになってうれしい。次は、日付を言えるように練習したい。

今後に向けて

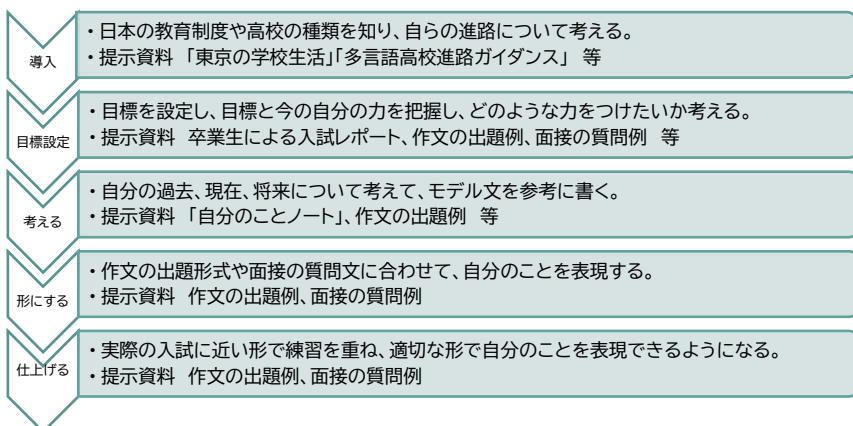
- 取組を継続し、言葉の定着を図る。
 - 習得した児童も回数を減らして継続指導を行ったり、学んだ語彙を繋げたりすることで、言葉の定着を図るようにしていく。
- 例：・「明日」は「月曜日」です。
 ・「十月」「三日」は「木曜日」です。
 ・〇〇が「五つ」あります。

取組のポイント

「東京の学校生活」や高校入試に係る資料等を活用して日本の教育制度等について知ること、生徒の主体的な進路選択を支援する。

取組

- 「東京の学校生活」（中学校編 ⑥進路）を視聴させ、中学校卒業後の進路について、生徒の考えを確認する。
- 時期や生徒の様子に応じて、入試制度や高校見学について説明する。
- 必要に応じて、「令和6年度東京都立学校に入学を希望する皆さんへ（英語版、中国語版、韓国版）」等のウェブサイトを紹介する。（一人1台端末を活用）
- 授業で使用した資料は保護者にも読んでもらい、志望する学科や志望校等について家庭で考えをまとめて、三者面談等で学級担任と話すよう助言する。
- 生徒がいつでも閲覧できるよう、高校入試関係の資料を日本語教室内に設置する。



【実際の様子】

- 日本語学級に設置した資料



- 「東京の学校生活」を一人1台端末で視聴



- 高校入学試験レポート

2024年度 高校入学試験レポート

学校名	科目	内容
東京大学	国語	読解力、表現力
東京大学	英語	読解力、表現力
東京大学	数学	論理力、計算力
東京大学	理科	観察力、実験力
東京大学	社会	読解力、表現力
東京大学	体育	運動能力
東京大学	芸術	表現力
東京大学	外国語	読解力、表現力
東京大学	総合	読解力、表現力

※受験時の様子や受験に向けて頑張っていたこと等を記入してもらっている。

成果

- 「東京の学校生活」を視聴したことで、主体的・具体的に進路について考える様子が見られた。
- 多言語版の進路ガイドを読むことで、入試制度や費用など、日本語では難しい情報についても理解を促すことができた。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

- 高校の種類や学科を知って、進路について考えることができた。
- 私立高校に行こうと思っていたけれど、「東京の学校生活」を見て都立高校に行きたいと思った。
- 英語版の進路ガイドを読んで、高校でかかるお金が分かった。これを親に見せれば話し合える。

〈教員〉

- 動画や資料を見せたことで、生徒から具体的な進路希望が聞けるようになった。

今後に向けて

- 学級担任に指導内容を報告し、連携をとりながら進路指導を進めていく。
- 3月に進路報告会を行い、卒業前の3年生に体験談や後輩へのアドバイスを話してもらう機会をもつ。今後は小学校併設校である特徴も生かし、小学生や保護者にも参加してもらい、中学生が自身の進路について見つめ直す機会としても活用する。



一人1台端末の活用等による学び合い (港区立麻布小学校)

ガイドライン
5-3

1 関連項目 「日本語指導に活用できる教材・資料」

2 取組のポイント

児童がいつでも観察可能な場所に植物を植え、全員で観察日記に取り組むことで、体験に基づく言葉の獲得と一人1台端末等を活用した学び合いを実現する。

3 主な取組内容

実施方法：①ツルレイシ（ゴーヤ）の植え付け：土や苗に触れる中で、様々な言葉を学習

②観察に関する取組の実施

出身国や地域によって、植生も異なるため、ゴーヤを育てること自体が初めての体験となる児童もいる。

日本語学級かんさつカード

学年	名前	① 6月6日～	② 7月1日～	③ 7月15日～
2年	Aさん	A 6月14日	A 7月8日	
	Bさん	B 6月20日		B 7月19日
	Cさん		C 7月10日	C 7月16日

【一人1台端末を活用した取組】

- ・スプレッドシートに掲載された、
他の人（同学年・異学年）の観察日記を読み、「モデル」をつかむ。
- ・「観点」や「書く順序」などについて、気付いたことや自分の観察日記に
生かしたいこと等について話す。更に、読んで「すごい」「さすが」と
思ったことや、「これも書いたら」と思ったことを付箋で指摘する。

（例：においはありましたか、〇〇みたいでしたか等）

◆児童が他の児童の観察日記から気付いた表現等◆
色、触覚（硬い、柔らかい、ガサガサ、チクチク）、長さ（～cm）、
形（～に似ている、くねくね）、葉の数（枚）など

4 成果

- ・通常は、一対一や一対二での授業が多いため、一つの日本語学級に通っていても、一緒に活動に取り組むことが難しいが、教室の掲示（紙）といつでも閲覧可能なスプレッドシートを活用することで、場所と時間を越えた学び合いが可能となる。児童は日本語の表現だけでなく、観察日記の書き方（イラスト、観点等）についても学んでいた。また、高学年になると、社会科で学んだ知識等を活用し、気候等の違いによる植生の違いについても理解を深めていた。

児童と教職員とのつながりを生む、日本語指導の取組 (足立区立保木間小学校)

ガイドライン
5-3

1 関連項目 「日本語指導に活用できる教材・資料」

2 取組のポイント

校内の様々な人に年賀状等を書き、思いを伝える活動に取り組ませることで、日本語で表現することの楽しさを実感し、日本語学習に主体的に取り組む姿勢・態度を育む。

3 主な取組内容「年賀状」

実施方法：1時間目 干支や年賀状についてDVD等で理解し、年賀状を送る相手を決定する。

2～3時間目 書きたい形式を選んで年賀状（A4）を書き、声に出して読む練習をする。※書き終わったら、中休み等の時間に直接届ける。

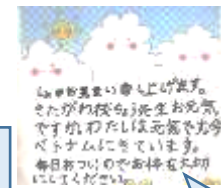
新年明けましておめでとうございます
しむぎのみなさん、お元気ですか。
いつも私たちのためにありがとうございます。
今年もよろしくお祈りします。



児童が年賀状を送った相手

- ・学級担任
- ・校長
- ・副校長
- ・学習支援員
- ・栄養士
- ・事務室の職員
- ・養護教諭
- ・給食調理員等

◆年賀状のやりとりが、児童と校内の教職員とをつなぐ、貴重なきっかけとなっている。



暑中見舞い

暑中見舞いでも同様の取組を実施したところ、返事をくれた職員がいた。児童は感激した様子だった。
また、届ける活動を通じて、校内を探索する機会にもなっている。

4 成果

- ・相手に届けるまでは大変緊張していたが、届けた後はどの児童も大変嬉しそうな様子だった。自分の日本語を使って、思いを伝えることができたという達成感に満ち溢れていた。
- ・年賀状等を受け取った教職員にとって、日本語教室の児童とつながりをもち、コミュニケーションを取るきっかけになっていた。また、児童にとっても、世界や関係性が広がる機会となっている。
- ・児童にとって苦手な「読むこと」「書くこと」に楽しく取り組める活動である。相手意識をもって日本語で伝えることの楽しさや意味を実感している様子だった。

地域を知る、郷土カルタを活用した日本語指導 (江東区立枝川小学校)

ガイドライン
5-3

1 関連項目 「日本語指導に活用できる教材・資料」

2 取組のポイント

平仮名や片仮名の知識を活用してカルタに取り組ませることで、文字を読む力を高めるとともに、区内の様々な地域や名所等についても理解を深めることができる。

3 主な取組内容

使用したカルタ：区内の地域や名所等を紹介している市販のカルタ

対象学年：小学校5・6年 実施時間：授業の冒頭等の時間を活用

実施方法：①教員が読み札を読み、児童が取り札を取る。取った札について「あしどり地

図」で場所や場所に関する知識、経験等を確認する。 ※何回か繰り返す。

②児童自身が読み手になり、他の児童や教員が取り札を取る。

③カルタの中から訪れてみたい場所や調べてみたい場所についてタブレットで調べ、概要（いつ頃できたか、どのような場所か等）をまとめる。

◆取組のポイント◆

- ・平仮名・片仮名の学習が終われば、誰でも取り組むことができる。
- ・読み手としても活躍することで、児童が自信をもつことができる。
- ・カルタで取り上げられた場所の中には、教科の学習と関連したところもあるため、教室での学習を意識して取り組ませることもできる。

例) 国語科 俳句の学習（芭蕉庵史跡展望庭園、採茶庵跡等）
社会科 地図の学習（伊能忠敬像、伊能忠敬住居跡等）



4 成果

- ・児童がカルタを楽しむ様子が見られただけでなく、場所を確認する中で、地域の特徴（橋が多く、川や運河が多いこと等）や歴史についても発見し、理解を深めていた。日常的に取り組む「あいうえお作文」での学習を生かし、皆で「枝川カルタ」を作成することも、今後の学習として考えられる。

多様な生徒に対する、集団指導の実施 (スウェーデン テルスボルグ中学校)

ガイドライン
5-3

1 関連項目 「日本語指導に活用できる教材・資料」

2 取組のポイント

第二言語習得の状況が多様な生徒に対する一斉授業において、毎回取り組む活動や、生徒の興味に沿った読み物教材を活用した授業を実施することで、スウェーデン語の能力の伸長を図る。



3 主な取組内容

①授業の見通しをもつ。

②自分自身のことを表現（例：食事について）する際に必要な語彙を復習する。

③自分自身のことを話す。（例：今朝、パスタを食べました。など）

④③の語彙も活用しながら、

短い読み物を読み、内容を確認する。

読み物では、生徒と同世代のマララ・ユスフザイさんのことを話題として取り上げ、内容からも生徒が自身の生き方について考えを深められるように工夫している。また、ICTを活用するなど、様々な形で理解支援を行うことで、レベルに関係なく、参加できている。



4 成果

- ・毎回導入部で実施している語彙の確認や復習の活動について、生徒が積極的に取り組んでおり、教員が忘れたときには「今日はやらないんですか。」等の声も聞かれる。
- ・生徒の様々な課題に寄り添いながら、一人一人に合ったスウェーデン語教育を実施することができている。

取組のポイント

OJT研修を実施し、全教職員で日本語指導やDLA等に対する理解を図ることで、在籍学級での指導・支援をはじめ、学校全体で指導・支援の充実を図る。

取組

○年間を通じた取組

在籍学級での児童の様子を観察をし、日本語でできることできないことの共有する。必要に応じて、校外学習等の引率に行き、日本語のフォローをする。

○時期を決めて実施している取組

- ・ 7月 DLAの実施（DLAモデル地区事業の活用）
※学級担任に実施結果報告書等を渡し、児童の日本語の能力の確認と、日本語指導での今後の方針や学級での支援について共有
- ・ 9～11月 DLAの結果に基づいた日本語指導での授業実践
- ・ 11月 在籍学級の学級担任や学年の学級担任等と共有
 - ・ 日本語指導担当教員が、児童別に、DLAの結果と実践してきた日本語指導をまとめ、共有
 - ・ 在籍学級の担任や学年の学級担任に学級や学年で実践できそうな支援方法や指導方法を考えてもらい、12月のOJT研修で共有することを伝達
- ・ 12月 日本語指導について、大学教員を講師として校内研修を実施
〈主な内容〉・日本語指導の概要
・ 学校全体で日本語支援をする方法など
DLA実施方法及び実施結果の概要を取りまとめ、「OJT研修」で伝達
〈主な内容〉・DLAの結果を活用した支援方法
・ 日本語指導担当教員として、学級担任に支援してほしいことなど

【実際の様子】

・ 研究授業の様子



・ 校内研修（12月）の様子



※研究授業・研修には、市内で日本語指導担当する教員も参加した。各校が連携し、取組の充実を図っている。

成果

- 学級担任以外にも、全教職員で日本語指導やDLAについて共通理解を図ることで、学校生活全体を通じ、全教職員による、対象児童への指導・支援を具体化することができた。
- 日本語指導の目標を理解し、学級での支援方法を全教職員で考えることができた。

児童・生徒や教員の感想

〈教員〉

- OJT研修を通じて、学級で支援できることを共有することができ、指導・支援の幅が広がった。
- JSL評価参照枠について全教員で理解することができ、一つ上のステージを目指して指導していくことが明確になった。
- 日本語教室での様子を把握し、学級でできることを考えたいと改めて感じた。
- 日常会話ができているにもかかわらず、教科の学習は理解できていないことがあることが分かった。

今後に向けて

- 定期的にOJTを実施していきたい。また、DLAについて理解し、実施できる教員を増やしていきたい。
- 日本語教室の教員と学級担任の連携をさらに深め、児童の個別支援の充実を図っていきたい。
- 教科において、外国につながる児童は支援が必要なことを忘れずに、全教職員で個別に支援をしていく。



取組のポイント

グローバル委員会の企画・運営で研修を実施し、共通理解を図ることで、全教職員で、日本語指導が必要な生徒に対する指導・支援を充実させる。

取組

○年間を通じて、研修を実施する。

- ・ 4月 日本語指導ガイダンスの実施【全教職員】
 - ・ 新たに着任した教職員を始め全教職員で理解、共有
〈主な内容〉本校での日本語指導の沿革、日本語指導が必要な生徒の実態及び受入れまでの流れ、実際に行っている日本語指導の種類等について
- ・ 6月 日本語指導校内研修①【全教職員】
 - ・ DLA講習と日本語指導理解促進セミナーの還元研修
〈主な内容〉東京都における日本語指導が必要な生徒の状況、DLA、日本語指導を行う視点等
- ・ 9月 日本語指導校内研修②【全教職員】
 - ・ 中野区国際交流協会の職員を講師に、研修を実施
〈主な内容〉①中野区国際交流協会（ANIC）での日本語指導について
②在籍学級における指導・支援の手立てについて
- ・ 12月 日本語指導校内研修③【全教職員】
 - ・ 東京都教育委員会の指導主事を講師に、研修を実施
〈主な内容〉DLAの実施と結果の活用について

【実際の様子】

- ・日本語指導ガイダンス資料



- ・校内研修①資料

日本語能力を学ぶ意義

グローバル化は東中だけでなく

(2) 東洋語科に学ぶ意義は国際経済社会の発展・生活の安定に資する点にある

国名	人口	国内総生産 GDP	貿易総額 GDP	貿易総額 GDP	貿易総額 GDP	貿易総額 GDP
中国	1,367,177,171	11,111,490,000	6,071,000,000	6,071,000,000	6,071,000,000	6,071,000,000
インド	1,102,334,424	1,919,000,000	1,919,000,000	1,919,000,000	1,919,000,000	1,919,000,000
ブラジル	207,146,297	1,819,000,000	1,819,000,000	1,819,000,000	1,819,000,000	1,819,000,000
ロシア	143,882,951	1,757,000,000	1,757,000,000	1,757,000,000	1,757,000,000	1,757,000,000
インドネシア	237,641,326	1,740,000,000	1,740,000,000	1,740,000,000	1,740,000,000	1,740,000,000
アメリカ	307,075,437	1,616,000,000	1,616,000,000	1,616,000,000	1,616,000,000	1,616,000,000
日本	127,847,923	5,471,000,000	5,471,000,000	5,471,000,000	5,471,000,000	5,471,000,000

- ・校内研修②の様子



成果

○4月のガイダンスおよび、6月・9月・12月の日本語指導についての研修を通して、日本語指導担当だけでなく、全教職員が「日本語指導が必要な生徒の実態」や「本校における日本語指導」についての共通理解を図ることができた。

児童・生徒や教員の感想

〈学級担任〉

○校内研修②を通じ、今後すぐ活用できる、やさしい日本語を学ぶことができた。すぐ実践し、授業改善や日常生活での対話に活かしていきたい。

○生徒が「日本語が分かった」と実感できることが自信につながるという言葉が印象に残った。日本語を学ぶ生徒たちが前向きに学校生活を送れるよう、声を掛けていきたい。

今後に向けて

○今年度は、新たに「グローバル委員会」を設置し、本校での日本語指導について全教職員に共通理解を図ることを重点に行った。今後は、今年度の活動を継続して実施し、日本語指導体制の定着を図る。また、中野区国際交流協会（ANIC）との連携をさらに深め、より充実した指導・支援を目指す。



取組のポイント

区内在住の外国にルーツのある子どもや大人に区内の小中学生に日本語指導を実施する、中野区国際交流協会（ANIC）と連携・協力することで、日本語指導・支援の充実に図る。

取組

- 中学生日本語集中教室：ANICでの日本語指導（希望制）
 - ・週1～2回、生徒は直接ANICへ行き、日本語指導を受け学校へ戻る。
 - ・ANICのプログラムに沿って「話す・聞く・読む・書く」を学ぶ。
- ANICの日本語指導員による本校での日本語指導（希望制）
 - ・申請が通った生徒は通算80時間まで、取り出し指導を受けられる
 - ・本校コーディネーターも見学し、指導方法の共有と生徒の状況を把握する。
- ANICの指導方法
 - ・独自教材で指導する。※全課終了すると、JLPT 3級程度
 - ・日本語指導員により、個別・小グループ制で指導する。
 - ・中学3年生に対し、進路相談も適宜行う。
- ANICと学校との連携
 - ・年間と毎月の行事予定表を送付し、学校の授業や行事等を共有する。
 - ・毎回の指導記録を共有し、中学校での日本語指導や教科指導等に役立てる。
 - ・コーディネーターとの情報交換で生徒理解を深める。

【実際の様子】

- ・ANICでの日本語指導



- ・学校での日本語指導



- ・情報共有シート

成果

- 日本語の習熟度に合わせて丁寧な指導が実施された。
- 学習内容や生活指導に関する情報の共有は、生徒の実態把握と保護者連絡に役立った。
- 専門家による指導のため、理解の進度が早まった。
- 同じ環境の仲間と学べるため、精神的にも孤立せず学んでいる。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

○ANICの教室があったから、日本語を早く学ぶことができ、希望した高校に進学できた。

〈保護者〉

○ここまで手厚く日本語を習得できる環境は保護者としても有難い。

〈ANIC〉

○中学校で指導方法を見学できるので参考になる。
○他校の生徒との交流も生徒にとっても、よいと思う。

今後に向けて

- ODLAを参考に、個別指導計画に沿った連携を進める。
- ANICの往復途中の安全管理には引き続き注意が必要である。（面談時に保護者と確認）
- ANICの指導を各校でどのように生かしているか、中学校間の情報交換を行う。
- 学校と保護者・生徒との通訳依頼は現在も可能であるが、更に多言語で日常的に行ってくれる体制を構築する。



取組のポイント

全ての教科・科目において日本語指導の視点を取り入れた授業改善を行うことで、特定の教科や担当者に限定されない、組織的な支援の充実を図る。

取組

- 生徒の困り感を学校全体で共有する。
 - 6月 人権講話（教員・生徒対象）「多文化共生社会に生きる」
 - 7月 在留資格に関する研修（教員・生徒対象）
 - 9月 日本語指導の視点を取り入れた授業改善の校内研修（第1回）
擬似体験ワークショップで「もどかしさ」を体験 当事者目線で必要な支援を考える。
- 日本語指導の視点を得る。
 - 8月 教職員研修センター専門性向上研修等に参加
 - 9月 専門性向上研修参加者からの報告（職員会議）
日本語指導の視点を共有し、授業改善に繋げる。
日本語指導の視点を取り入れた授業改善の校内研修（第1回）
大学教員及び学生による授業見学
助言とワークショップ（既存の工夫や取組を日本語指導の視点で捉える）
 - 10月 日本語指導研究協議会
大学や日本語学校等、外部専門機関の教員及び学生、都立高校の教員等が日本語指導の時間を見学後、放課後の日本語指導の現状と課題について協議
 - 11月 日本語授業見学会
国語（通常クラス）、国語（取り出し）、歴史探究（取り出し）
小中高の教員の参観・意見交換会を生かし授業改善
 - 12月 日本語指導の視点を取り入れた授業改善の校内研修（第2回）
「やさしい日本語」の視点から現状の見直し

【実際の様子】

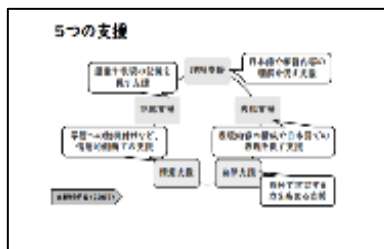
- ・日本語授業見学会
3科目を公開



- ・校内研修（第1回）



- ・校内研修（第1回）資料



成果

- 教員の経験から「効果が見込まれる」と考えた手法について、その裏付けとなる日本語指導を学び、その効果について確信をもつことができた。自身の授業を改めて振り返り、個々の活動の意味や意義を確認することができた。
- 他校の取組や専門家の助言により、新たな視点から現状と課題の捉え直しと方策の検討ができた。
- 中学校日本語学級教員等、新たな日本語指導に関するネットワークができた。

児童・生徒や教員の感想

- 〈教員〉
- 人数が多いクラスには、生徒同士の対話などの活動ができるメリットがある。対話の相手は教員だけではない。生徒同士の学び合いもある。
- 概念的知識の有無が高校での学習に影響を与えていると思った。概念的知識があれば、ある程度日本語を身に付ければその学習は進んでいく。
- 高校での授業を知ること入学までに必要なこと（言葉の概念を含めた包括的な力）が分かった。

今後に向けて

- 個々の教員の取組を校内で共有する。（研究授業等）
- 教科で取り上げる単元（年間の指導計画）を外部コーディネーターと共有し、教科と放課後の日本語指導との連携を図る。
- 他校との交流（相互授業参観）を行い、新たな視点からの現状と課題の把握を継続する。
- 日本語指導に関わる学校間のネットワークとして今後も日本語指導研究協議会を開催する。その際、協議の時間や形態などを工夫し、質的改善も図る。

取組のポイント

「やさしい日本語」についての研修を実施することで、授業をはじめ様々な場面で、外国につながる生徒等に配慮した日本語を使う意識をもつ。

取組

○第1回（6月）

- ・学習言語、日本語の難しさについて
- ・外国人の日本語の使用状況について
- ・「やさしい日本語」の基本（「はさみの法則」）
- ・わかりやすく伝えるための10のルール

◆高等学校で日本語の授業を行うにあたって、「やさしい日本語」を用いることで、外国につながる生徒たちの日本語に対する困難さを緩和できることが期待される。教員が「やさしい日本語」の考え方を知り、それを意識した言葉遣いを日常的に行えることを目指して校内の教員に向けた研修を実施する。

○第2回（9月）

- ・「やさしい日本語」を使うための演習
 - ・学校からの文書等を誰にとっても分かりやすい内容にするための工夫について
- ◆日常で使われている日本語を「やさしい日本語」で表現する演習を行う。
（「演習例」参照）また、他校の事例等を示しながら、多様な言語的背景の人たちに伝わる文書の書き方について学ぶ。

【実際の様子】

・研修の様子



・演習例

「やさしい日本語」の表現に直しましょう！－青総定時編－

- ◆今週土曜日の文化祭で生產品の販売を行います。
- ➡今週土曜日に、文化祭があります。野菜や花を売ります。
- ◆夏季休業期間中の令和6年8月13日（火）から8月15日（木）まで、学校閉庁日のため、本校1階経営企画室の窓口業務と職員室対応を停止します。
- ➡8月13日から15日まで、学校は休みです。先生はいません。事務室の人もいません。注意してください。

成果

- 教員が「やさしい日本語」を使う意識をもつことができた。
- 「やさしい日本語」の考え方をを使って、授業内での説明を行うようになった。
- 生徒が混乱する口癖（「はい」や「ちょっと」等）に気を付けて話すことを心掛けるようになった。

児童・生徒や教員の感想

〈教員〉

- 普段使っている言い回しの中で、分かりにくい表現があることを知ることができた。
- 表現の仕方を考える意識付けができた。

〈生徒の教員の日本語に対するアンケート結果〉

※研修後に実施

- ・全部わかる・大体分かる … 6名
- ・分かるけど難しい … 5名
- ・分からない … 1名

今後に向けて

- 教員の日本語については「分からない」と感じる生徒は少数であるが、難しいと感じている生徒は多い。特に書類に関してはまだ難しい表現が多くあるため、「やさしい日本語」版の作成を進めていく。

校外の研修等を活用した専門性の向上

(瑞穂町立瑞穂第二中学校)

ガイドライン
6-1

1 関連項目 「日本語指導担当教員の専門性の向上」

2 取組のポイント

都教育委員会主催の日本語指導に係るセミナー等に参加することで、日本語指導や校内体制の充実を図る。



3 主な取組内容

〈課題〉

初めて日本語指導を担当するため、日本語指導に関する知識や情報等が十分ではない。
地区内に、日本語指導担当教員もいないため、指導方法等について相談することも難しい。

〈参加した研修〉

- ・日本語指導理解促進セミナー、DLA実施者養成講習

〈研修を通じて理解を深めたこと〉

- ・いろいろな角度から生徒の日本語の能力や学習歴、授業等での様子を把握し、一人一人に応じた日本語指導を実施していくことの重要性や具体的な取組（母語の活用等）

4 成果

- ・研修での協議を通じ、具体的な指導方法について経験のある教員に教えてもらったり、他校の事例を聞いたりすることで、指導の改善・充実につなげることができた。
- ・国語科の教員が担当となり、教科としての専門性を日本語指導に生かすことができた。
- ・DLA等により、生徒の強みや課題を踏まえて指導していくことができるようになった。生徒が苦手としていた作文にも前向きに取り組むようになり、在籍学級で発表することでもできた。また、授業前に教員を呼びに来るなど、日本語の授業を楽しみにしている。
- ・日本語指導プログラムの具体的な指導方法（教材、指導内容等）については、今後も、理解を深めていきたい。校内でも、研修で学んだことを発信する機会をもっていきたい。

日本語学級と在籍学級の連携を目指した研修の実施

(武蔵村山市教育委員会)

ガイドライン
6-2

1 関連項目 「全ての教職員の理解促進と資質・能力の向上」

2 取組のポイント

講義に加え、日本語学級による発表を実施することで、地区における指導の実際について理解を深め、日本語学級と在籍学級が連携し、児童・生徒への指導・支援の充実を図る。

3 主な取組内容

テーマ：外国人児童・生徒等に対する日本語指導の充実について

日 時：夏季休業中に実施（2時間）

対 象：日本語学級の教員及び日本語学級に通級する児童の学級担任等（令和6年度14名参加）

主な内容：

- ・講義「日本語指導の充実に向けて」（都教育委員会指導主事）
- ・発表「村山学園日本語学級の取組について」（日本語学級主任）
- ・協議「日本語指導が必要な児童・生徒のために、私にできることー校内での指導・支援と校外との連携ー」



4 成果

〈研修参加者の感想〉

- ・年齢的な発達と日本語の習得状況を踏まえて日本語指導をすること等、外国人児童・生徒等への指導の具体的な在り方を知ることができ、今後の指導や支援、新たに児童・生徒を受け入れたときの対応方法等のイメージを明確にすることができた。
- ・学校が一体となって、外国人児童・生徒等への対応に取り組んでいき、子供たちの困っていることに寄り添っていききたい。

〈研修担当指導主事〉

- ・日本語指導が必要な児童・生徒の存在についての認識や、しっかりと指導・支援していかなければならないという意識を、参加者全員で共有できたことは成果である。また、日本語学級が存在だけでなく、指導方針や具体的な指導内容を知る機会をもてたことは、今後、市内において、日本語指導が必要な児童・生徒の指導・支援を進めていく上で、意義のあることだった。次年度以降も、夏季研修等のテーマとして扱っていきたい。

取組のポイント

国際教室の児童が住んでいた国について、朝の学習時間に紹介してもらうことで、他の児童や教員の当該児童の背景等に対する理解を促進する。

取組

○朝のワールドタイム

- 5月・委員会の一つである「国際委員会」で、国際理解につながる活動を計画
 - 身近な存在である国際教室を利用している児童等に協力してもらい、世界の国の文化について紹介する企画を考案
 - 朝のワールドタイム（英語学習の時間）にて実施することを決定

6月・パイロット版として、海外在住経験のある教員をゲストにした番組を制作し放送

- 国際委員会の児童はチームを組み、国際教室の児童等と交渉し、2回目以降の番組を制作
 - 〈交渉の方法〉各クラスに出演希望のアンケートを実施、個別に勧誘など

7月 国際教室の児童（アメリカ在住経験）をゲストにした番組を制作・放送

9月・10月 3回目以降（ゲスト：国際教室の児童）の番組制作

11月 国際教室の児童をゲストにした番組を放送

【実際の様子】

- 国際委員会
番組（動画）作成の様子



- 委員会作成の番組（動画）
をクラスで視聴



成果

○これまで、国際教室の児童が全校児童の前で話をしたり、焦点が当たったりする機会はなかった。彼らが暮らしていた国での経験を伝えることで、他の児童の学びになり、自身のアイデンティティや背景等への自信や愛着を深めることにつながった。また、他の児童や教員にとっても、国際教室の児童のことを知る機会になった。

児童・生徒や教員の感想

〈教員〉

○他の児童は、身近な友達から外国の話を聞くことで、世界を身近に感じることができるとともに、国際教室の児童のことを更に知ることができた。

○学級担任や国際教室担当以外の教員は、国際教室の児童について更に知ることができた。

〈児童〉

○自分が育った国のことや自分のことを知ってもらえて嬉しかった。

今後に向けて

○国際教室の児童も一緒に企画を考えたり、インタビュアーとして取り組んだりするなどし、番組内容を皆で検討していく機会をもつ。

○外国だけでなく、帰国・外国人児童からの視点も踏まえて、日本の文化の紹介を行い、異文化理解に繋げていく。



取組のポイント

学校・家庭・地域が一体となって「グローバル人材育成」を推進するシンボルとして、「手形地球儀」を制作することで、取組の継続的な発展を目指す。

取組

○中野区保幼小中連携教育の軸として掲げたテーマ「グローバル人材育成」の理念の定着と継承を図るとともに、学校の創立5周年を記念し、学校・保護者・地域と協働して、グローバルの象徴として巨大な地球儀を制作する。

- 〈主な内容〉
- ・PTAや学校評議員会、近隣のNPO団体に相談し、協力者を募集
 - ・美術大学教授を監修者として決定
 - ・直径2m50cmの巨大地球儀を特殊な竹で組み立てて制作
 - ・保幼小中連携のシンボルとして、大陸部の白い布地に園児・児童・生徒の手形の作成
 - ・土台は地域の協力を得て制作
 - ・ネーミングやデコレーションを生徒に考えさせ、バージョンアップ予定

【実際の様子】

- ・PTA・地域への説明



- ・学校・PTA・地域が協力



- ・「手形地球儀」が完成



成果

- 地域の方や来校される方に、「グローバル」という印象をもってもらえた。
- 在校生は、学校の特色を常に意識できた。
- 幼稚園児や小学生にとっては、かつて押した自分の手形が確認でき、連携教育を意識して入学できた。

児童・生徒や教員の感想

〈生徒〉

- 玄関にインパクトがある大きな地球儀があり、誇りに思った。
- 自分たちで作ったものだから、大切に守っていきたい。学校のシンボルだと思った。

〈地域〉

- 生徒にとっては、卒業してからも思い出に残るものになると思った。

今後に向けて

- 開校5周年を機に制定した「グローバル人材育成」の理念を継承する。
- 本校中学生に加え、中学校区の幼稚園と小学校の園児・児童も大陸部分に手形を押し、保幼小中連携教育のシンボルとし、保護者・地域への定着も図る。
- 安全面・衛生面等の維持・管理に努める。
- 大陸名や国名、帰国生徒や外国籍生徒等の出身国が分かるように表示する。



取組のポイント

学校だよりの1コーナーを活用し、帰国生徒等の関係のある国や地域の情報を掲載することで、学校全体で、国際理解を促進し、国際感覚を養う。

取組

- 一年を通じ、毎月1回、学校だよりを発行
巻頭言下に、「We are Global 今月の国」というコーナーを設定している。
〈掲載までの流れ〉
- ① 帰国生徒保護者会で、保護者に説明する。
 - ② 国や地域が重ならないよう、各学年から代表生徒を推薦してもらう。
 - ③ 校長から趣旨を説明し、協力の同意を得る。
 - ④ 校長が昼休みにインタビューし、情報を収集する。
 - ⑤ 同意が得られれば、画像の提供を受ける。
 - ⑥ 記事をまとめ、生徒本人に最終確認をする。
 - ⑦ 教員全体で内容を確認し、発行する。

〈令和6年度に取り上げた国や地域〉

- 5月号 オーストラリア「多民族・多国籍の実情」
6月号 カナダ「French Immersion：フランス語での学習」
7月号 シンガポール「現地での学校生活の様子」
9月号 *中野・ウェリントン友好交流ホームステイの様子を紹介①
10月号 中野・ウェリントン友好交流ホームステイの様子を紹介②
11月号 中野・ウェリントン友好交流ホームステイの様子を紹介③

*中野・ウェリントン友好子ども交流ホームステイに6名参加

成果

- グローバルで恵まれた環境であることを生徒や保護者・地域に発信することで、学校評価「本校は国際交流が盛んで、グローバルな学校である」に対する、生徒の肯定的評価が99.2%と増加した。

児童・生徒や教員の感想

- 〈教員〉
- 生徒が世界のいろいろな国で、どのような生活をしていただのかを知ることができ、ためになった。
- 紹介された生徒は嬉しそうにしていた。学級での会話も増えたようだ。
- 〈生徒〉
- このコーナーを読んで、興味をもった国について、更に調べたいと思った。
- コーナーが小さく、情報量が少ない。もっといろいろなテーマについて知りたい。

今後に向けて

- これまで掲載したコーナーをまとめて、学校掲示板で紹介することで、更に多くの人たちにも発信し、理解を広げていくとともに、内容も改善する。
- 昼の放送でインタビューの様子を発信するなど、発展させていくことも可能である。
- 掲載項目は、生徒が興味のあるテーマに変えたり、生徒同士のコミュニケーションに資する内容にするなどの工夫を加える。

〈実際の様子〉

- ・学校だより



- ・We are Global 今月の国



地域の図書館と連携した取組 (板橋区立志村第二中学校)

ガイドライン
6-3

1 関連項目 「全ての児童・生徒や保護者と地域の理解促進」

2 取組のポイント

地域の図書館と連携し、生徒とつながりのある国や地域について情報発信することで、その国や地域の文化や歴史、日本語学級について地域住民等に理解してもらう。

3 主な取組内容

- 実施方法：①毎年実施している、地域の図書館での取組「母国の文化紹介作品展示会～みんなに知ってもらいたい！私とつながる国・地域」について紹介する。
- ②自分のつながりのある国や地域の文化や歴史等の中からテーマを決め、紹介する資料を作成する。
- ③つながりのある国や地域に関する本とともに、地域の図書館に作品を展示する。

板橋区立志村図書館での展示後、校内でも展示



展示の様子



生徒の作品

4 成果

- ・来館者からは、「知らない国のことについて知ることができてよかった」「名前だけ知っている国の文化について分かってよかった」等の感想が聞かれた。
- ・生徒からは、「自分の国の歴史などを調べ、よく理解できてよかった」「学校で掲示されたときに、友達が見てくれてうれしかった」等の感想が聞かれた。
- ・生徒の日本語の能力は異なっても、翻訳アプリや教員の支援を得ながら、つながりのある国や地域を調べて発信する活動は、生徒のアイデンティティを確立する上でも有効である。また、生徒が頑張って書いた作品を地域住民の方などが、その文化や歴史を知るきっかけとなっていることを生徒自身が知ることで、自己肯定感の醸成につながっている。



「タイプ別に見る日本語指導モデル」指導の実際

「日本語指導推進ガイドライン（理論編）」（P.57）に示した、「日本語指導が必要な児童・生徒 3つのタイプ」に基づき、指導の実際を示す指導事例を次ページより掲載します。個別の指導計画の作成や、単元計画や授業計画の作成の参考として御活用ください。

第5章 日本語指導プログラムとコース設計

5-2 タイプ別に見る日本語指導モデル

日本語指導が必要な児童・生徒 3つのタイプ

日本語指導が必要な児童・生徒の実態は一人一人異なります。日常会話や、教科学習の日本語の力等の実態を把握し、指導・支援することを前提に、滞日期间と日本語の力の発達の状況から、ここでは、日本語指導が必要な児童・生徒を大きく3つのタイプに分類して示します。

	タイプA	来日直後 ・日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ児童・生徒
	タイプB	滞在期間3年程度 ・日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。 ・教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。
	タイプC	日本生まれ・日本育ち ・日常会話に支障がなく、適切な指導・支援を受けてこなかったため、学習言語能力が十分に育っていない。 ・教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。

動画 

文化庁「Himawari」
外国人児童生徒等の
日本語教育の方法と
実態（2）
（34）教材教員の活用
1（教材の利用、著作権）

3つのタイプと発達段階を組み合わせた事例

これらのタイプと発達段階を踏まえた12タイプの指導事例を次ページ以降に掲載しました。児童・生徒の実態に応じて、指導・支援の手だてが異なります。担当する児童・生徒に近いタイプを指導の参考にしてください。

	タイプA 来日直後	小学生（前半） 事例①	小学生（後半） 事例②	中学生 事例③	高校生 事例④
	タイプB 滞在期間3年程度	小学生（前半） 事例⑤	小学生（後半） 事例⑥	中学生 事例⑦	高校生 事例⑧
	タイプC 日本生まれ・日本育ち	小学生（前半） 事例⑨	小学生（後半） 事例⑩	中学生 事例⑪	高校生 事例⑫

動画 

文化庁「Himawari」
外国人児童生徒等の
日本語教育の方法と
実態（2）
（35）教材教員の活用
2

動画 

文化庁「Himawari」
外国人児童生徒等の
日本語教育の方法と
実態（2）
（36）教材教員の活用
3

1 対象児童について

(1) 児童の実態

来日直後で、日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ。

(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 先生や友達とコミュニケーションを取ることができ、遊びや生活の中での日本語を理解できる。

★本単元は①に基づき、「生活のための日本語」の授業の一環として実施
- ② ある程度の支援を得て、授業に参加でき、教師の話の内容は大まかに理解できる。
- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、関係をつくることができる。

(3) 指導形態

週1回 合計2時間、自校又は通級（他校） グループ指導



2 本単元について

「じゃんけん」は、遊び以外にも、給食のおかわり、下校時に日直や先生となど、学級の中の様々な場面でよく使われる。じゃんけんができることにより、友達と関わる機会が増える。

おにごっこは、体を動かすゲーム性があり、この年齢の子供にとって魅力的な活動である。また、内容やルールを工夫することで、多様な楽しみ方や学び方ができ、その経験は学年が上がっても活用可能である。

3 日本語指導案

(1) 単元名

「なかよくあそぼう～じゃんけん～」

(2) 単元目標

- ルールを知り、日本語でじゃんけんやおにごっこをして、友達と仲良く遊ぶことができる。

語 彙	表 現
ぐう（いし）、ちょき（はさみ）、ばあ（かみ）、かち、まけ、あいこ、じゃんけんぽん、おに、たのしい、おもしろい、つまらない、むずかしい	〇〇さんが勝ち（負け）です。 〇〇さんが「おに」です。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 始めの挨拶 ・日付、曜日、天気を確認する。	・児童の実態に合わせ、在籍学級と同様の挨拶をする。慣れるまでは、「よろしくおねがいします。」だけでもよい。 ・日付や曜日から練習し、定着したら天気も答えられるようにする。
2		2 じゃんけんのやり方を知る。 ・教師が声に出しながら、「ぐう（いし）」「ちょき（はさみ）」「ばあ（かみ）」をやってみせる。 ・声に出して、語彙を練習する。（T：「ぐう」S：「ぐう」を繰り返す。） ※「ちょき」「ばあ」も同様 ・「かち」「まけ」「あいこ」のパターンを一つずつ確認する。 T：じゃんけんぽん。（出す） 〇〇さんが勝ち（負け）です。	・『たのしいがっこう』『⑤なかよくあそぼう』のじゃんけんを活用する。 ・実際に動作をしながら、声に出して練習する。 ・自国のじゃんけんについても、「同じ」「違う」を使って確認する。 ・実際に先生や友達とじゃんけんをし、ポイントゲームをするなど、楽しく学習に取り組ませる。

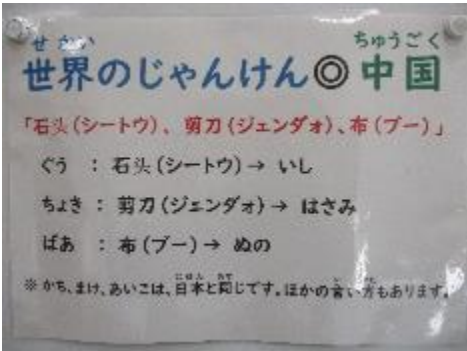
	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
3		3 おにごっここのルールを知る。 ① じゃんけんで負けたら、「おに」になる。 ② おには、他の人をタッチする。 ③ 「おに」にタッチされたら、「おに」になる。 S：〇〇さんが「おに」です。	・おにが誰かわかるよう、慣れるまで「おに」カードを使う。  ・おにになったら、カードを持たせる。声に出して「おに」になった人の名前を確認する。
4		4 教室内で遊び方を知る。 ① かわりおに 「おに」は交代する。 ② ふやしおに 「おに」が増えていく。	・できるだけ少ない言葉で理解できるよう、教師が行動で示す。 ・ルールを理解しやすいよう、走らずにゆっくり歩いて行う。 ・時間があれば、「こおりおに」など他のおにごっこを紹介したり、慣れてきたら、体育館や校庭で実施したりする。
5	(在籍学級で紹介) 	5 感想を伝え合う。 ・本時の学習について、感想を述べる。 T：どうでしたか。 S：たのしい。 S：おにごっこ、おもしろい。 (つまらない/むずかしい) 6 終わりの挨拶	・口頭で振り返りをする。 ・言葉で説明ができない場合は、表情の絵カード(『たのしいがっこう』『②からだのちょうし』等を活用)で示してもよい。 ・後日、在籍学級で自国のじゃんけんを紹介するなどの取組を行う。

(4) 評価(評価方法)

- ① ぐう、ちょき、ぱあなどの表現を使って、じゃんけんをしている。(観察)
- ② おにごっここのルールを理解し、友達と楽しく遊んでいる。(観察)

(5) 在籍学級(在籍校)との連携

- ・ 体育の学習や休み時間に、学級の友達とおにごっこをする。
- ・ 自国のじゃんけんを在籍学級の友達に紹介する。その際、日本語学級の担当や在籍学級の担任がサポートする。



【本モデルの活用例】

- ・ 帰りの会でのじゃんけん
- ・ 給食おかわりじゃんけん
- ・ 休み時間に友達と遊ぶ
- ・ 体育の「おにあそび」
- ・ 総合的な学習の時間での各国の文化紹介 など

1 対象児童について

(1) 児童の実態

来日直後で、日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 先生や友達とコミュニケーションを取ることができ、遊びや生活の中での日本語を理解できる。
★本単元は①に基づき、「生活のための日本語」の授業の一環として実施
- ② ある程度の支援を得て、授業に参加でき、教師の話の内容は大まかに理解できる。
- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、関係をつくることができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 グループ指導

2 本単元について

い。 高学年の児童の生活では、学級担任から時刻や時間を指定されて活動することが多

日付や曜日、時間と教科名を、クイズを通して繰り返し聞いたり話したりすることで、時間に関する指示や質問を理解し、学校で円滑に生活することができる。

また、高学年の児童は、時刻と時間については年齢相応の知識・概念があり、母語であれば聞いて理解したり話したりできると考えられる。難しいようでも、時計の模型や時間割表等を使って学習を進めることで、自分の一日の流れを把握し、見通しをもつことができるようになる。授業の準備ができ、計画的に行動できるようになれば、学校で安心して過ごせるようになる。

3 日本語指導案

(1) 単元名

「じかんわりクイズをしよう～時間割表と時刻と時間～」

(2) 単元目標

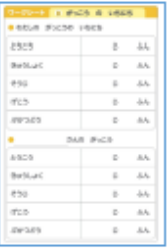
- ・ 日付と曜日、時間を日本語で言ったり、聞いて理解したりすることができる。
- ・ 時間割を見て一日の流れ（何時間目に何の教科か）を日本語で説明することができる。

語 彙	表 現
○時○分、日付と曜日、教科名、○時間目、始まり、終わり、時間の言い表し方（○分間）、時刻と時間という言い方の意味の違い、登校、給食、掃除、下校	・ 何時ですか。／○時です。 ・ 何分ですか。／○分です。 ・ 何曜日ですか。／○曜日です。 ・ 何の教科ですか。／（教科名）です。 ・ ○曜日の○時間目は何ですか。 ・ 始まり（終わり）の時刻を教えてください。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1	 	1 始めの挨拶 2 日付と曜日、時間や時間割の言い方を理解する。 T：何時ですか。 S：○時です。 T：何分ですか。 S：○分です。 T：今日は何曜日ですか。 S：○曜日です。	・ 本学習に当たっては、以下の資料が活用可能である。 ◆『日本語指導ハンドブック』（デジタルブック）「⑦時間を言う・お願いする」「⑧日付と曜日を言う」「⑩時間と行動を説明する」「⑪日課を説明する」 ◆『たのしいがっこう』ワークシート「⑩がっこうのいちねん」 ・ 時計の模型を使って「何時でしょうクイズ」を出し合い、時刻の言い方に慣れさせる。 ・ 「曜日の歌・日付の歌」等を歌いながら、楽しく聞き慣れ、言い慣れるようにする。（歌は次頁参照） ・ 午前と午後時刻の言い方も扱う。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2	    「時刻と時間」 (ちびむすドリルより)	3 教科名と時間割の表し方を理解する。 - 教科書クイズに取り組む。 T：(教科書や道具を見せながら)これは何の教科ですか。 S：国語です。 - 自分の時間割表を書く。 ・「○曜日の△時間目は何でしょうクイズ」や「○時間目の時刻クイズ」に取り組む。 T：月曜日の3時間目は何ですか。 S：図工です。 T：3時間目の始まりは、何時ですか。 S：10時40分です。 ・まとめの時間割クイズに取り組む。 T：月曜日の3時間目は何ですか。始まりと終わりの時刻を教えてください。 S：体育です。始まりは、10時40分で、終わりは11時25分です。	- 本学習に当たっては、以下の資料が活用可能である。 ◆『日本語指導ハンドブック』(デジタルブック)「⑨時間割を説明する」 ◆『たのしいがっこう』ワークシート「⑨じかんわり」 - 実際に使っている教科書やノート、教室等の画像を見せながら、教科の名前がすぐに言えるようにする。 - 在籍学級の時間割や時程表を入手しておく。時間割表には始まりと終わりの時刻も書き込ませ、教科のイメージをはっきりとさせながら、表を完成させる。 - 時計の模型を使いながら、一日の生活の流れを確認しながら、考えて答えられるようにする。 - 作成した時間割表を見ながら、聞かれた順序で文型を整えて答えられるようにする。
3		4 時間の意味を理解する。 T：算数の学習時間は、何分間ですか。 S：45分間です。 T：給食は、何分間ですか。 S：30分間です。	- 時計の模型を使って、時刻と時間の意味の違いを視覚的に分かるようにする。 - 実際の時間割の時程を使い、日常生活の体験から、時間を理解できるようにする。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
4	   「生活表」 (ちびむすカレンダーより)	5 自分の一日の生活について説明をする。 - 自分の一日の生活について、ワークシートにまとめる。 - ワークシートを基に、説明する練習をする。 6 これからの学校行事の日付と時間について説明をする練習をする。 7 終わりの挨拶	- 本学習に当たっては、以下の資料が活用可能である。 ◆『たのしいがっこう』ワークシート「⑧がっこうのいちにち」 - 自分の一日の生活について説明する活動を通じて、言い慣れるようにする。 - 今後の学校行事(運動会や学習発表会などを画像で説明すると共に、開始時刻・自分の発表時刻を保護者に説明できるように練習する。 - 本学習に当たっては、以下の資料が活用可能である。 ◆『たのしいがっこう』ワークシート「⑧がっこうのいちねん」 ◆ちびむすドリル「生活表」「じくとじかん」

(4) 評価(評価方法)

- 時刻と時間、また、その違いを理解し、一日の生活について説明している。(観察)
- 教科とその名前を理解し、時間割表の読み方を理解している。(観察)

(5) 在籍学級(在籍校)との連携

- 学校行事や在籍学級での学習の予定などの中から扱うとよいものを学級担任と話し合い、年間を通して、様々な日本語表現で日程や予定について理解して、話せるようにする。

【本モデルの活用例】

- ・「日・月・火・水・木・金・土」だけで練習する。「にち げつ かー すい もく きん もく きん どうようび つぎは にちようび」を「Sunday Monday Tuesday ... Sunday comes again.」という英語の歌のメロディーに合わせて練習するとよい。

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

来日直後で、日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ。

(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 挨拶や身の回りの物の名前、教師からの指示等を理解することができる。

★本単元は①に基づき、「生活のための日本語」の授業の一環として実施

- ② 支援を得て、授業に参加でき、教師の話の内容は大まかに理解できる。

- ③ 母語や母国での経験や自分の考え方について友人と話し合うことを通して自己を認識し、将来の進路を具体的に描いて、学習に主体的に取り組むことができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、通級（他校） グループ指導



2 本単元について

毎月実施される避難訓練の目的と内容を理解することで、来日早々でも生徒が目的をもって、真剣に戸惑わずに避難訓練に参加できるようになる。また、実際に災害が起きても、学んだ知識を生かし、行動できるようになる。

中学生の場合には、生徒本人が日本で起こり得る災害の種類やとるべき行動や準備等について理解するだけでなく、保護者や同じ国の人たちに必要な情報を発信する役割を担うことも期待できる。

3 日本語指導案

(1) 単元名

「避難訓練」

(2) 単元目標

- 災害に関する言葉や表現を聞いて、理解することができる。
- 避難訓練の際や緊急時に自分がとるべき行動を理解し、動くことができる。

語彙	表現
災害、地震、水害、火災、もぐります、避難します、避難訓練、ハザードマップ、危ない、集団下校、地区班、解散、引き取り	・まず、〇〇ます。それから、〇〇します。 ・〇〇に避難します。 ・〇〇で解散します。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1	 「こわがりヒーロー」 NHK for School より	1 日本で起こり得る災害について知る。 T:日本にはどのような災害がありますか。 S:地震…。 T:そうですね。他にありますか。 2 災害に応じた避難の仕方を実際に行動しながら確認する。 T:地震のときは、まず、机の下にもぐります。それから、校庭に行きます。 (「避難する」イラストを示しながら)校庭に避難します。 (「おかしも」のイラストを示しながら)おさない。かけない。しゃべらない。もどらない。 ※水害や火災についても同様に確認する。 3 避難訓練について理解する。 ・避難訓練時の放送を聞いたり、訓練の様子の写真を見たりしてイメージをつくる。	・「東京防災」やNHK for School（「こわがりヒーロー」等）の視聴覚資料を活用する。 ・地震以外に、火災や水害なども確認する。 ・「生活指導だより」（ルビ振り）を準備し、災害時の行動（「おかしも」等）を確認する。 ・自治体で作成されている、多言語版の資料（「東京都防災ガイドブック」「東京くらし防災」等）を活用することもできる。  ・実際の放送等も聞かせながら、机の下にもぐったりするなど、実際に行動させて確認する。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		4 学校で災害が起こった時の避難方法を知る。 ・ハザードマップを使って、学校から自宅までの経路を確認する。 T：これはハザードマップです。どこが危ないですか。(白い部分と色が付いている部分を指し示しながら)色が違います。ここが、危ないです。	・学校で災害が起きた時の対応方法を保護者に説明できるよう理解させる。生徒が適宜母語での説明を加えるよう促す。
		5 引き取り訓練で使う言葉(集団下校・地区班など)を確認する。 ・地区班の解散場所を確認する。 T：〇〇さんは何班ですか。 S：〇班です。 T：どこまで一緒にいきますか。どこで解散しますか。 S：〇〇公園です。 〇〇公園で解散します。	・生徒に配布する引き取り訓練や地区班のプリントを活用する。  ・地区班の解散場所は、写真を用いたプリントを利用する。 
		6 「緊急引き渡しカード」「保護者引き取り」、「集団下校」などの言葉を確認する。 ・見本を参考に緊急引き渡しカードの下書きを書く。	・予め、担任に生徒の住所や地区班を確認しておく。

(4) 評価（評価方法）

- ・ 災害に関する言葉や表現を聞いて、理解している。（観察）
- ・ 避難訓練の際や緊急時に自分がとるべき行動を理解することができる。（観察）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 日本語の授業で取り組んだ内容や扱った語彙や表現を、在籍校や在籍学級と共有し、避難訓練の前に改めて確認してもらうよう伝える。
- ・ 生徒の日本語の能力や具体的な支援方法について、避難時の地区班の担当教員等と共有しておく。

【本モデルの活用例】

タイプAの生徒には日本語の表現としては難しい表現もあるが、実際の災害時に使われる言葉を意識したい。そのため、簡単な日本語だけでなく、災害に関する語彙を指導する。（例：「高台避難」母語での意味と、簡単な日本語を教える。）

しかしながら、近年は、「やさしい日本語」による情報提供も進んでいる。そのことに触れながら、緊急地震速報の音声を聞かせたり、テレビの画面等を示したりし、命を守ることを第一に行動することが大切であることを確認する。

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

来日直後で、日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学校生活において必要となる、基本的な日本語を理解し、先生や友達と日本語でコミュニケーションをとることができる。
- ★本単元は①に基づき、「生活のための日本語」の授業の一環として実施
- ② 母語で身に付けてきた教科に関する知識や技能を生かしながら、日本語を易しく言い換えたりソースなどを利用して、高校の学習に取り組むことができる。
- ③ 将来の進路を具体的に考え、その実現に向けて高校生活の目標を設定し、周囲の仲間に自分の考えを伝えることや社会的活動に主体的に参加することができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 グループ指導

2 本単元について

学校生活の様々な場面で必要な「許可をもらう」表現について学ぶことで、必要に応じて、先生や友達から許可をもらうことができるようになる。また、相手に許可を求められた場合にも、適切に答えることができるようになる。

出身国や出身地域によっては、学校から許可をもらわなければならないことが異なる場合が想定される。スマートフォンの使用や写真の撮影等、実際に許可が必要となる場面を中心に扱い、理解を促す。

3 日本語指導案

(1) 単元名

「許可をもらう」

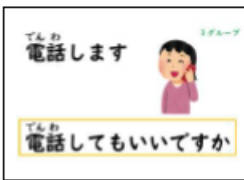
(2) 単元目標

- 「～てもいいですか」という表現を使って、日本語で先生や友達に許可を得ることができる。

語 彙	表 現
動詞（使う、書く、話す、読む、見る、食べる、つける、開ける、電話をする、質問をする、来るなど）	・～てもいいですか。 ・～てもいい？

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 平仮名・片仮名を復習する。	・使用教材例『日本語指導ハンドブック』（デジタルブック）「ぐるぐる平仮名・片仮名」等 ・よく間違える文字があれば、身近な単語等を活用し、練習させる。
2		2 本時のめあてを確認する。 「許可をもらう」 3 動画を視聴し、表現を確認する。 T：（基本スキットの最初の場面を示しながら）これは、どこですか。 S：店です。 T：そうです。これから動画を見ます。 エリンは何がしたいですか。 店の人に何と言いましたか。 よく聞いてください。 ※視聴後、「着てもいいですか。」を確認	・使用教材例『エリンが挑戦！にほんごできます』第10課 ・「まんが基本スキット」を活用し、生徒に質問等をしながら、内容を確認する。 ・英語訳や中国語訳を活用し、母語等でも確認や理解ができるようにする。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
3		4 「許可をもらう」表現について、場面とともに理解する。 T: お兄さんから電話です。どうしますか。 S: 出ません。 T: そうですね。今、授業です。出ません。 (部活動の場面のイラストを提示) T: 今、部活動の時間です。お兄さんから電話です。どうしますか。 S: 出ます。 T: 先生や先輩に言います。 「お兄さんから電話です。電話してもいいですか。」	- イラスト等を活用し、状況を提示する。 - 動画「大切な表現」や「大切な表現 解説&例文」を活用し、文型を確認する。 - 必要に応じて、動詞「て形」を復習する。  (「エリンが挑戦!」に添っていただきます。)
4		5 様々な場面のイラストを基に、ペアで会話練習をする。 S: 先生、少し寒いです。 エアコンをつけてもいいですか。 T: はい。どうぞ。 (その他の場面例) - 提出物を忘れた →明日出してもいいですか。 - 黒板がよく見えない →席を移動してもいいですか。 - 自転車で来ていいですか。 ※「自転車通学届」の記入	- 必要に応じて、出身国や出身地域の学校、中学校との違いを確認する。 - 学校の規則等を確認し、○×問題のように全員に考えさせることで、ルールに対する正確な理解を促す。 - 友達同士では、「～でもいい？」を使うことを伝える。時間があれば、会話練習をする。

(4) 評価(評価方法)

- 許可をもらう表現を使って、学校生活の様々な場面で自分の考えを伝えようとしている。(観察)

(5) 在籍学級(在籍校)との連携

- 生徒の行動の中で、許可をもらう必要性を十分に理解できていない点があれば、例文の中で積極的に取り上げるようにする。
- 授業で扱った表現について共有し、生徒が日本語を使って許可をもらおうとする場面を支援してくれるよう伝える。

【本モデルの活用例】

- 「自転車通学許可証」のように、日本の高校特有の書類等がある。そのような書類の記入や提出と、本単元の学習をつなげることで、スムーズな学校生活につながる。しかしながら、生徒に配慮した、やさしい日本語で書かれた書類等を整備していくことも重要である。
- 日頃から、生徒が高校生活を送る上で困っていることや困りそうなことを意識し、必要な書類等を積極的に活用していくとよい。

1 対象児童について

（1）児童の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



（2）日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学級活動等で、教員や友達と積極的にコミュニケーションをとり、自信をもって周囲と関わることができる。
- ② 調べて理解したことや、気付いたこと、考えて伝えたいと思ったことを、順序よく、筋道を立てて、相手に分かりやすく伝えながら学習に参加することができる。

★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施

- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、協力し合っ

（3）指導形態

週2回 合計4時間、自校 グループ指導

2 本単元について

日常会話ができて、観察したことを文章で表すような活動では、何を書けばよいかわからない、表現するための語彙を知らないなどから、詳しく書けない児童が少なくない。観点を決めて短冊メモを書く経験をさせることで、在籍学級での生活科の観察等の学習でも、書く事柄を見付けて日本語で観察記録を書けるようになる。

書き言葉がまだ身に付いていない低学年児童にとって、書きたいことを短いメモにし、それをつなげて文章にしていこうというステップで学習することで、書くことへの負担感が軽減される。様々な学習場面で、書くことに取り組もうという意欲や、書くスキルの向上につながる。

3 日本語指導案

（1）単元名

JSL理科「かんさつ名人になろう」

（2）単元目標

【教科（理科）】

- 葉、茎、花、実などの観点を決めて変化を観察し、分かったことを観察文に書くことができる。

【日本語】

- 観察の観点を知り、植物の生長の様子や変化を表す言葉を理解して、短冊メモに書くことができる。
- 観察文の書き方を知り、短冊メモから書くことを選び、順序を考えて観察文を書くことができる。

語 彙	表 現
・野菜の部分を表す言葉（茎・葉・花・実） ・背の高さ・茎の長さ・太さ・実の大きさ・形 ・触った感触を表すオノマトペ（ざらざら、つるつる、ちくちくなど）	・～と比べて、どう変わりましたか。 ・変化を表す表現（茎が太くなりました／背が高くなりました／葉が増えました／実の色が赤くなりましたなど） ・～みたいな形・～くらいの大きさなど

（3）展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1	 	1 育てているミニトマトについて、観察する部分の名前や変化を表す言葉を覚える。 T：（画像等を指しながら）ここは茎・葉・花・実と言います。では、クイズです。（名前を隠して）ここは何と言いますか。 S：（何度かやり取りして）茎・葉・花・実です。 T：言えるようになりましたね。では、茎はどう変わりましたか。 S：大きいです。 T：「日本語では、茎が太くなりました。背が高くなりました。」と言います。 ※葉の数、葉の色、実の数、実の色の変化についても、表現を確認 ・葉が増えました。 ・葉の色が濃くなりました。 ・実の数が増えました。 ・実の色が赤くなりました。 T：では、クイズです。①と比べて②はどう変わりましたか。 S：②は葉の数が増えました。	・部分の名前（茎・葉・花・実）や成長を表す言葉を知り、成長比較の画像を見ながら短いクイズに答えることで、聞き慣れて覚えられるようにする。 ・フラッシュカードのように何度も答えを見せれば通ずるなどして、考えこませないようにする。 ・「太い・高い」などは言葉の概念が分かりやすいように、身の回りのものを比べて理解できるようにする。 （例） ◆ホワイトボードマーカーと鉛筆を使って「太い・細い」 ◆磁石の数を使って「増える・減る」 ◆絵の具を水に混ぜて「赤くなる・濃くなる」

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		2 「実・花・茎・葉」のそれぞれの大きな変化で気付いたことについて話し合う。 T：前と比べて、どこが変わりましたか。見付けましょう。 S：花が9つ咲いています。 T：いくつ増えましたか。 S：5つ増えました。 S：実が赤くなりました。 S：緑のトマトがいっぱいあります。 T：緑のトマトはどんなトマトですか。 S：小さいかわいいトマトです。 T：本当に小さくてかわいいですね。小指ぐらいの大きさです。	・目の前に、育てているミニトマトを置き、目立った変化について、感想を交えながら発表させる。 ・児童の気付きのよさを認め、トマトの生長を喜び合う。 ・「～みたいな色・～ぐらいの大きさ」などの表現を取り上げ、使える表現になるよう指導する。
3	 	3 「実・花・茎・葉」のそれぞれについてさらに詳しい観測の観察メモを書く。 T：茎や葉については緑色の短冊です。分かったことを書きましょう。触った感じやにおいはどうですか。 S：葉はざらざらしています。トマトのにおいがします。 S：茎に白い毛があります。 T：花は黄色の短冊です。実はピンクの短冊です。それぞれについて書きましょう。	・どの短冊に、どのように書けばよいかを児童と話し合いながら板書し、メモを書く練習をさせる。 ・書きたい短冊から選んで書くように助言し、対話しながら短い言葉でメモを書くように指導する。 ・触った感触について表現しやすいよう、オノマトペの言葉カード（つるつる、ちくちくなど）等を提示しておく。
4		4 短冊メモの中から書く内容を選び、順番を決めて、観察文にまとめる。	・例文を提示し、観察文の組み立てのイメージがもてるようにする。 ・メモの言葉を、どのように文にすればよいかについては、話し合いながら確認し、書き言葉で書く練習をする。
5		5 自分の書いた観察文を在籍学級で発表する。 6 学級の友達からの感想を聞く。	・発表に向けて、相手意識をもたせ、「ゆっくり・はっきり・大きな声で」などのめあてを明確にして練習させる。練習を通じ、更に、自分の言葉として習得できるようにする。 ・学級の児童に「一言感想」のカードを配布して書いてもらおうと、更に自信を深めることができる。

（4）評価（評価方法）

- ・ ミニトマトの生長の変化を観点に基づいて観察し、分かったことを観察文に書いている。（ワークシート）
- ・ 植物の生長の様子を表す言葉を理解して短冊メモに書いている。（ワークシート）
- ・ 短冊メモから観察文にしたいメモを選び、順序を考えて文章にしている。（ワークシート）

（5）在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 在籍級に先行した学習として実施する。より具体的な観点で観察したメモを使って観察文を完成させて発表することで、在籍学級の児童からも認められ、書くことへの自信を付けることができる。また、在籍学級の児童の手本となることもできる。



観察メモの例
（生き物）



【本モデルの活用例】

- ・ 理科の学習での植物観察記録に生かすことができる。
- ・ 本事例は、理科だけでなく、生活科の学習と関連付けて実施することも可能である。
- ・ 観察の観点が分かることで、日々の生活科の時間でのミニトマトの観察時に、書きたいことをたくさん見付けることができる。

1 対象児童について

（1）児童の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



（2）日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学級活動等で、教員や友達と積極的にコミュニケーションをとり、自信をもって周囲と関わることができる。
- ② 調べて理解したことや、気付いたこと、考えて伝えたいと思ったことを、順序よく、筋道を立てて、相手に分かりやすく伝えながら学習に参加することができる。
★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、協力し合っ
て問題を解決したり、課題に取り組んだりすることができる。

（3）指導形態

週1回 合計2時間、通級（他校） 複数指導

2 本単元について

「三角形」「四角形」の基本となる内容を先行学習することで、在籍学級での学習に安心して取り組むことができる。また、他の学年の図形の学習にも生かすことができる。日本語での説明だけでは理解が困難な児童も、作業や活動を通して、図形の基本となる三角形や四角形の図形としての特長を理解することができる。また、ワークシートで「かこむ／つなぐ」作業をしながら学習する際に、色シールを使い、指示する色や数を変えながら図を描く（線を引く）ような工夫もでき、児童が楽しく活動することができる。

3 日本語指導案

（1）単元名

JSL算数科 第2学年「三角形と四角形」

（2）単元目標

【教科（算数科）】

- 三角形、四角形の意味や、辺、頂点の意味を理解し、身の回りにある物の中から三角形、四角形を見付けることができる。

【日本語】

- 三角形と四角形に関わる教科の用語を理解し、三角形や四角形を説明することができる。
- 「かこむ」「むすぶ」という言葉を理解し、線や直線を引いて図を描くことができる。

語 彙	表 現
かこみます（かこむ）、むすびます（むすぶ）、直線、三角形（さんかく）、四角形（しかく）、へん、ちょう点	・へんが○本あるので（三角形／四角形）です。 ・ちょう点が○つあるので、（三角形／四角形）です。

（3）展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 1年生までの図形を復習する。 T：これを二つの形に分けてください。 S：（三角と四角に分ける。） T：この形は何ですか。 S：さんかくです。／しかくです。	・日常語彙としての「さんかく」「しかく」を使えるかどうかを確認する。答えられない時は、教師が示す。
2		2 「かこみます／かこむ」を確認する。 T：囲みます。囲みます。赤を囲みます。 S：赤を囲みます。（赤を線で囲む。） T：緑と青を一緒に囲みます。（緑と青を線で囲む。） 3 「むすびます／むすぶ」を確認する。 T：緑のシールをまっすぐな線で結びます。定規を使います。直線で赤を囲みます。 S：直線で結びます。（定規で緑の点を結び、赤シール（大）を囲む。）	・赤・緑・青の三色のシールを貼ったワークシートを2種類用意し、色シールを線で囲む練習をさせる。 ・ゆっくり繰り返して言う。 ・教師が赤シールを囲む操作を見せる。色や数を変え、繰り返し練習する。 ・教師が緑と緑を結ぶ操作を見せる。 ・定規で線を引くことを伝える。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
3		4 2つの形を比べる。 T: この形は何ですか。 S: さんかくです。しかくです。 T: さんかくは、「三角形」と言います。 しかくは、「四角形」と言います。 S: 三角形。四角形。(繰り返す) T: (線を指して) これを辺と言いま す。(角の先を指して) これを頂点 と言います。 S: 辺 (へん)。頂点 (ちようてん)。 T: 2つの形は同じですか。違いま か。 S: 違います。 T: 辺は何本ありますか。 S: 3本。 / 4本。 T: そうですね。頂点はいくつありま すか。 S: 3つ。 / 4つ。 T: そうですね。	・「三角形」「四角形」「辺」「頂点」な どの用語を確認する。 ・用語を説明するときは、図を示して 伝える。 ・言うときは、「さんかくけい」「しか くけい」でもよいことを伝える。 ・繰り返し言わせる。 ・助数詞の読み方を確認する。 ◆本: ほん、ぼん、ぼん さん ほん 、よん ほん
4		5 三角形と四角形を確認する。 ・辺や頂点の数をもう一度確認する。 「三角形」: へん3本 ちよう点3つ 「四角形」: へん4本 ちよう点4つ ・ワークシートに「三角形」「四角形」 「へん」「ちよう点」を書く。	・辺や頂点の数を確認しながら、まと める。 ・小テストのように、用語の定着を確認 してもよい。
5		6 身の回りのものから、三角形と四 角形を探す。 S: へんが○本あるので、三角形/四 角形です。 S: ちよう点が、○つあるので、三角 形/四角形です。	・四角形 (ノート、テレビ等)、三角 形 (三角定規、トライアングル等) を 準備しておく。 ・ミニボードに、答え方を示す。 

(4) 評価（評価方法）

- ・ 三角形、四角形の意味や、辺、頂点の意味を理解し、身の回りのものの中から三角形、四角形を見付けている。（観察）
- ・ 三角形と四角形に関わる教科の用語を理解し、三角形や四角形を説明している。（観察）
- ・ 「かこむ」「かこまれる」という言葉を理解し、線や直線を引いて図を描いている。（ワークシート）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 在籍学級の担任と進度や内容を確認する。
- ・ 基本的な内容を中心に先行学習しているため、在籍学級での学習の際に、教科の用語などを、再度確認できる。また、教師の説明や教科書の内容の一部が理解でき、児童が意欲的に学習に取り組むことができる。



【本モデルの活用例】

- ・ 算数3年「三角形」、4年「四角形」など、図形領域の事前学習

1 対象児童について

（１）児童の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



（２）日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学級活動等で、教員や友達と積極的にコミュニケーションをとり、自信をもって周囲と関わるができる。
- ② 調べて理解したことや、気付いたこと、考えて伝えたいと思ったことを、順序よく、筋道を立てて、相手に分かりやすく伝えながら学習に参加することができる。

★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、協力し合っ
て問題を解決したり、課題に取り組んだりすることができる。

（３）指導形態

週 1 回 合計 2 時間、通級（他校） グループ指導

2 本単元について

在籍学級での学習に先行して実施できれば、事前に基本的な教科の用語「豆電球」「乾電池」や電球・電池のつなぎ方などを知ることで、在籍学級での学習に安心して取り組むことができる。

実物に触れ、現象を確かめることを通して、豆電球の明かりがつく場合とつかない場合があることや、それがつなぎ方によることを体験的に理解することができる。

3 日本語指導案

（１）単元名

JSL理科 第3学年「電気の通り道」

（２）単元目標

【教科（理科）】

- 明かりがつくつなぎ方と、つかないつなぎ方を理解し、明かりがつくつなぎ方を説明することができる。

【日本語】

- 電気の通り道に関わる教科の用語の意味を理解し、実験活動で使うことができる。
- 「つく・つかない」「つなぐ」という言葉を使い、実験の結果を説明することができる。

語 彙	表 現
つきます（つく）、つきません（つかない）、豆電球、乾電池、プラスきょく、マイナスきょく、ソケット、導線、導線つきソケット、つなぎます（つなぐ）	・明かりがつきます。／つきました。 ・明かりがつきません。／つきませんでした。 ・〇〇につなぐと、明かりがつきます。

（３）展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 豆電球を見せる。（自由観察） T：これは、何ですか。 S：わかりません。 S：電気？ T：そうです。電気。豆電球といいます。 2 「つきます／つきません」「つく／つかない」を確認する。 T：（教室内の電気や懐中電灯をつけたり、消したりしながら）明かりがつきます。 ・明かりがつきます（つく）。 ・明かりがつきません（つかない）。	・児童が見たり触ったりできるよう、実物を渡す。 ・児童がイメージしやすいように、イルミネーションの画像等を使ってもよい。 ・他にも「つく」があることを確認してもよい。（着く・付くなど）

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		3 本時の目標を確認する。 「豆電球に明かりをつけよう。」 T: どうしたら豆電球にあかりがつきますか。何か使いますか。 S: 電池？ T: 他には？ S: …。 4 実験で使うものを確認する。 ・実物を見せながら名前を確認する。 T: これは何ですか。 S: 電池です。 T: 電池。 S: 電池。 ・繰り返し、何度か練習する。 (他の語彙) 豆電球、乾電池、プラスきょく、マイナスきょく、ソケット、導線、導線つきソケット、つなぎます	・懐中電灯に使われている電池を見せる。 ・実験セットを用意し、乾電池や豆電球は事前に切れていないか確かめておく。 ・知っているものは、できるだけ答えさせるようにする。 ・音（声）と文字で確認する。 ・児童の様子を見ながら、いくつかの方法で確認する。 T: 豆電球 S: (豆電球をタッチ) T: これは何ですか。 S: 豆電球です。
3		5 つなぎ方を自由に試す。 T: ソケットに豆電球を入れます。電池を使います。自由に調べます。ワークシートに書きます。 6 実験の結果を記入する。 ・赤導線（赤鉛筆で）、黒導線（鉛筆で）はどこにつなぐのか、線を記入する。 ・実験の結果として分かったことを記入する。	・ワークシートを用意する。  ・明かりがつかない場合も記入させる。
4		7 結果を言葉で説明する。 T: どうでしたか。結果を教えてください。 S: 乾電池のプラスきょくに赤い導線、マイナスきょくに黒い導線をつなぎます。明かりがつけました。 S: 乾電池のプラスきょくに黒い導線、マイナスきょくに赤い導線をつなぎます。明かりがつけました。 S: 乾電池のまわりに導線をつなぎます。明かりがつけませんでした。	・児童の実態に合わせ、文型を用意しておく。 ◆「<u> </u>に<u> </u>をつなぎます。あかりがつけました。」 ◆「<u> </u>に<u> </u>をつなぎます。あかりがつけませんでした。」 ・「乾電池につなぐ」だけの場合は、乾電池のどこにつなぐのか答えるように指導する。
5		8 まとめ ・学習した用語を使い、自分でまとめる。 ・まとめたことを発表する。 「<u>かん電池のプラスきょくとマイナスきょくに導線をつなぐと、明かりがつけます。</u>」	・導線の色は関係ないことに気付かせる。 ・一人でまとめるのが難しい場合は、教師が一緒に言葉を入れながらまとめる。

（4）評価（評価方法）

- ・ 明かりがつくつなぎ方と、つかないつなぎ方を理解し、明かりがつくつなぎ方を説明している。（観察・ワークシート）
- ・ 電気の通り道に関わる教科の用語の意味を理解し、実験活動で使っている。（観察・ワークシート）
- ・ 「つく・つかない」「つなぐ」という言葉を使い、実験の結果を説明している。（観察・ワークシート）

（5）在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 在籍学級の担任と進度や内容を確認する。ワークシートなど、在籍学級で使うものがある場合は、通級時に持ってきてもらい、できるだけ同じもので学習する。
- ・ 基本的な内容を中心に先行学習しているため、在籍学級での学習の際に、教科の用語などを、再度確認できる。また、教師の説明や教科書の内容の一部が理解でき、児童が意欲的に学習に取り組むことができる。



【本モデルの活用例】

- ・ 4年～6年理科「電流」や「電気」の事前学習

1 対象児童について

(1) 児童の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学級活動や委員会活動等で、教員や友達と積極的な関わりを通して自信をもつことができる。
- ② 調べて理解したことや気付いたこと、考えて伝えたいと思ったことを、順序よく、筋道を立てて、相手に分かりやすく伝えながら学習に参加することができる。

★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施

- ③ 自分の気持ちや感想、経験などを友達や先生などの周りの人に伝えながら、協力し合って問題を解決したり、課題に取り組んだりすることができる。

(3) 指導形態

週1回 合計2時間、通級（他校） グループ指導

2 本単元について

第5学年で学習する産業（農業、工業、水産業等）について、大まかに確認することができる。自分に関係のある国の産業について、日本語学級や在籍学級の先生や友達に紹介するという目標を設定することで、自己有用感が高まり、意欲的に学習に取り組むことができる。

自分に関係のある国の産業について、クラスの友達に紹介することは、在籍学級の児童にとっても、日本以外の国の産業について知る「貴重な機会」になる。

3 日本語指導案

(1) 単元名

JSL社会科 第5学年「自分の国の産業を紹介しよう」

(2) 単元目標

【教科（社会科）】

- 様々な産業があることを理解し、自分に関係のある国や日本の産業に興味・関心をもつ。

【日本語】

- 産業に関わる教科の用語を理解し、「〇〇がさかんです」を用いて、自分に関係のある国の産業について紹介することができる。

語彙	表現
さかん、産業、農業、漁業、水産業、工業（機械工業、金属工業、化学工業、食料品工業、せんい工業）	・（国・地域）は、〇〇業がさかんです。〇〇を作っています。／育てています。／がとれます。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 これまでの社会科の学習を振り返り、日本の産業について確認する。 T：日本で作っているもの、とれるものには、どんなものがありましたか。 S：魚（米、自動車 など）です。	・在籍学級と同じ挨拶をする。 ・絵カード、画像など、いくつか用意する。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		2 産業の種類を確認する。 T：お米を作ることを「〇〇業」と言いました。何と言いましたか。 S：農業です。 T：農業の他にも、たくさんの産業があります。 畜産業、工業、漁業、工業【機械工業、金属工業、化学工業、食品工業、せんい工業等】 T：テレビをつくるのは、何工業ですか。 S：機械工業です。	・在籍学級での既習事項を確認する。 ・無理に言わせず、答えられないものは、教師が提示する。 ・教科書の絵（写真）を見ながら、確認する。 ・黒板に掲示した、各産業の絵を指しながら答えさせるなど、クイズ等を活用し、楽しみながら確認する。
3		3 本時の目標を確認する。 「自分の国の産業を紹介しよう。」 4 自分の国の産業について調べる。 T：みんなが住んでいた所（国）では、何をつくっていましたか。先生に教えてください。 S：お米をつくっていました。 S：自動車？ S：わからない。 ・タブレットなどで調べる。	・人（担当教員や在籍学級の友達）に教えるということを伝え、学習への目的意識をもたせる。 ・事前に学習内容を伝え、家族に聞くなどしてもよい。
4	 	5 調べたことをまとめる。 T：日本では、機械工業がさかんです。自動車をつくっています。世界中の多くの国で、日本の自動車が走っています。 ・自分の国の盛んな産業、工業についてワークシートにまとめる。	・教師の作成したカードを見せる。 ・分類などの分かりにくいところは、教師がサポートする。 ・タブレットで調べたことをそのまま書くのではなく、自分が理解できる言葉に直して書くよう伝える。 ・まとめに使う文型を用意する。 「（国）は、_____業がさかんです。〇〇がとれます。／〇〇を作っています。／〇〇を育てています。」
5		6 調べたことを発表する。 S：イエメンでは、農業がさかんです。コーヒーを作っています。 S：フィリピンは、農業がさかんです。バナナがとれます。フィリピンのバナナは、日本のスーパーマーケットにあります。	・自信をもって発表できるよう、声に出して、練習をする。

(4) 評価（評価方法）

- ・ 様々な産業があることを理解し、自分に関係のある国や日本の産業調べに意欲的に取り組んでいる。（観察・ワークシート）
- ・ 産業に関わる教科の用語を理解し、自分に関係のある国の産業について「〇〇がさかんです」を用いて紹介している。（観察・ワークシート）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 産業の学習の後半（まとめ）に、児童が関係のある国の産業を紹介することで、第6学年で取り組む、世界の国々の産業についても、意識を向けることができる。



【本モデルの活用例】

- ・ 6年社会「世界の中の日本」などの学習
- ・ 総合的な学習の時間での各国の産業紹介 など

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

- ・ 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- ・ 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 学校の様々な生活場面に適した語彙・表現を知り、部活動や行事、委員会活動等に積極的に参加することができる。
- ② 教科の内容を理解するための日本語の知識・技能の力を高め、それを運用しながら、母語や母国での学習経験を生かして、学年相当の教科学習に、支援を受けながら参加することができる。★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③ 自分の考えなどを周囲に伝えたり、母語や母国で身に付けてきた知識や経験を活用したりしながら、中学卒業後の進路に向けて学習等に取り組むことができる。

(3) 指導形態

週2回 合計2時間、自校 グループ指導

2 本単元について

「竹取物語」は中学1年生が初めて触れる、古典の基礎とも言える作品である。日本語学級に通う生徒にとっても、古典学習のスタートとして、「竹取物語」に触れることで、親しみを感じ、その後の関心や意欲になると期待できる。学年相当の物語文や説明文ではなく、他の生徒にとっても触れる機会が少なく、これから本格的な学習が始まる古典を扱うことで、国語科の学習に対する苦手意識の軽減も図れる。

また、絵本の「かぐや姫」を利用することで視覚的に理解を促す工夫ができる。ただし、物語全体では長すぎて取り扱うことが適当でない場合は、あらすじが端的にまとめられている他の資料を併用するなど、リソースの組み合わせも有効である。また、教科書の現代語訳については、生徒にとって難解な部分もあるため、リライトを準備して読みやすくする支援も重要である。

3 日本語指導案

(1) 単元名

JSL国語科 第1学年「昔のことばと現代のことばを比べよう」

(2) 単元目標

【教科（国語科）】

- ・ 日本の古典がどのようなものかを知ることができる。
- ・ 現代の文章と古典を比べ、その違いや共通点に気付くことができる。

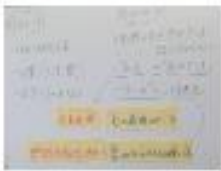
【日本語】

- ・ 現代の文章と古典を比べ、その違いや共通点を見付け、日本語で表現することができる。
- ・ 古典を学習するために必要な語句を理解することができる。

語 彙	表 現
古典、かぐや姫、竹取物語、平安時代、古典、現代文、歴史的仮名遣い、文末表現	・ ～は～だけれど、～は～です。／～も～も～は同じです。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1. これから在籍学級の国語の授業において、「古典」について学習することを知らせる。 2. 学習のめあてをつかむ。 3. 「月」について知っていることを話す。 ・ 月についてわかること ・ 「月」の鑑は、何に見えるか ・ 「月」に関係する祭り ・ 「月」をテーマにした物語等 4. 「かぐや姫」の物語について知る。 5. 「竹取物語」の冒頭部分の朗読動画を視聴する。 6. 「竹取物語」の冒頭部分の音読をする。	・ 「古典」とは何かを簡単に説明する。 ・ 出身国や地域の「月」にまつわる話等を話すことで、「月」への興味・関心を高める。 ・ 必要に応じて、教員が事前に調べた生徒の出身国の「月」に関する情報をスライド資料で提示する。 ・ NHK for School（「おはなしのくにクラシック」竹取物語等）の資料を基に、概要を確認する。 ・ 動画を視聴することで、言葉が分からなくても映像を通してイメージをもつことができるようにする。 ・ 冒頭の朗読部分のみ取り扱う。 ・ 冒頭部分を音読する。現代とは違う古典のリズムを感じられることに重きを置き、正しく音読できなくてもよいこととする。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		1 「竹取物語」の概要を振り返る。 2 「竹取物語」の冒頭部分の音読をする。 3 「竹取物語」の冒頭部分と、現代語訳を読み比べ、違いや共通点を見付ける。 T: 古典と、今の言葉で書かれた「竹取物語」を比べて、どんな違いがありましたか。また、どんな共通点がありましたか。 S: 「○○という言葉は、今も昔も同じ意味で使っています。」／「分かりません。」 4 自分の書いたワークシートを基に考えたことを発表する。 S: 「～は～だけれど、～は～です。」／「～も～も～は同じです。」	・ 前回の内容を振り返る。 ・ 現代とは違う古典のリズムを感じられることに重きを置き、正しく音読できなくてもよいこととする。 ・ 現代語訳は教科書本文をリライトしたものを使用する。 ・ 古典と現代語訳とを比べて、気づいたことをワークシートに記入し、整理して表現できるようにする。 ・ 違いや共通点を見付けることが難しい場合は、古典を読んで、意味の分かる言葉はどれか等、考えるヒントを与える。 ・ 表現に注意して発表できるようにする。 ・ 違いと共通点を表す文は、ワークシートや黒板に提示する。
3		1 歴史的仮名遣いを知る。また、古典の言葉の意味を知る。 T: 前回「今とひらがなの使い方が違う」という違いを見付けました。これを「歴史的仮名遣い」と言います。また、「今と同じ言葉でも意味が違うものがある」という違いも見付けました。 2 「かくや姫」の絵本から、物語全体の概要を知る。 3 「竹取物語」の冒頭部分を改めて音読する。	・ 前回見付けた違いの中で「今とひらがなの使い方が違う」「今と同じ言葉でも意味が違うものがある」という点に注目し、「歴史的仮名遣い」と古典の言葉の意味について学ぶ。 ・ 在籍学級で使用するワークシートや、デジタル教科書のフラッシュカード機能を活用する。 ・ 教員が絵本を読み聞かせたり、ルビを振ったものを準備し、生徒自身も読んだりしながら、物語全体について把握する。 ・ 現代とは違う古典のリズムを感じられることに重きを置き、正しく音読できなくてもよいこととする。

(4) 評価（評価方法）

- ・ 現代の文章と古典を比べ、その違いや共通点を見付け、日本語で表現している。（ワークシート・発表）
- ・ 古典を学習するために必要な語句を理解している。（ワークシート・発表）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 教科担当者と、冒頭部分の暗唱テストの有無について確認する。暗唱テストが行われる場合は、生徒自身にどこまで覚えたいか目標を立てさせ、それが達成できるよう支援する。
- ・ Teamsにおいて、生徒の在籍学級の教科チームに日本語指導担当教員が所属できるよう教科担当者に依頼する。そのチームに掲載される授業で使用するワークシートやパワーポイント等も使用しながら、在籍学級での授業に参加できるよう支援する。



【本モデルの活用例】

- ・ 古典は難しいと考えがちだが、母国で古典を学習した経験のある生徒もいる。日本語レベルに応じて少しでも触れることができれば、日本の伝統文化への興味や関心が高まる。

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。

(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- 日本語指導を通して育まれた興味・関心・意欲・学力を、学校生活や社会生活で活用することができる。
- 「読む」「書く」「表現する」「対話する」「考える」力を高め、日本語や母語を活用しながら、多様性が尊重される社会の市民として、学校、地域、社会に関わることができる。
★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- 母国での経験を生かしながら、日本語と母語を活用し、多様で潜在的な学力を高めることで、自信をもって日本での学校・社会生活を送ることができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 グループ指導

2 本単元について

消費者の権利や消費者トラブルの事例を知ることで、被害を防ぐとともに、健全な社会形成をするための消費者（＝市民）としての認識を育成することができる。

日本語の能力を考慮し、中学校の教科書も参考にしながら、「消費者生活と消費者の権利」の単元をやさしい日本語で学べるようにすることで、内容の理解や行動面での留意点について理解できるようにする。また、生徒の母語も活用することで、消費者トラブルの事例、消費者の権利、相談場所や相談機関等についても理解を促し、自身の経済活動を振り返り、市民として消費者の権利の実現に向けた行動ができる。



3 日本語指導案

(1) 単元名

「消費生活と消費者の権利」（教科：公民科 科目：公共）

(2) 単元目標

【教科（公民科）】

- 生徒が自分自身の力で、消費者問題を考え、活動することで、多様な人々が暮らす社会の一人の市民として社会に参加し、行動できる。
- 多言語での消費者相談や啓発事業に触れることで、多文化共生社会で求められる力、資質を身に付け、将来のキャリア形成・実現に役立てることができる。

【日本語】

- 消費者相談の公共機関のサイトや相談窓口で使用する日本語を知り、自分で調べることができる。
- 日本語と母語を使って、身近な消費者問題に関して解決方法を考えることができる。

語彙	表現
消費者、消費者被害、東京都消費生活センター、契約、取り消し、広告、消費者の権利と義務、クーリングオフ、18歳成年年齢引き下げ	・ 契約・消費・相談・解決します。 ・ 被害を受けました。／権利があります。 ／消費者（未成年者）を守ります。

(3) 展開

	主 な 内 容
1	・ コンビニなどで買い物をした領収書（レシート）を活用し、自分の消費生活を週ごとにまとめて書き出す。 ・ 一人ひとりの生活が消費活動によって成り立っていることに気づく。 ・ 契約の成立、モノやサービス、販売、権利と義務、消費と消費者などの用語について調べる。
2	・ 東京都消費生活相談センターのサイトを活用して、インターネットなど様々な消費者トラブルの事例を知り、ワークシートにまとめる。消費者被害の実態を捉えるとともに、その背景・原因をグループに分かれて対話し、思考を深め、消費者被害に遭わないための方法をまとめる。
3	・ 消費者保護の仕組みについて調べ、その経緯と仕組みをワークシートにまとめる。 ・ 18歳成年年齢引き下げと未成年者の契約取り消しの制度などを知り、なぜ消費者、特に未成年者は守られているのか、グループでディスカッションをすることで学びを深める。
4	・ 子供の権利尊重の視点で、未成年者の契約を取り消すことができることを知る。 ・ 東京都なども基本条例のサイトを紹介し、ふりがな付き版、英語版、中国語版、韓国語版、タガログ語版を活用する。
5 本時	・ 消費者トラブルの解決に向け、東京都の消費者生活相談センターや外国人相談窓口などを調べてまとめる。 ・ 消費者の権利を自覚し、消費者被害のトラブルを防ぐために、生徒が協力して解決に向けて取り組む。市民として消費者啓発を通して社会に参加することで将来のキャリア形成に役立てる。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 インターネットを活用し、東京都消費生活相談センターのサイトを検索し、確認する。	・やさしい日本語や母語等で相談できる窓口が都内にあることに気付く、サイトを閲覧するなど実際に活用できるようにする。
2		2 インターネットを活用し、消費者相談の方法をグループで調べ、ワークシートに記入する。 3 消費者トラブルを防止するために何ができるのか、グループで話し合い、アイデアを出し、模造紙に書く。	・自分の母語で相談できる場所があるか、電話相談か対面か、相談の時間帯、費用などについて関心がもてるようにする。 ・外国人のための相談窓口が用意されていることを知ることで、都民のために様々な相談ができる機会があることに気付かせる。 ・相談員や通訳の仕事に触れることで、多言語での外国人相談や通訳、ボランティアなどに興味・関心をもち、将来のキャリア形成への意識を高めさせる。 ・多様な相談窓口や地域の消費者啓発事業に興味・関心をもち、地域で共に生きる市民性の育成を培えるようにする。 ・母国でのポスター等もインターネット等で調べさせ、生徒が母語や母文化を大切にできるよう配慮する。
3		3 授業で使用した用語やテーマをワークシートにまとめ、やさしい日本語と母語等による単語帳を作る。 4 ポスター等の作品をグループで確認し、他のグループの作品の特長特色をワークシートにまとめ、共有する。	・事前に単語帳を用意する。 ・インターネットで関連のサイトを記録することで、今後も授業の成果を活用できるよう配慮する。 ・消費者トラブルの被害に遭わないことと同時に、消費者トラブルを防止するために母語や母文化を生かしながら、高校生として社会に参加・貢献できるように興味・関心を高め、将来のキャリア形成に繋がるよう配慮する。

(4) 評価（評価方法）

- ・ 消費者トラブルの相談方法について、日本語で理解している。（観察・ワークシート）
- ・ 消費者トラブルを防ぐために、やさしい日本語や母語で発信している。（観察・ワークシート）
- ・ 母語を生かして、相談の仕組みや方法、啓発について取り組んでいる。（観察・ワークシート）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 授業で出てきた用語や仕組みについて、日本語の「特別の教育課程」の授業等で取り上げてもらい、教科学習と日本語学習との統合を進める。
- ・ 日本語で授業の成果を発信できるように、芸術科、情報科、家庭科、日本語の「特別の教育課程」の担当教員、支援者と連携して取り組む。
- ・ 「総合的な探究の時間」と関連させ、消費者問題について教科横断的に学べるように年間スケジュールを事前に調整しておく。



【本モデルの活用例】

- ・ 高等学校・公民科「公共」学校設定科目「シティズンシップ」等における主権者学習・消費者学習において活用する。

1 対象児童について

(1) 児童の実態

- ・ 日常会話に支障はないが、学習言語能力が十分育っていない。教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 日常生活で、身近な大人や友達と日本語で円滑にコミュニケーションをとることができる。学校の行事等の活動、友達との遊びの場等に主体的に参加することができる。
- ② 教科内容の理解や文章での表現が難しい場合や間違った場合にも、学習してきた日本語の力を駆使して伝えようとし、周囲に支援を求めたり自分で調べたりしながら、学習に参加することができる。
★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③ 出来事や経験したことに関する気持ちや考えを日本語で友達と話し合い、その違い（文化的背景の違いを含む）を受け止めながら働きかけ続けることができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 複数指導

2 本単元について

小学校の児童は、想像力が豊かで、大人では思いもよらない発想で物語を考えることができる。物語作りという書くことの楽しさが感じられる活動に取り組みせることで、今まで書いたことのない長文にも挑戦できる。

日本語指導の対象となっている児童は、書くことの経験が少ないために、手立てなしでは内容的が乏しくストーリー性がない盛り上がりには欠ける物語になりがちである。そこで、対話をしながら想像したことを言葉にし、場面メモに書いていくなど、対話を通して想像を膨らませる段階を設けることが重要である。このモデル授業では、段階を踏んで、子どもの「イメージ」をやりとりで表現させ、メモとして文に書き、メモを物語の文章として組み立てるようにした。児童は場面メモから物語文に書き直す活動に、夢中になって参加していた。

3 日本語指導案

(1) 単元名

JSL国語科「たからじまのぼうけん〜気もちや ようすを あらわす ことばを つかって」

(2) 単元目標

【教科（国語科）】

- ・ 構成を考え、表し方を工夫して、詳しい様子が分かる物語を書くことができる。

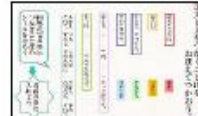
【日本語】

- ・ 人物像や様子を表す言葉を知り、自分が想像した物語を表現することができる。
- ・ 物語を書くことに必要な情報を場面メモにまとめ、物語の構成を考え、接続詞を使って、言葉や文をつなぎ、文章を書くことができる。

語 彙	表 現
・ 3 学年までの国語の教科書に出てくる「人物を表す言葉（ゆうかん・そっかしい・がまん強いなど）」 ・ 3 学年までの国語の教科書に出てくる「気持ちを表す言葉（目を丸くする・はらはらする・おちこむなど）」 ・ 3 学年までの国語の教科書に出てくる様子を表す言葉（おそろしい・すばやい・きゅうくつななど）	・ 「すると・そして・しかし・けれども・ですから・また・それから」（接続詞） ・ 「そのときです・ようやく・ついに」（物語を盛り上げる表現）

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 地図の中のどの道を通して、どんな冒険をしたいか、挿絵の道を辿りながら、思いついたことを話す。 T：島に着いたら、どの道を通して宝のところへ行きたいですか。 S：大きなへびと白クマのいる道を通りたいです。 T：とても危険そうですね。どんなことが起こりますか。 S：大きなへびが追いかけてくるけど、へびの背中に乗って走り回って…。 T：ときどきするお話になりそうですね。へびの上に乗ったまま、白熊のところまで行ったりして…。大冒険ですね。	・ 使用教科書例 国語「たから島のぼうけん（光村図書3年下）」 ・ 積極的に話せるように児童の話を聞いて聞きながら、冒険の山場ができるような事件を提案したり、質問したりしながら、話が広がるようにする。 ・ 対話を通して、話の全体的な見通しをもつことで、組み立てや順序をイメージできるようにする。
2		2 人物を表す言葉を学習し、冒険をする主人公の人物像について具体的なメモを作る。 T：主人公はどんな子どもですか。 S：こわがりだけど、我慢強い子です。 3 冒険のきっかけについての設定を簡単なメモにして書く。 T：いつ、どこで、この地図を見付けましたか。 S：学校から帰るときに、鳥がくわえて持ってきました。 T：それはすごい。わくわくする始まり方ですね。	・ 教科書の巻末にある「人物を表す言葉」の中から気になる言葉の意味を確認させ、物語の主人公として使ってみたい言葉を選ばせる。 ・ 人物像や冒険のきっかけを具体化することによって、物語の中での気持ちの変化や成長について詳しく書くことができるようにする。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
3~7	 ◆できごと・事件 書くようなこと、 不思議なことを想像して書く  	4 何と出会い、どんな事件が起こるか、そしてどう解決していくかについての場面ごとのメモを作る。 T: へびの大きさや性格についてメモを書きましょう。 S: 電車くらい長くて、太い。すごくおこりっぽいへび。 ・まだ使ったことのない「気持ちを表す言葉」や「様子を表す言葉」を取り入れて書く。	・教科書巻末にある、まだ使ったことのない「様子を表す言葉」「気持ちを表す言葉」を言葉の学習として扱う。自分の物語の中でその言葉を扱うことで、自分の言葉として今後使うことができるようにする。
8	 	5 場面メモで書いた言葉を文章として書く。接続詞や物語にふさわしいつなぎの表現について学ぶ。場面をつなぐ効果的な接続詞や表現を選んで組み立てていく。 T: メモの言葉を使って物語を書いていきましょう。こんな「つなぎの言葉」を使うと、物語らしくなって素敵ですよ。 (例) すると・そのときです・とつぜん S: すると、そのときです。大きな白熊が、とつぜんおそろしい声をあげて立ち上がりました。	・「すると・そのときです・とつぜん」など、読み手をはっとさせる表現を入れていくことで、書き手の児童自身も物語の筆者として楽しめるようにする。
9		6 推敲の仕方を知り、読み手に分かりやすい表現になるように自分で文章を直す。 7 日本語学級の仲間と読み合い、感想を伝え合う。	・自分で読み直して、訂正記号を書き入れられるように、推敲の仕方を表した資料を用意する。 ・音読の工夫（速さ、声の高さ、強さ、間の取り方、気持ちを込めた抑揚など）をしながら、音読練習をさせる。
10	 	8 在籍学級で発表し、感想をもらう。または、在籍学級での読み合う会に参加する。 	・一言感想のメッセージカードを用意し、物語のよいところを書いてもらえるように担任と打ち合わせをしておく。感想をもらえることで、書くことへの自信につなげる。 

(4) 評価（評価方法）

- ・ 構成を考え、表し方を工夫して、様子が詳しく分かる物語を書いている。（作品）
- ・ 人物像や様子を表す言葉を物語の中で使っている。（作品）
- ・ メモから物語の構成を考え、物語の文章を進んで書いている。（観察）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 学んで知った「様子を表す言葉」「気持ちを表す言葉」を取り入れて物語を完成させ、発表することにより、在籍学級の児童からも認められ、書くことへの自信をつけることができる。また、在籍学級の児童の手本となることもできる。

【本モデルの活用例】

- ・ 第2学年の物語を書く単元でも、同様に行える。
- ・ 想像力が豊かなこの時期に、思う存分想像したこと・書きたいことを日本語で表現させる。

1 対象児童について

(1) 児童の実態

日常会話に支障がないが、学習言語能力が十分育っていない。教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。

(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 自分の言いたいことを、まとまりを意識して相手に伝わるように話すことができ、委員会等の発表で下級生に分かりやすく説明したり、はっきりと指示を出したりすることができる。
- ② 学年相当の漢字を正しく読むことができ、一つ下の学年の漢字を書くことができる。また、作文に意欲的に取り組むことができる。

★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施

- ③ 他者との関係性を理解した上で、自分の意見や考え、経験について表現することができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 グループ指導

2 本単元について

日本語指導での最後の作文指導として、児童の思いを十分に引き出しながら組みませることで、自分を表現するための語彙・表現を身に付けることができる。

児童の思いやエピソードを、対話を通してできるだけ詳しく聞き出し、児童が言いたいことを表すのによりふさわしい日本語の表現に言い換えていくことが重要である。その有効な方法の一つとして、思い出したことをメモし、関連あるものをどんどんつないでいく方法（マッピング）がある。そうして出来上がったマッピングの言葉から、大切なキーワードをつないでいくだけでも、思い出は十分に文章化できる。細かに記述する力を高めるのであれば、聞き取る際に、気持ちや様子も聞きだし、詳しいメモを残すようにする。



3 日本語指導案

(1) 単元名

「卒業文集を書こう」

(2) 単元目標

- ・ テーマについて、思い付いたことをマッピングし、書く材料を集めることができる。
- ・ それぞれのエピソードについて、様子やその時の気持ちを詳しく日本語で表現することができる。
- ・ 自分で文章を推敲する方法が分かり、正しい使い方で原稿用紙に書くことができる。

語 彙	表 現
・ 第6学年までの心情を表す言葉（国語の教科書巻末「ことばのたからばこ」）を活用して書かせる。 ・ エピソードを詳しく書く際には、「様子や事物を表す言葉の中からふさわしい言葉を選んで使わせる。もしくは、推敲の際に書き換えるようにする。	・ 言い切りの文末（～だ、～である）と、丁寧な言い方の文末（～です、～ます）が混在しないようにする。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 卒業文集のテーマを選び、それぞれの項目についての思いや、きっかけとなった出来事について話す。 ・ 2 つのテーマそれぞれについて思いや出来事を、言葉にしてマッピング（つなげてメモ）する。 （テーマ例） ①「小学校の思い出」 ・ 一番言いたいこと ・ エピソード ・ 学んだこと ・ これから生かしていきたいこと ②「将来の夢」 ・ 理由 ・ 一番伝えたいこと ・ きっかけとなったエピソード ・ 夢を叶えられるのは、どんな人か ・ これから頑張っていきたいこと	・ 話がより具体的になる様な質問、様子や気持ちを引き出すような質問をする。 ・ 自分の特性や興味・関心にも目を向け、自分のよさにも気付けるような質問をする。 ・ 憧れに胸を膨らませられるように共感的に話を聞く。 ・ 共感的に聞きながら、出てきた言葉を板書する。 ・ 夢へ近付くために今からできることについて具体的なようなアドバイスをする。 ・ 児童から聞き取ったエピソードや思いを、板書でマッピング（樹形図のメモ）して見せたり、子供と同じワークシートに書きとって例示したりする。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		2 「始め・中・終わり」で、どう組み立てて書いていくか、大体の計画を立てる。 ・マッピングしたメモから、書きたいことを選ぶ。 ・ワークシートで「はじめ・中・おわり」に書くことを決めて記入する。	・簡単な構成を自分で考えさせ、ワークシートにまとめさせる。または、書きたい内容について児童と話し合いながら選択し、板書で簡単な組み立てを視覚的に示すことで、文章全体のイメージをもたせる。
3		3 選んだメモを使って書きたいことを話しながら文に書いていく。	・一文が長い場合は、短くし、接続詞でつないでいくように指導する。 ・主語と述語がねじれないよう、意識して書かせる。 ・表現したいことが上手に言えない場合は、口頭で言い換えてサポートする。
4		4 文章の推敲の仕方を知る。 ・書いた文章を読み直し、自分で添削する。	・推敲記号を学び、自分で読み直して推敲できるように指導する。
5	 「原稿用紙の使い方」 (ちびむすドリルより)	5 原稿用紙の使い方を知り、正しく書く。 6 字形を整え、丁寧な字で清書する。	・原稿用紙の使い方のきまりについて、具体例を基に分かりやすく伝える。 ・ワーク等を宿題に出し、原稿用紙の使い方に慣れるようにする。
6		7 書いた文章を、在籍学級の仲間に発表する。	・自分の書いた文章を音読することで、学びながら書いた文章表現が自分の表現として定着するようにする。

(4) 評価（評価方法）

- ・ テーマについて、思い付いたことを言葉にしてマッピングし、書く材料を集めている。（ワークシート）
- ・ それぞれのエピソードについて、様子やその時の気持ちを詳しく日本語で表現している。（ワークシート）
- ・ 自分で文章を推敲する方法が分かり、原稿用紙の正しい使い方で書いている。（ワークシート）

(5) 在籍学級（在籍校）との連携

- ・ 在籍学級で音読発表をさせ、感想をもらう。自信をもって、自分の考えや思いを発表し、それを仲間に認めてもらうことは、中学校生活への大きな自信につながる大変重要な経験になる。学級担任と相談し、在籍学級の児童に簡単な感想カードを配布する。発表後、感想カードに書いた内容を数人が発表する。



移動教室についての
取材メモ（樹形図）

【本モデルの活用例】

・ 樹形図を利用して作文を書くことは繰り返し行うことで、普段から書くことの抵抗を少なくすることができる。

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

日常会話に支障がないが、学習言語能力が十分育っていない。教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ①

日本語指導を通じて学んだことを、学校生活や社会生活で活用することができる。
- ②

教科等の学習に参加するための日本語の力を高め、日本語で教科学習に参加できる。
- ★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③

社会的活動に参加するための日本語を身に付けるとともに、進路実現に向けて、先輩の話を聞いたり、職業と資格について学んだりしながら、自らの将来像を考えることができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、通級（他校） グループ指導

2 本単元について

日本語学級で学んだことを、在籍学級での社会科の学習等に生かすことができる。また、この単元で学んだ調べ学習や発表の仕方は、他の教科の授業の探究活動で生かすことができる。

日本と自分の国の特徴（地理や気候、特産品）を比較することで、自分の国について知り、アイデンティティの形成や自己実現につながる。また、日本語で発表することに対する自信をつけ、在籍学級での学級活動等でも、自分の意見をはっきりと話すことができるようになる。

3 日本語指導案

(1) 単元名

JSL社会科 第2学年「日本の地理」

(2) 単元目標

【教科（社会科）】

- 日本の地域について、都道府県名や地域の気候や特産物について理解することができる。
- 日本と自分の国の気候や特産品などの違いに気づくことができる。

【日本語】

- 地理的特徴を表す地理の用語（「平野」「山脈」等）を理解し、地図等から読み取ったことについて話し合うことができる。
- 自分の国や日本の地域について調べ、順番を考えて日本語で発表することができる。

語 彙	表 現
地図、特産物、 雨温図、気温、 平野、山脈、 箇条書き	・～と～を比べてみましょう。 ・～より、～のほうが〇〇です。 ・（場所）で～を作っています。 ・これから～について発表します。～について調べ、～ということがわかりました。これで、発表を終わります。 ・はじめに～、次に～、最後に～です。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 自分の国の地域について知る。 ・デジタル教科書の「平野」や「山地・山脈」画像のところで、それぞれの用語を板書（ルビあり）して、「〇〇さんの国は、平野が広いですね。」等、確認する。 2 自分の国の気候や特産物などについて知る。 ・出身都市（地域）の気候や特産物などに関する教師の質問の答えをメモする。	・地図を活用する。 ・デジタル教科書で視覚的に分かりやすく示す。 ・タブレット端末や学校図書館等を活用させる。 ・分からないことは、自分の家族に聞いてもよいことを伝える。 ・都市名や地域名等を母語だけでなく、日本語で書いたり読んだりできるよう支援する。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
2		1 日本の地域について知る。 T: ○○さんが住んでいるところはどこですか。(地図で探させる) S: 東京都○○区(市・町・村)です。 T: (板書で確認) 2 日本の気候や特産物などについて知る。 T: この場所では、何を多く作っていますか。 S: リンゴを多く作っています。 T: そうですね。リンゴが特産物です。まとめて言いましょ。 S: ○○県でリンゴを多く作っています。リンゴが特産物です。	• NHK for School や地図帳を活用する。 • 自分の住む地域(東京都や区市町村)の位置や読み方を確認する。 • 生産量が分かるグラフや表を示す。 • 特産物が気候と関係することに気付かせる。 • 次の話型を示し、使うよう促す。 「○○県で～を多く作っています。」 「～が特産物です。」
3		1 雨温図を用いて日本の地域ごとの気候を比較する。 T: 雨温図を見て、～と～を比べてみましょう。～より～のほうが、雨が多いです。○と○はどうですか。 S: ～より～のほうが、雨が多いです。 T: そうですね。気温はどうですか。 S: ～より～のほうが、気温が低い(高い)です。 2 自分の国と日本について比較し、発表資料を作る。 • 資料を基に、自分の国の特産物や気候について調べる。 • モデル資料を基に、調べたことを発表するための資料を作成する。	• 学習した表現を黒板に掲示しておく。 • 雨温図を用意しておく。 • 自分の国の特産物や気候について調べさせる。 • 他の生徒が作った発表資料を例として示す。 • 母語で読み書きができる場合は、翻訳ソフトを用いて書きたい内容を日本語に翻訳させ、それを適した日本語に書き換える支援をする。
4・5	 	1 調べたことをまとめ、発表の準備をする。 ① 調べたことをまとめて書く。 T: まず、調べて分かったことを書きましょう。箇条書きにしましょう。書けたら、確認します。 S: ～には、～がありました。 ～より～のほうが、○○が多いです。 ② 発表するための原稿を書く。 • 発表で使う表現を確認する。 これから～について、発表します。～について調べて、～ということがわかりました。 はじめに～、次に～、最後に～です。 これで、発表を終わります。 • 原稿を書く。 2 発表の練習を行う。 ① タブレット端末で発表の様子を撮影する。 ② 読みづらい箇所や、伝わりにくい箇所を修正する。	• 自信をもって発表できるよう、自分が話しやすい語彙・表現に変更する支援をする。 • 発表を聞いて参考になりたい点があれば、自分の発表に生かすよう伝える。 • タブレット端末の翻訳ソフトを使ってもよいことを伝える。 • 読みやすいよう、原稿の句読点や漢字の読み方を確認する。 • タブレット端末で撮影した発表練習の動画を振り返り、読みづらい箇所がないか確認する。どのように読んだらより伝わる発表になるか考えさせる。

(4) 評価(評価方法)

- 日本の地域について、都道府県名や地域の気候、特産物について理解することができる。(スライド・ワークシート)
- 平野、山脈等、学習に必要な言葉を理解している。(スライド・ワークシート)
- 自分の国や日本の地域について調べ、順番を考えて日本語で発表している。(発表)

(5) 在籍学級(在籍校)との連携

- 社会科(地理)で、世界の気候について学習する際に、本単元で取り組んだ「自分の国」について発表する機会をもつ。または、在籍学級で日本の気候を学習する際に、自分の国の気候について発表する機会をもつ。

【本モデルの活用例】

- 生徒の能力によって、発表原稿に既習の文型や表現を盛り込む工夫をする。他の授業の際に、本授業内容をクラスで紹介することで、日本人生徒への国際理解につながる。

1 対象生徒について

(1) 生徒の実態

日常会話に支障がないが、学習言語能力が十分育っていない。教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。



(2) 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ① 高校に入学し、社会で生活していくための日本語を理解し、将来の社会生活や希望する進路について考え、自分自身で行動することができる。
- ② 将来を意識し、学習言語の習得と思考力・判断力・表現力等の学力を身に付けることができ、より高度な日本語の力を身に付けるために学習することができる。

★本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施

- ③ 高校での学びと将来へのキャリア形成を意識しながら、多文化共生社会で生きていく上で求められる姿勢や力を高め、母語・母文化を活用し、自信をもつことができる。

(3) 指導形態

週2回 合計4時間、自校 クラス指導

2 本単元について

日本語指導が必要な生徒は、高校生活のスタートにおいて戸惑う生徒も多い。自分の学校のしくみや様子、特色等について知ることを通して、学校生活を安心して、自信をもって送ることができるようにする。学校への信頼を高め、自分の居場所、学びの場、自己を高める場、交流できる場として捉えることができるようにする。

高校入学後の授業で、高校生活に必要な様々な情報を、やさしい日本語と母語を活用しながら学習することができる。また、入学時より将来のキャリアを意識できるようにすることで、主体的・意欲的に学習に取り組む姿勢を育むことができる。

3 日本語指導案

(1) 単元名

「高校のしくみや目的、特徴を知り、今後の学校生活について考えよう」

(2) 単元目標

- 高校の情報をホームページや学校案内、入学ガイダンス資料などにより収集し、高校の特色、カリキュラム、学校生活、学校行事、特別活動、課外活動などについて、日本語と母語など自分の得意な言語と概念で理解することができる。
- 高校と中学の仕組みの違いを知るとともに、高校入学後の計画を立て、高校生活の目標をもてるように、進級、卒業に向けて具体的なイメージをもつことができる。

語 彙	表 現
単位、履修、修得、必修科目、選択科目、カリキュラム、進路、将来の目標、欠時数	・単位をとります。 ・自分の将来を考えて、〇〇（科目）を選びます。

(3) 展開

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
1		1 高校のホームページと入学案内などを見て、高校の特色や仕組みについて気になるところをワークシートに記入する。	・ホームページを翻訳する。入学案内の漢字に振り仮名を振るとともに、やさしい日本語に書き換え、説明する。
2		2 中学校と高校の違いを比較し、進級や卒業の仕組み、単位、学校行事、特別活動、授業の欠席、相談室、校則などの用語をワークシートにまとめる。	・入学ガイダンスやオリエンテーション、授業の導入時に配布した資料を活用して、やさしい日本語版や多言語版を用意する。

	具体的な様子	主な学習活動	指導・支援の工夫
3		3 学校の教育の特色やカリキュラムなどの教育内容を理解し、高校でどのような学びができるのかワークシートにまとめる。 (語彙) 単位、履修、修得、必修科目、選択科目、欠時数、日本語科目等	・生徒にとって難しい言葉は、日本語訳を用意したり、ICT 機器を活用するなど、自分で訳したりできるように支援する。
4		4 高校入学から卒業までの日本語の科目や日本語と教科の統合学習、学校外の日本語資格などの学びの計画を立て、キャリア計画を作成する。	・日本語の選択科目や取り出し科目、特別の教育課程等の仕組みをまとめ、日本語能力検定試験の結果等については、単位認定されることを分かりやすく説明する。
5		5 高校に特徴的な学校行事や「総合的な探究の時間」、ボランティア活動、国際交流体験、多文化活動の部活動などの取組等について調べる。	・調べて分かったことは、母語で説明を書いてもらい、分かってもらう重要性を理解させ、自信をもって学校生活が送れるように支援する。
6		6 映像や作文を見て、高校生の活躍の様子を知るとともに、先輩などロールモデルと出会い、対話やコミュニケーションを通して、高校での学びや学校生活、体験活動、課外活動等に関心をもち、意欲を高める。	・母語ややさしい日本語で、外国につながる先輩の映像や作文を紹介する。また、課外活動等の場と連携して、母語のできる先輩と交流し、生徒の安心感や自己肯定感を高める。
7		7 高校卒業後の将来の自分について考え、進路についてのイメージをもつ。多言語でも使用できるキャリアノートに記入してまとめる。 8 多言語で使用できるキャリアノートを活用し、進路に関わる用語を理解する。 (語彙) 進学、就職、資格の取得、奨学金の資格、在留資格、進路指導部など 9 市民・部民として社会に参加し、活躍できるように、将来の夢や目標をまとめる。	・うまくまとめられない場合は、対話によって生徒の考えを引き出すとともに、校内に相談できる大人(日本語指導コーディネーター、YSW 等)がいることに気付かせる。 ・やさしい日本語版を用意し、母語で記入することもできるよう工夫する。 ・グローバルな懸け橋として、東京だけでなくとどまらず、日本や世界各地で活躍できる力があることに気付かせる。

(4) 評価(評価方法)

- ・日本の高校で使われる用語やしぐみについて学び、高校でどのような学びや生活体験などの機会があるのかを知り、まとめている。(観察・ワークシート)
- ・高校での学びや体験を通して、多文化共生社会において、将来の自分のキャリア形成について思考・表現している。(観察・ワークシート)

(5) 在籍学級(在籍校)との連携

生徒が記入したワークシート等を、学級担任や学年の教員、日本語指導のコーディネーター・担当教員・支援者等と共有し、今後の進路指導の資料とする。また、必要に応じて、保護者とも情報を共有する。



【本モデルの活用例】

- ・特別の教育課程の授業において、入学した直後に取り組む。

○日本語指導推進ガイドライン【実践編】作成委員会

＜委員長＞

都立田柄高等学校 校長 山崎 聡子

＜学識経験者＞

東京学芸大学教育学部日本語教育分野教授 齋藤 ひろみ
京都教育大学国文学科教授 浜田 麻里

＜委員＞

世田谷区立上北沢小学校	校長	三浦 健仁
羽村市立武蔵野小学校	校長	府金 博之
中野区立中野東中学校	校長	久保田 啓介
江戸川区立葛西中学校	統括校長	内野 雅晶
都立青梅総合高等学校長	校長	川口 元三
世田谷区立上北沢小学校	主任教諭	山口 千絵
江戸川区立一之江小学校	主任教諭	石山 由美
新宿区立大久保小学校	教諭	柏木 めぐみ
羽村市立武蔵野小学校	教諭	北村 舞華
中野区立中野東中学校	主任教諭	榎野 真弓
葛飾区立新小岩中学校	主任教諭	渡邊 順子
江戸川区立葛西中学校	主任教諭	星野 未帆
福生市立福生第二中学校	主任教諭	一瀬 知未
都立田柄高等学校	主幹教諭	石沢 一元
都立町田高等学校	主任教諭	角田 仁
都立青梅総合高等学校	主任教諭	永田 明久

（監修）

東京学芸大学教育学部日本語教育分野教授
京都教育大学国文学科教授
東京学芸大学教職大学院教育実践創成講座准教授

齋藤 ひろみ
浜田 麻里
米本 和弘

（事務局）

教育庁グローバル人材育成部	日本語指導担当課長	小林 智子
教育庁グローバル人材育成部	主任指導主事	三田 典子
教育庁グローバル人材育成部	国際教育企画課 統括指導主事	鈴木 真裕美
教育庁グローバル人材育成部	国際教育企画課 指導主事	笠井 淳子
教育庁グローバル人材育成部	国際教育企画課 主事	杉山 美佑紀
教育庁グローバル人材育成部	国際教育企画課 主事	宇都 和磨

小林 智子
三田 典子
鈴木 真裕美
笠井 淳子
杉山 美佑紀
宇都 和磨

「日本語指導推進ガイドライン（実践編）」

令和7年3月28日

著作権所有者 東京都教育委員会

発行 東京都教育庁グローバル人材育成部国際教育企画課